
学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD if ~イレギュラーの少年~

狂犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD
if イレギュラーの少年

【Nコード】

N1002V

【作者名】

狂犬

【あらすじ】

> 奴ら<は人を食らい、食われた人間は>奴ら<になって人を襲う。

幼い頃に家族を殺人鬼によって殺された過去を持つ主人公 上坂京也はある日、自分が通う藤美学園で、動く死体によるパニックに巻き込まれてしまう。

生き残るためにクラスメイト 高城 沙耶をはじめとする仲間たちと戦い続ける中で、彼は自らが>奴ら<と同じ存在である事を知

る。立ちふさがる異形の姿を持ったイレギュラーな>奴ら<たち。己に宿った化物の力と仲間の協力で困難を切り抜けながら、彼は戦い続ける。

学園黙示録の2次創作になります。オリジナルのキャラクター、敵キャラが登場します。

第1話「日常の終わり」（修正版）（前書き）

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEADの二
次創作となります。

大まかな流れは原作と同じですが、オリジナルの展開もあります。
オリジナルの男性キャラが主人公になります。ヒロインは高城沙耶
です。

他にもオリジナルの設定・キャラクターがいくつか登場しますので、
ご了承ください。

文章は下手ですが、楽しんでいただけると幸いです。

読みづらいというご指摘をいただきましたので、改行や文章など
を一部変更してみました。

7/26日に修正。

第1話「日常の終わり」（修正版）

俺が目を覚ましたのは、日の出にはまだ少し早い時間帯だった。当然ながら部屋の中は真っ暗である。

視線を窓の外にやると、まだ暗くて星すら見ることができくらいだった。汗を大量に吸った寝巻きが肌に張りついて気持ちが悪い。俺は枕元に置いてある携帯電話をあさった。表示は『AM3:00』となっている。

寝起きの気分は最悪に近かった。眠っている時に悪夢を見て夜中に目を覚ますのは、別にこれが初めてというわけじゃない。

悪夢　とは言っても過去の映像を延々と見るだけのものだ。だがそれが、自分にとって忘れたいほど苦い思い出だったら？

「また、あの時の夢か……」

呟いた言葉は、真っ暗な部屋の中に落ちていく。

今から7年前に起こった連続殺人事件。当時の床主市に住んでいた人間で知らない奴はいないはずだ。

『床主市無差別連続殺人事件』という名前で、テレビや雑誌でも大々的に取り上げられていた。俺にとってはつい昨日の出来事のように思い出せる。被害者の共通点も何もない。男女を問わず、場所も時間も……その全てが無差別で、規則性などが全くなかったのだ。被害者は近所で遊んでいた小学生、路地裏で仲間とたむろっていた若い男たち、夜道を歩いていたOL、散歩をしていた老人、そして俺の家族だ。

俺は唯一、犯人の姿を見て生き残った生存者である。事件が起こった日は……妹の誕生日で、家族みんなが集まって楽しくパーティを過ごしていたところに　あの女は現れた。紅くて長い髪の女は、でかいナタのような凶器で父さんの頭を力チ割り、母さんを殺し……

…俺のそばで泣いていた妹まで殺した。

怖かった、ただひたすらに怖かった。それでも俺は、父さんたちを殺した犯人が許せなくて、犯人に立ち向かった……そこから先のこととはよく覚えていない。子供の力じゃ勝てなかったのは間違いないはずだ。

目が覚めたら病院にいて、ベッドに横たわっていたのだ。

俺の家族を殺害してから犯行が止まったらしい。結局犯人は捕まらず、事件は迷宮入りとなった。

俺の家族を殺した殺人犯……あの紅い髪の女は今もどこかで生きているんだろ。あの女は狂っていた。楽しそうに……本当に楽しそうな顔で笑いながら父さんたちの頭をかち割っていた。アイツがびくびく怯えながら警察から逃げている所など想像もつかない。今も……俺の知らないどこかで、人を殺しているかもしれない。

あの狂気に満ちた女の顔を、俺は一生忘れることはできないだろう。

太平洋に面した人工100万人クラスの地方都市である床主市。

そのほぼ中心に位置する私立高校藤美学園。生徒のほぼ全員が『寄宿舎』と呼ばれる寮に住んでおり、寝食を共にしている。生徒数は多く、敷地の面積もそれに見合った広さだ。ちょっとした村くらいは大きい。

俺 上坂 京也（かみさか きょうや）は、藤美学園に通う高校2年生だ。剣道部に所属しているが、特に大会で結果を残したわけでもない。運動は得意なほうだが、成績はあまりよろしくないし、授業もたまにサボるのでどちらかと言えば問題児な部類に入るだろう。

人と違つところを挙げるなら……寄宿舎じゃなくて、学園から少し離れたとあるマンションの一室で暮らしていることだ。もちろんただの高校生がこんな高級そうなところで暮らせるはずもない。正確には、俺の義姉さんが借りているマンションだ。

一度目が覚めてしまったせいで眠れなくなった俺は、2度寝をあきらめてずっと筋トレをしていた。そうこうしているうちに空が明るくなっていたので、シャワーを浴びて汗を流したあと、制服に着替えて朝食を作るために台所へと向かう。

うちのリビングは台所とつながっているタイプで、いわゆるシステムキッチンである。今日の献立は、シーザーサラダと食パンだ。ジャムは各種取り揃えてある。盛り付けはすぐに終わり、テーブルに置いたトースターが軽快な音を立ててパンを吐き出す。小麦の焼ける香ばしい匂いがリビングに漂う。

俺はコーヒーマーカーに作り置きしてあったコーヒを飲んでいると、ドアが開いて金色の髪をしたワイシャツ姿の女性が見せた。

「ふああ……京君、おはよ〜」

リビングに眠い目を擦りながら入ってきた女性は、鞠川 静香（まりかわ しずか）。

家族を失った俺を引き取ってくれた親戚のおじさんとおばさんの一人娘で……俺の義理の姉にあたる。俺は「静香姉え」と呼び、静香姉えは俺を本当の弟のように可愛がってくれている。今の俺にとって唯一の家族だ。

「おはよう、静香姉え。頭すげえことになってじゃん。先にシャワーでも浴びてきたらどうよ?」

静香姉えの長い金色の髪はポリウームのせいもあってか、いたるところがはねている。静香姉えがぼやんとしてるのはいつもことだが、寝ぼけているせいでいつも以上にのんびりしているように見えた。

「……うーん、食べてからにするー。コーヒーちょうだい」
「りょーかい。ちょっと待っててくれ」

微妙にふらふらした足取りで着席する静香姉えは、ずいぶん眠そ
うだ。マグカップにコーヒーを注ぎながら静香姉えに聞いてみる

「ずいぶん眠そうじゃん、仕事忙しかったのか？」

「そうなの、お医者さんは色々忙しいものなのよ」

静香姉えの職業は医者である。前は大学病院に勤めていたんだが、
今は臨時でうちの校医として派遣されている。天然でどこことなく頼
りないイメージの静香姉えだが、医師としてはかなり優秀らしい。
うちではそんな感じは全くしないけど。

「ほい、コーヒー。熱いから気をつけるよ」

「ありがとう」

席に戻ってテーブル越しに静香姉えを見ながら思う。相変わらず
大きな胸だ、と。柔らかな双丘が薄手のシャツを窮屈そうに大きく
押し上げて自己主張している。静香姉えはスタイルが良い事で学校
でも有名だ。前に「カップとかいう日本人離れしたサイズを聞いた
ことがある。

これで顔も整っているんだから、現在彼氏がないのが不思議で
しょうがないが……まあ、妙な男に引っかけたら俺が責任持って
潰そう。義弟的に考えて。

「どうかしたの？」

「いや、静香姉えと一緒に暮らしてもうずいぶん経つなーって」

「そうねえ」

砂糖をたっぷり入れたコーヒを飲みながら、俺は昔の事を思い出していた。

犯人に立ち向かった俺が目覚ますとそこは白い天井だった。病院で目覚めた俺は医者に家族の事を聞いたが……俺以外は助からなかったと聞かされた。悲しくて……その日は声が枯れるまで泣き続けた。

どうして自分だけが生き残れたのか、理由は結局分からずじまいだった。凶悪極まりない殺人犯に襲われたにも関わらず、奇跡的にも俺のケガは腕が片方折れていただけで済んでいた。普通なら治るのに結構な時間がかかるはずだったが、尋常じゃないスピードで治ったことですぐに退院できた。医者がやけに驚いていたのを覚えている。

俺は人より自然治癒が早いらしく、ケガしても血はすぐに止まり、痛みも長い時間は続かない。原因はやっぱり分かってないが、便利なので深くは考えてない。

病院から退院した後は、親戚のおじさんとおばさんにあたる静香姉への両親に引き取られた。俺を実の子供のように可愛がってくれたおじさんとおばさんも、俺を引き取ってしばらくして事故で亡くなってしまった。それから俺はこのマンションに静香姉と2人で暮らしている。

「ついこないだまではちっちゃくて可愛かったのに、今は私より大きくなっちゃってるし」

「成長期つすからねー」

「最近は何を撫でさせてくれないし……反抗期？」

「さすがに男が17歳にもなってそれは恥ずかしいだろ……常識的に考えて」

「そうよねえ」。Hなゲームや本もいっぱい持っているし、君も大人になったのね」

微笑みながら言った静香姉えの言葉に、俺の背中に嫌な汗が流れるのを感じた。どうなってるんだ……ブツの偽装工作は万全だったはずだ。

「……は、はははは。な、なんのことでしょうか姉上様」

「うーん、弟の将来が心配だなあ。彼女でもいればお姉ちゃんとしては安心できるんだけど。ねえ京君、好きな子とかいないの？」

「……いませんよ？」

彼女、と言われて一瞬、1人のクラスメイト……高城の顔が浮かんだ。いやいや……ないない。頭によぎった考えを首を振って否定する。静香姉えがじーっとこっちを見ている。

「悪いけど今はそんな余裕ないぞ。俺が家事をサボり出すと若干心配な人間がいるしなー。特に料理面で」

「ちゃ、ちゃんとできるわよ……」

「と、いいつつ目が泳いでいる静香姉えであった」

「もう!」

そんなやりとりをしながら朝食の時間は過ぎていった。大切な家族との、他愛ないが楽しい会話のやり取り。普通だからこそ愛おしいもの。俺にとってはかけがえのないものだ。

「んじゃ、そろそろ行くから。洗い物はいつも通り水につけといて」

「今日も早いよね、また朝練？」

「ああ」

俺は食器を水の張ったシンクにつけながら返事をする。リビングに置いてあるカバンを持って、それとは別に紺色の竹刀袋を肩に担

ぐ。これには素振り用の木刀が2本入っており、長い間使っている。

「もうちょっと待ってくれたら、車で送って行くのに」

「いいって。んじゃ、いつてきまーす」

「はい、いつてらっしゃい」

藤美学園の校舎は小高い場所に立っている。坂の途中には桜並木があつて、今なら満開になつた桜を楽しむことができるだろう。まだ時間が早いせいか、ほとんど誰とも会わずに校舎まで到着した。俺は軽く走りながらいつものように武道場へと向かう。

「ういつすー。って、誰もいねえよな」

扉を開けたが中には誰もいなかった。人がいないのは当然で、剣道部に朝練の習慣はない。俺が許可取つて勝手に練習してるだけだ。剣道部で使っている武道場は、そこまで大きくはない。板張りの床に朝日が差し込んでおり、どことなく埃っぽい空気が漂っている。俺は軽く一礼してから中に入ると、カバンを置いて、いくつかある窓を開け終えてから鍛錬を始めた。

基礎である腕立てや腹筋などの体作りの運動は、自分の部屋で済ませてある。

俺は担いできた竹刀袋の中に入っている木刀を取り出した。良質の木で作られた木太刀きたちとも呼ぶこれは、重量約5?くらいで、普通の木刀からすると3倍以上は重い。俺はこいつを好んで素振りに使っている。

木刀を両手で構えて、振り下ろしの動作を繰り返す。最初の頃こそ振り続けるのに苦労したが、今では1時間振り続けてもまだ余裕がある。人間、慣れるものだと思う。

どうでもいい話だが、こいつを買った店の店長曰く、この木刀なら『真剣とも戦える』そうだ。どこまで本当なのかは知らない。

ぶんっ、ぶんっ、ぶんっ！

一定のリズムで木刀が空を切る。俺はひたすらに、それを繰り返す……一振り一振りに意志を込めて。

「今日も朝から熱心だね、上坂君」

ちょうど額に汗が滲んできたくらいのところで、聞き覚えのある声がかげられた。人が来ないとは言ったが、何事にも例外はある。俺は素振りを止めて、声のしたほうを振りかえった。

凜とした雰囲気を含えた黒髪の女生徒が立っていた。

毒島 冴子（ぶすじま さえこ）は、3年生で、俺の先輩にあたる女子剣道部の主将だ。物腰も丁寧で、いまや日本じゃ絶滅寸前だと思われる大和撫子って言葉がよく似合う人である。綺麗な長い黒髪と相まって和服とかすごく似合いそうだ。

「どもつす、毒島先輩」

「毎朝欠かさず……努力家だな、君は。一見すると軽薄そうに見えて、その実すごく真面目だ」

「先輩だって十分すぎるくらいに早いじゃないですか」

「私にとっては当たり前のことだからな」

俺と1歳しか違わないのに、こんなに大人びている……。俺はたまに先輩が本当に高校生なのか疑わしくなる時がある。

以前、そのことを俺は口に出してしまったことがある。その時の先輩は……。

『そうか……私が老けて見える、といたいたんだな、君は。た、確かに君よりは年上だが……』

なんか知らんがショックを受けてものすごくシユンとしていた。

先輩には悪いと思うが、普段の凜とした態度の先輩とはギャップがあつてすごく可愛かつた。あの時は土下座する勢いで謝つたっけなあ……。

「しかし……よくそんな重い木刀を軽々振れるものだな。私では持て余しそうだ」

「んー、なんか重いほうが馴染むんすよね。竹刀が軽過ぎて困るくらいなんで」

「去年の大会に君が出ていれば……いいところまで行つただろうに」

本当に残念そうな顔で言う先輩を見ると、申し訳ない気持ちでいっぱいになってくる。

俺は試合の日の朝に風邪をひいたんでどうしようもなかったのである。40 近い熱で試合どころじゃなかった。ちなみに先輩は去年の全国大会で優勝している。男子でも勝てる奴はいないほどで、正直とんでもない強さだ。

「一度、本気で仕合ってみる気はないか？」

「朝から先輩と試合とか勘弁してください……授業中に起きてられる自信がねーっす」

「ふふっ……では、また今度にしようか。それでは失礼するよ」

先輩は背を向けて武道場を出て行つた。俺もそろそろ教室に行くか、今日はもう十分身体を動かしたし。

俺は武道場の戸締まりをしてから教室へとむかつた。

「ういーっす。おはよー」

「ああ、おはよう上坂」

教室に着いた俺は、後ろの方の席で楽しそうに話していた友人た

ちに声をかけた。真っ先に返事を返してくれたのは、井豪 永（いごう ひさし）という。爽やかな感じのするイケメン君である。井豪をひとことで表現するなら、『完璧超人』だ。顔だけじゃなく、運動も勉強もかなりの高レベル。なのに性格もいい。戦略ゲーだったら軍事と内政の両方で活躍してくれそうなタイプだな。

「おはよ、上坂君。今日もギリギリね」

井豪の隣にいる女子が明るい声であいさつを返してくる。

彼女は、宮本 麗（みやもと れい）という。ロングの髪から2本だけ触覚みたいな寝癖が飛び出しているのが特徴だ。電波でも受信してんだろうか。明るくて話しやすいタイプの女の子だが、こう見えて槍術部所属の武闘派である。そこらの男よりよほど強い。

制服を押し上げる2つの膨らみは、うちの姉君に比べれば控えめだが、十分に大きく育っておりバランスがいい。そもそも静香姉えと比べるのが間違っている。あれは規格外だ。

「ありや、うちの問題児はどうしたよ、遅刻か？」

「上坂君も割と孝の事を言えないでしょ？」

「ひでえなあ……俺は小室よりは授業に出てるだろ？」

「うーん……五十歩百歩くらいだな、俺に言わせると」

「そんな馬鹿な！ 嘘だと言ってくれよ、井豪！？」

井豪と宮本とは、こうやって軽口をたたく位には親しい関係だ。休みの日には今はいないもう一人……小室を加えてみんなで遊びにいたりもしてる。

そういえば……最近、小室の奴が宮本に振られたって話を聞いたが……。

井豪と宮本が付き合い始めたというのは知っていたが、どうにも腑に落ちない所がある。てっきり俺は、宮本は小室のことを好きな

のだと思っていた。

まあ、俺に特に何がしてやれるワケでもないけど、最近元気のない小室の愚痴に付き合っただけでやるくらいはできるだろ。

キーンコーンカーンコーン。

1時限目の授業が終わってから、俺は後ろの席に座っているダチに話しかける。

「よう平野。こないだ貸した新作はどーだった？」

「あ、うん。やっとクリアし終わったよ」

この小太りな眼鏡をかけた少年は、平野 コータ（ひらの こーた）。大人しそうな外見に違わず、性格も大人しいやつである。ただ、軍隊、銃、兵器。そういったものに関してこいつはプロ並みの知識を持っているいわゆる「軍オタ」という分類の人間である。

平野の話じゃ外国で本物を撃ったこともあるというのだから筋金が入っていると思う。その分野については誰にも負けない。俺はそういう信念を持っているこいつを友人として尊敬している。

ちなみに新作ってのは、18歳未満購入不可なゲーム、俗に言うエロゲーだ。どうして俺が買えるのかは企業秘密ということだ。

俺と平野は互いにゲームの感想を語り合う。こんな風に趣味に関しては誰よりも熱く語りあえる。ちなみに平野を18禁ゲーすすめたのは俺だ。最初に一本やらせてみたら、思いのほか食い付きがよかったのを覚えている。

「あれ……平野、次の時間って数学だっけ？」

「うん、そうだよ」

「やべえ……今日俺が指名される番じゃんか……」

うちの数学教師は、日付にあわせて答えさせる生徒を指名するのだ。そして……今日は俺の番なのであるがすっかり忘れていた。宿題をやっていない俺は平野に頼む。

「平野つ、宿題を見せて……」

「あ、ごめん。今日は僕もやってない……」

「神は死んだ……いや、まだだ！」

神がダメなら女神に頼めばいいじゃないか、と思った俺は隣の席に座っている人物を見る。

ツインテールの少女、高城 沙耶（たかぎ さや）だ。雰囲気がちよつと高飛車なお嬢様っぽいんで、俺はこいつのことを「お嬢」と呼んでいる。見た目はキツそうだが可愛らしく、背もちゃんまいけど出るところは出ているから、男子の人気は高い……。のだが、父親が右翼の会長という噂があり怖がられている。俺はまったく気にしてないけどな。

「お嬢、見せてくれ！」

「イヤよ」

「まだ何も言っていないじゃないか……」

面倒くさそうに拒否されてしまった。ツンデレで言うツンの時期だな……それにしてもなんと早い反応だ、誠意が足りなかったのだろうか。

「宿題なら見せないわよ？」

「女神にも見捨てられたか……いや、ただとは言わねえよ、飲み物を一本おごろうじゃないか！」

「そういうことじゃなくて……」

「何がいい？ コーヒーか、紅茶か？ 次の時間になったら走って

買ってくるぞ」

お嬢は呆れたようにこめかみを押さえながら、ため息をついた。机に置いてあったノートを俺に差し出す。

「……はあ、今回だけだからね。次は自分でやってきなさいよ、脳筋」

「さんきゅー！」

俺はノートを受け取って早速写し始めた。お嬢の言葉は相変わらずツンツンしてるが、まあ慣れた。ノートにシャーペンをガリガリと高速で走らせていると、平野が小声で俺に話しかけてきた。

「そついえば……上坂君は高城さんに普通に接してるよね、怖くないの?」

怖くない……ああ、お嬢の家の事か。確かに右翼の会長の娘さんってのはすごいと思うが……俺にとってはあの紅い髪の女のほうがよっぽど怖かった。トラウマとして刻まれて、今でも夢に見るほどに。

「怖くはないな。会ったこともない相手をやたら怖がってもしようがないだろ。親は親でお嬢はお嬢だ……普通に良いヤツだと思っしょよ」

「……やっぱりすごいね……上坂君は」

「そうかあ? よし、写し終わったぜお嬢、ありがとう助かった！」

「……ミルクティー、1本ね」

「了解」

お嬢にノートを返却したところでちょうど教師が入ってきた。ノート返した時に、お嬢が一瞬笑ったように見えたのは気のせいか。

「お嬢、今笑ったか？」
「べつにー」

やっぱりツンしかないよなあ……そんなことを思いながら授業が始まった。

いつも通りの日常、にぎやかで楽しい日々がこれからもずっと続いていく……俺はそう思っていた。

平穏な日々が崩れ始めたのは、昼下がりのことだった。

第1話「日常の終わり」（修正版）（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

文章や改行などを少し変えてみましたが、いかがでしたでしょうか。よければご感想をくださると嬉しいです。

第2話「生き残る為の決意」(7/28修正版)(前書き)

前回の続きになります。

読みづらいついとうご指摘をいただきましたので、改行や文章などを一部変更してみたところ、結構文章量が増えましたので新しくあげなおしました。

7/28に修正

第2話「生き残る為の決意」(7/28修正版)

昼を過ぎた時間は、眠気を誘う魔力があると思う。暖かな春の陽気がまぶたを重くして、ほどよく満たされた食欲がそれに拍車をかけるからだ。現に俺の他にも眠そうなのが何人かいる。

隣の席に座っているお嬢は退屈そうにしているものの、わりと真面目に授業を受けているようだ。綺麗な文字でノートをとっている。さすがは優等生だ。

今日は悪夢に起こされたせいで微妙に寝不足だったのも手伝ってか、俺の意識が早くもなくなり始める。

これなら小室と一緒にサボればよかつたな……。うとうとしながら授業を聞いても意味がないので、俺は睡魔に抗うことをやめ、机に身体を突っ伏して眠り始めた。

どれくらい、時間が経ったのだろうか。5分くらいだった気もするし、30分くらい寝ていた気もする。

俺は不意に訪れた……奇妙な違和感で目を覚ました。背中を手で触ってみるが、何か悪戯されたような形跡があるわけでもなかった。背中に氷を入れられたようにぞくっ、としたのだが……後ろにいる平野はそういうことをする性格じゃない。

隣の席に座っていたお嬢が呆れたような顔で俺を見ている。

「なんだ、やっと起きたの？ いいご身分ね」

「なあお嬢……なにかあったか？」

「な、なによ……急に真面目な顔して。特に何も無いわよ。アンタがぐっすり寝てるくらいでしょ」

気のせい……だったのだろうか。背筋を走った嫌な予感 直感
とも呼ぶべきものは。

眠気は完全に飛んでしまっていて、俺は寝直す気にもなれず教室をぼんやり眺めていた……ちょうどその時だった。俺の友人である小室 孝（こむろ たかし）が、勢いよく教室のドアを開けて飛び込んできた。

「何だ小室、授業をサボるだけじゃ足りずに授業の妨害まで!？」

教師が注意するが、小室は構わずにまっすぐ宮本のほうへむかう。その顔に浮かぶ表情は、明らかに焦っていた。

小室はどちらかと言えば、『不良』にカテゴリされる生徒だ。授業もよくサボってるし、教師には反抗的な態度をとることもしばしば。斜に構えたような態度も、教師たちにそういう印象を与えてしまっている。

それでも俺は、小室は良いヤツだと思っている。友達タチを大切にしているし、売られた喧嘩は買うが、むやみやたらに喧嘩を吹っ掛けるわけでもない。最初は若干とっつきづらいと思ったが……俺も人のことは言えないしな。

「来いよ、逃げるぞ!」

「いったい何よ、授業中……」

「いいから来いっ!」

宮本の腕を引っ張りながら、語気も荒く言う小室を見て、周りのクラスメイトたちがざわめき始めた。退屈極まりなかった授業中に突然暇つぶしの種が降ってきたのだから、食いつかない人間のほうが珍しい。井豪と宮本が付き合っている、という噂はみんなよく知っているの、それ関係だと勘ぐっているんだろう。

「な、何してんのよおっ、小室!？」

「落ち着けて、お嬢」

幼なじみである小室の奇行に、お嬢は驚いて立ち上がっている。俺はお嬢をなだめながら、少し様子を見ることにした。

俺は小室がやけに焦っているように見えることが気になっていた。だいたい、授業中にこんな風に悪目立ちしてまで宮本を連れ出す理由が思いつかない。小室はそういう馬鹿じゃないんだ。『何か』あった……そう考えるべきだろうな。

井豪が、無理に宮本を連れ出そうとする小室に詰め寄った。

「どういうことだ、孝？」

「校門で人が殺された……ヤバいぞ」

「本当なのか……？」

「こんなウソついて何の得がある？」

小室は嘘偽りのない真剣そのものの表情で井豪に言った。それは小室の言ったことが限りなく真実に近いことを示している。井豪は小室の言葉を聞いて驚いているようだった。

「ちよつと、なんなのよ……もう！」

興奮したように宮本が小室の手を振り払った。宮本からすれば、いきなり幼なじみが授業中にやってきて「逃げるぞ」だからな。納得できなくて混乱するのも仕方ない。

パンツ！

やけに渴いた音が教室に響いた。

小室が宮本の頬を叩いたのだ。小室は加減する余裕もなかったのか、結構力が入っていたらしく若干宮本の頬が赤く腫れている。宮本は叩かれた頬を押えて呆然としていた。

「な、何……?」

「いいから、言うことを聞け!」

必死。小室の様子を表現するならその言葉が相応しいだろう。

どうやら、事件が起こってるらしいのは間違いなさそうだ。小室はそれを知って、宮本たちだけでも逃がそうとしているらしい。

井豪は少し考えていたようだったが、小室の様子を見て本気だと察したようだ。井豪は教師に簡単な言い訳を残すと、小室と宮本を連れて教室から出て行った。

「……さて、どうすつかねー」

「ね、ねえ……上坂君。どうなってるの?」

平野が俺に不安そうな顔で聞いてくる。平野なりに小室の様子が普通じゃないことを感じたのだろう。俺は知った情報を簡単に伝えることにした。

「小室を信じるなら、校門で殺人があつたらしいな……本当ならやばい」

「そんな馬鹿な……」

平野の驚きは当然のものだ。いきなり教室でこんな話を聞かされても、荒唐無稽が過ぎるってもんだ。小室の性格を知っていなければ、笑い話にしかならない。

「小室のやつ、嘘をついているようには……見えなかったわね」

「あいつがわざわざ嘘をつく理由がねーしな。だったら巻き込まれる前に逃げるか、ガセならガセで構やしねえ……どうせ欠席がひとつ増えるだけだ」

「まあ、そうね……危険があるなら早めに動いたほうがいいわ」

「あ……ぼ、ぼくも行きます」

「じゃあ決まりだな」

俺は適当な言い訳を教師に告げると、教室の後ろに置いてある竹刀袋を肩に担いでさっさと教室をあとにした。小室の話が真実ならいざという時、武器があったほうが心強いだろう。

あの後、俺の他に動きを見せたのは平野とお嬢だけだった。俺からやや遅れて、2人は教室から廊下に出てくる。俺は廊下を見回してみるが、近くに小室たちの姿はなかった。もう遠くへ行ってしまったのだろうか。

「小室たちはもうどこか行っちゃったか」

「小室つたら……なんで……宮本だけ……」

「お嬢、どーしたよ？」

「……なんでも、ないわよ」

お嬢が呟いた言葉には嫉妬の色が混じっていた。小室は井豪と宮本だけを連れて逃げたのである。お嬢としては小室に置いて行かれたのがショックだったんだろう。

お嬢は小室の幼なじみで、おそらくだが……小室に好意を持っている。好きな相手に置いて行かれたらそりゃ怒る……。

そこまで考えて、俺の心が一瞬だけざわめいた。

……はっ。らしくねーな上坂京也、お前も嫉妬かよ？ いやいや、ガラじゃねーだろ、俺のキャラを考えるよ常識的に。

俺は胸に降ってわいた黒い気持ちを振り払うように、頭を振った……今は余計な事は考えないほうがいい。今の俺に必要なのは冷静な判断力だ。

「……はあ、あたしの他が脳筋とデブオタだけなんて」

「あ、あの……これからどうします?」

「とりあえず移動しようぜー。考えるのはそれからでもいいだろ」

「そうね。とりあえず近くで空いてそうなところ探すわよ」

俺たちは、空き教室を探して駆け出した。それからいくつかの教室を調べて、ようやく空き教室を見つけて教室の中へ入る。校内放送のアナウンスが流れ始めたのはちょうどその時であった。

『全校生徒・職員に連絡します! 現在、校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください! 繰り返しします! 現在、校内で暴力……』

放送する声には、焦りと恐れが混じっていた。情報を伝えようとする早さを優先するあまり、聞き取りづらい箇所があった。突如、放送にノイズが入る。

『ギヤアアアアッ!! 痛い痛い痛い……た、助けてっ、し、死ぬっ! ぐわあああああ!!』

「うわ……最悪」

「小室の話は本当だったな……全然嬉しくねーけどよ」

男の断末魔とともに、放送は終わった。

学校の全てに今の放送が伝わったことで、静寂が訪れている。昼間の人がいる学校ではあまりにも不自然な静かさ……嵐の前の静けさ、とはよく言ったものだ。

『わああああああああ!!』

一斉に上がったのは絶叫だった。耳が痛くなるほどの叫び。教室の外から大量の生徒たちが走る足音が聞こえる。あまりにも人数が多すぎるせいで、足下が揺れて地震が起こっているんじゃないかと錯覚しそうになる。

恐怖に支配された人間が、我先にと逃げ出そうとしているのだ。悲鳴が上がり、怒号によってかき消される。ドアを開ければ見るも無残な惨状が広がっているだろう。

「あんな人の波に巻き込まれたら、無事でいる保証はないわ……」
「一種の恐慌状態ってやつか。焦ってもしゃーないし、ここでしばらくやり過ごしてから逃げるか」

「アンタと同じ考えてのが癪にさわるけど……同感ね。落ち着いてから移動しましょう」

「な、なんとか、逃げ込めてよかった……」

人の群れが起こす地響きのような音は、波がひくようにゆっくりと遠ざかっていった。

まだ、悲鳴や絶叫が聞こえるが……いつまでもここに引きこもっているわけにもいかない。俺たちは逃げるために意を決して空き教室から廊下に出た。目の前に広がっていた光景は、想像の遙か上をいくものだった。

「おいおい…… B級のホラー映画かよ……」

「人が人を食ってる……?!」

「悪い冗談もいいと……」

俺たちは、三者三様に反応する。ケガした生徒が転がっているくらいなら想像の内だったが、まさか死体まで転がってるなんて思わないだろう。しかも……身体の部位が獣に食われたように欠損して

いる状態で。

廊下は、血で濡れていた。真っ赤なペンキを無造作にまき散らしたかのように広がっている。オブジェのように死体が打ち捨てられている様は悪夢以外の何物でもない。そして、極めつけに異常なのは……。

「ぎ、ぎゃああっ、やめて……こないでっ!」

男子に首筋を噛みつかれて血を流しながら、女子生徒が絶命する。顔を恐怖でひきつらせ、ビクビクと身体を震わせながら泡を吹いて倒れる。

「……アー」

噛みついていた男子生徒は口の端から血を流している……正気の沙汰じゃない。顔色は悪く、瞳に光はない……死んでいるようにしか見えず、それはまさに動く死体だった。こいつもこいつで足や腕の一部が虫食いのように欠けているのだが、痛みを感じているそぶりは全くない。

惨劇を目の当たりにした生徒たちが、パニックを起こして逃げだしていく。中にはどこから持ってきたのか金属バットで死体と戦っているやつもいるが……慣れない武器を振り回しても意味がない。すぐに死体に食われて悲鳴を上げる。

そして、死んで倒れていたはずの人間が……動き出した。さっき見た奴と同じく目に光はなく、低いうめき声を上げながら、周りにいた人間に襲いかかっていく……。

お嬢と平野の顔色が悪い。当然だ、こんな状況で落ち着いてられるワケがない。

呆けてる場合じゃない……生き残りたいなら冷静になれ。どうするべきだ、考えろ、考えろ、考えろ……。

俺は爪が手のひらに食いこむほどに強く拳を握りしめた。大きく深呼吸をして、頭をクリアにする。

いつも通りでいこう。俺はそばで固まったまま動かないお嬢と平野の肩をぽんと叩く。

「……おいおい、2人ともいつまで石化食らってんだ。ほら、さっさと逃げようぜ、今なら通り抜けられる」

「そうね……」

「う、うん……」

我に返った2人を連れて、俺は不気味な動く死体である>奴ら<から逃げるために廊下を走る。俺、お嬢、平野の順に走りながら言葉を交わす。

「ど、どこに逃げます?」

「アンタ達はとうするつもりだったのよ」

「ま、まずは職員室に知らせ行って……寄宿舎に」

「論外ね。学校の教師風情がどうにかできると思っの?」

「で、でも……こんな……」

平野の意見はごく当然のものだ。今も異常な状況に怯えているのが手に取るように分かる。

ああ……平野の反応が一般的なんだろう。この状況で普通でいようとする俺こそ……異常なのかもしれない。

教室棟から出た俺たちは、渡り廊下に着いた。建物と建物を繋ぐ橋のような場所である。ここは道が2つあり、右に行けば職員室に行ける。

「ほら、平野。アンタと同じ考えの連中が、職員室のほうに行ったわ」

お嬢が右の道の先に視線をやる。そこには助けを求めて、職員室のドアを叩く男女たちがいた。何度も何度も……必死でドアを叩き続けてようやくドアが開いた。彼らの顔が安心して満たされ……だがそれも次の瞬間かき消された。

中から出てきたのは 奴ら と化した教師たちだった。

助けを求めた生徒たちは驚いて固まっている。無防備なまま、頭を掴まれて首筋から食われ始めた。声にならない悲鳴を上げながら……死に絶える。

「ひッ……!!」

「ありゃ突っ込むのは自殺行為だな……教師も死んでるぞ」

「アンタはどうするつもり、上坂？」

問いかけるお嬢を見ると、ほんのわずかだが足が震えている……やはり怖いのだ。

「俺は身内がいるから、保健室に行きたいんだが……」

「保健室？ だったらこのまままっすぐ行って下まで降りれば……」

「……いいのか、お嬢？ 俺のわがままだぞこれは」

「……家族を失うのは、辛いじゃない」

考えたくもないが……こんな状況だ。ただの寄り道になってしまふ可能性は十分にある。それでもお嬢は、俺の家族のために行こうとそう言ってくれたのだ。恐怖に支配された状況で、俺は胸の中に初めて温かい気持ちが生まれたのを感じた。

「……ははっ、お嬢っていいヤツだったんだな」

「な、ななな何言っちゃってしてくれてるのよ!? アタシは天才だから唯一戦力になりそうなアンタがいなくなる危険性を考えて……」

「よしよしよし。いい子いい子」
「気安く頭を撫でんなっ！」

お嬢は真つ赤な顔で、頭を撫でていた俺の腕をはたき落とした。恥ずかしさに頬を赤く染めたまま、お嬢がびしっ、と俺を指差す。
「あたしは生きたいわけ！ だからアンタについていくの！ よくつて!？」

「おう、分かったよ。平野、悪いけどお前も付き合ってくれるか？」
「うん。ひとりでいるのは怖いし……」
「それじゃ決まりだな。さっさと進もう」

俺たちは渡り廊下をまっすぐに進んで、となりの棟へと移った。ドアを閉め、外の>奴ら<が入って来ないようにする。

こちらの棟には、家庭科室など実習系の授業で使う教室を中心に配置されている。保健室などもこの棟にあるので、静香姉えは多分そこにいるはずだ。

「あの……高城さん。校則違反ですけど、携帯電話を持ってないですか？」

「アタシは優等生よ。持ってたとして……どこにかけるつもり？」

「け、警察に……」

「やっぱりバカねあんた。これだけの騒ぎよ、誰も電話してないはずないじゃない」

誰もが真つ先にとる行動だ。誰だつてヤバい時は警察に電話する……普通ならすぐにでもパトカーが来ているはずだが、その気配は全くない。つまり……警察が来られないほどの異常事態つてことだ。

「サイレンの音ひとつ聞こえねーつてことは……」

「町中で、こんな騒ぎが……」

「多分ね……ねえ、上坂。アンタは持ってないの、ケータイ？」

「俺はどちらかって」と不良だからな、持ってるぞ」

「行く前に、アンタの身内に電話かけてみたら？ 繋がらないかも
しれないけど……」

「おお、その手があったか！」

やはり俺もたいぶ混乱してたらしい、一番基本的なことを忘れていた。校則違反万歳。俺はポケットから携帯を取り出して静香姉えの番号にかける。

トゥルルルル。

機械的なコール音がやけに長く感じる。今は一秒だって惜しいのだ。焦りで手に汗が浮かんでくる……数秒経って俺のよく知った声が聞こえた。

『は、はい鞠川ですー』

「もしもし……静香姉え今どこだ、無事か!？」

『あつ京君、よかった。無事だったのね。今は保健室にいるんだけど……』

「わかった。すぐに行くから、そこで待って……」

何の前触れもなく、突然に通話が切れてしまった。

画面が真っ暗になっている……どうやらバッテリーがなくなったらしい。そっぴや最近充電した記憶がなかったこと思い出して、俺はがっくりとうなだれた。

「いつも使わないからって油断してた……」

「でも、とりあえず……無事みたいね。ていうかアンタの身内って……鞠川先生だったの？ しかも静香姉えって……」

焦っていつもの調子で名前を呼んでしまったことを思い出した。普段学校では鞠川先生、上坂君、で呼ぶようにしている。余計な誤解を招かないようにするためだ。お嬢と平野が、今にも笑い出しそうな顔で俺を見ている。

「上坂君って、見た目怖そうだけど意外と中身はギャップあるよね」「意外ね〜、上坂ってシスコン?」

「う、うっせえ黙ってるお前ら。さっさと行くぞ」

「そういえばこのこの2階は……」

「どーしたお嬢?」

お嬢は何か思いついたようで、2階の通路を指差した。この先は実習系の教室が並んでいるはずだが……。

「先に寄るところがあるわ。あそこなら武器になりそうなものがあるはずよ」

「やっぱ俺一人じゃ頼りねーか? 木刀は2本あるから、いざとなったら平野にも戦って……」

「……アンター一人に無茶されられないでしょ……バカ」

「あ、悪いお嬢。よく聞こえなかった」

お嬢の声は呟くような小ささだったので、上手く聞き取れなかった。俺はもう一度聞こうとするが、はぐらかされてしまう。

「何でもないつ。脳みそまで筋肉なあんたはまだしも、でぶちゃんに木刀持たせたってしょうがないでしょ」

「た、確かに僕は……運動苦手ですけど……」

「だったら文明の利器を使わせてもらおうよ」

お嬢の狙いは工具なんかがある「技術工作室」だったようだ。
俺は、ドアをゆっくり開けて中を確認する……誰もいない。人間も>奴ら<もどちらの姿も見えない。使われていないイスが無造作に長いタイプの机に置かれており、天井からは電源ケーブルが伸びている。

「よし、大丈夫そうだ。入ってもいいぞ……平野、鍵閉めておいてくれ」

「うん、わかったよ」

お嬢と平野が入るのを待って、俺は平野にドアの力ギを閉めさせた。これで少しは>奴ら<が入ってくるまで少しは時間を稼げるはずだ。

お嬢は棚にあった工具や機械なんかを急いで集めると、手近な机の上にそれを置いた。電動ドリル、ドライバー、ペンチやレンチ……技術工作室だけあって工具の類は多いようだ。

俺はその中で見慣れないものを見つけた。小型のサブマシンガンみたいな形をした……銃のようなものがある。床主市にはガンショットがあつたりするが、それでも学校に置いてあるはずはない。どこかで見えた記憶はあるんだが……どこだっけ。

「何だそのサブマシンガンみたいなの？」

「釘打機……ガス式か！」

「ああ……昔映画で見たことあるな。でも、映画とかだともっとゴツイのがついてなかったっけ」

「映画みたいなコンプレッサー式なんて、重くて持ち歩けないでしょうが。バカじゃないのー」

「こんぷ……？ まあいいや。平野、使えそうか？」

「ちよつと待つて。今調べてみる」

「……できるだけ急ぎで頼むぜ」

廊下のほうに見える血まみれの姿。動く死体の>奴ら<は不気味にうめきながら歩き回っている。ドアに付いている窓からは複数いるのが確認できた。

「ちょ、ちよつと……もうそこまで来てる!？」

俺は肩に担いでいた竹刀袋から、1本だけ木刀を取り出した。手に伝わる木刀の確かな重みが、今は何よりも心強い。残りが入った竹刀袋をお嬢に手渡す。

「お嬢、それ持つてて」

「なんでアタシが……つて、重ッ! ただの木刀でしょこれ……なんでこんな重い!？」

「下がっててくれ……俺が何とかするから」
「な、なによ上坂のクセに……わかったわよ」

お嬢はぶつぶつ文句を言いつつも、素直に従ってくれた……よし、これで思い切り暴れても巻き込まずに済む。俺は木刀を前に突き出すようにして構える。

ドンッ、ドンッ!

扉はカギをかけてあるが……ギシギシと軋み、今にもはじけ飛んでしまいそうだった。窓にヒビが入っているのが見える。俺たちがいることに気付いた>奴ら<が力任せにドアを破ろうとしているのだ。このままではドアは壊れ……すぐに>奴ら<が中へ入ってくるだろう。

ドクン、ドクンッ!

心臓の鼓動が跳ね上がる。内臓が今にも口から飛び出してしまいうさだ。逃げる、と脳内で警報が鳴り響く。相手は動く死体……真正銘の化物だ。勝てるはずが……。

よく見ると、木刀を持つ俺の手が震えていた。武者震いなんて格好いいものじゃない……ただの純粋な恐怖からくる震えだ。

「か、上坂……？」

不安そうなお嬢の声が聞こえた。高城 沙耶……頭は良いけどプライドが高くて、ちよつと生意気なクラスメイト。俺が……ほんの少しだけ気になっていいる存在。俺よりも小さくてか弱い少女が後ろにいる。

目を閉じて……俺は自分へと問いかける。

家族を失ったあの日、俺だけが1人生き残ってしまったことを知り、もう2度と失いたくないと思った。だから、強くなるうとしたがむしゃらに身体を鍛えて、剣道を始めた。

なのに……今の俺はどうだ？ 何の為に今まで鍛えてきた？ 俺はこの子を守りたいし、失いたくない。

好きな女すら守れずにガタガタ震えている俺は、必要無い。今ここで死ねばいい。震えるよりも剣を振れ。戦わなければ……失うだけだ。

己を叱咤激励し、カツ、と閉じていた瞳を開ける。手の震えは止まっていた。後ろにいるお嬢に大丈夫だと示すようにジェスチャーをする。

動く死体……元は人間だ。ついさつきまで……俺と同じ人間だったはずだ。

死にたくなかったらうな。そうだよな……でも、俺だって死にたくない。死なせたたくない。だから俺は、これからお前たちを殺す。謝りはしない。いくらでも恨め……それでも俺は……！

「失いたくねえんだよ……」

だから戦おう。動く死体がどうした、あの赤い髪の女のほうが……
よほど怖かった。動かなくなるまで、コイツで殴って、もう一度
動かないようにしてやりやあいだけの話だ。

ガシヤアアンツ！

「い、いやあああつ！？」

ドアが壊れて、廊下にいた 奴ら が教室へとなだれ込んできた。
お嬢の悲鳴が上がるのと同時、俺は勢いよく前に踏み込んだ。

> 奴ら<はゆっくりと無防備に前進してくる。動きそのものはひどく遅い。顔や身体にガラスが刺さった奴もいるが……やはり気にした様子はない。痛覚がないのだろうか。

まずは、先頭で入ってきた奴に目かけて木刀を振り下ろす。真上から全力で振り下ろした木刀が>奴ら<の頭にぶち当たり、生々しい音を立てて 奴ら の頭が碎ける。血を噴き出しながら>奴ら<の身体が地面に倒れた。

「次ツ……！」

近くにいたヤツの脇腹に向かって全力で叩き込む。ミシミシと骨を砕く感触と共に>奴ら<の身体が転がっていく。普通ならこれで立ち上がるのも無理なはず。それでもしばらくすると……また起き上がってきた。

頭を潰したヤツは動かなくなっている……それなら、まだやれる。俺は木刀を構えなおした。

「ちっ、肋骨折れたはずなんだが……やっぱり普通じゃねーな」
「っ、強っ……あんだ、ただの雑魚じゃなかったの？」

お嬢は驚いていた。剣道部所属とはいえ、俺がまともに戦えるとは思ってなかったんだろ。実際……さっきまでそうだった。それでも俺は減らず口を叩く。

「いや、雑魚だよ。うちの先輩には一度も勝ったことがない。まあ……それ以外の奴と試合して負けたこともねーけどな！」

俺が戦っている間に、平野は釘打ち機を使おうと後ろでガチャガチャとやっている。自分の友達を信じろ、あいつなら必ずやってくれるはずだ。俺は頭を潰すことを決めて 奴ら に木刀を叩き込んでいく だがいかんせん……数が多い。このままだと、ジリ貧だ。

「ひ、ひらのお……まだなのっ？ このままじゃ上坂が……」
「できた」

俺に噛みつきこうとした 奴ら が、いきなり血を噴いて倒れた。頭に刺さってるのは、釘である。俺が後ろを振り向くと、平野が改造した釘打ち機を構えていた。

「ははっ！ すげえぞ平野。この短時間でよくもまあ！」
「即席だけど十分イケるよ」
「よっしゃ、このままコイツら片づけるぞ！」
「了解！」

平野の釘打ち機が、釘を吐き出す度に、奴らくの頭に風穴が空く。撃ち漏らした奴らくは俺が片づ端から頭を潰してとどめを刺す。

「お嬢、使えそうなモン適当な袋に詰めておいてくれ！」

「だ、だからアタシに命令しないでよっ！」

「じゃあ約束だ、俺はお前を守るから！」

「はあっ!？」

「協力するんだよ、生き残る為に！ お互い足りねー部分を補う…

…お嬢は頭で俺らは力、それでどうよ！」

「ああもう……わかったわよ！ 勝手に死んだら許さないからねっ
！」

「死なないし、死なせねーよっ！」

釘と木刀の乱舞するなかで、奴らくの数は減っていき、動いているのは俺たちだけになった。あとは移動するだけである。

ジリリリリリリリリ！！

警報が鳴り響く音を聞きながら、俺は木刀についた返り血を振り払う。

「か、火事？」

「人が死にまくってんだから今更だけどな……誰か戦ってんのかね」

「ほら、何してんの平野、バッグ持って！」

警報に驚いている平野にむかって、お嬢が工具や釘などを詰めたバッグを渡す。

「あ、あの……高城さん、ひとつ聞いてもいいですか？」

「なによ？」

「どうして……僕も……上坂君と違って……僕は完全に足手まといだったのに」

「……別に。大した理由なんてないわ」

「まあ、お嬢はツンデレだからなー。素直に見殺しにするのが嫌だった、って言えばいいものを。優しいねえまったく」
「べ、べつにそんなんじゃ……」

お嬢は優しいと言われたのが恥ずかしいのか、ちよつとだけ顔を赤くしてそっぽを向いている。可愛い反応だと俺は思った。

「平野、お前は足手まといななんかじゃねーよ。自分で危険だつて判断して教室からここまで来たし、今だつてお嬢や俺を守る為に戦ってくれただろ」

「それは……武器があつたからで……」

「武器持つたつてダメなヤツはダメなんだよ。映画でもあるだろ？武器持つても開始3秒で殺されるヤツ。お前は十分強いんだから自信持てよ」

「上坂君……」

平野は驚いたような……でもどこか嬉しそうな顔で俺を見ている。なんでだろう、俺はすごく恥ずかしいことを言ってるような気がしてきた。

「時間食つちまったな。急ぐぞ……静香姉えが心配だ」
「そうね……急ぎましょ」

こうして新たな武器を手に入れた俺たちは、生き残る為にお互いの力を合わせることにしたのである。たった1人の家族の無事を願いながら、俺は技術工作室をあとにしたのだった。

第2話「生き残る為の決意」(7/28修正版)(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

以後、このような形で今まで上げた分は修正版を書いていく予定です。

続きをお待ちの方には申し訳ありません。

第3話「イレギュラー登場」（修正版）

技術工作室を出た俺たちは廊下を走って保健室へと向かっていた。>奴らくに出会ったびに頭を潰すのは骨が折れるので、倒すのは最低限に留めている。階段の前にいた>奴らくがこちらを向く。

俺はすかさず>奴らくを木刀で押して転ばせると、階段の下まで派手に転がっていった。壁にぶつかつたまま動かなくなったので、起き上がる前に脇を走って降りていく。

なんでこんな面倒な事をしているのか、というのは足を止めたくないからだ。今は急いでいるし、この先どれだけの数の>奴らくと戦うことになるのかわからない。平野の釘打ち機だつて弾が無限にあるわけじゃないからな。

1階に降りたところで、お嬢が提案する。

「ちょっと待って。試しておきたいことがあるの」

言いながらお嬢は、近くにあった水道の流しの影に身を隠した。俺と平野も同じようにする。水道の向こうには>奴らくがいた。どうやらこつちには気づいていないのか、棒立ちの状態だった。

「どーするんですか？」

「しっ、黙ってて……」

水道には、水の入ったバケツと雑巾があつた。お嬢は濡れた雑巾を 奴ら にむかつて投げつける……後頭部に当たつたが、何の反応もない。相変わらず、不気味にうめいているだけだ。

「ふーむ……」

今度は近くにあったロッカーに向かって雑巾を投げる。

ガシャン！

雑巾がぶつかると 奴らは音の聞こえた方向に向かって直進し始めた。そのままバカみたいにロッカーにぶつかり続けている。

「なるほどな……あいつら音にしか反応しないのか」

「そう、自分の身体に物がぶつかっても反応しない……つまり痛覚とかないのよ。おそらく視覚とかもないわ」

目が見えないと分かったのは大きいな。要するに、でかい音さえ立てなければやり過ぎせるということだ。こんな状況でも生き残る為に、奴ららの特性を調べるお嬢はやはり頭が良いのだろう。

「熱とかは……どうなんでしょう？」

「生き残ってりゃ嫌ってほど試す機会はあるさ、さっさと抜けちまおう」

俺たちは音を立てないように、奴ららの脇を抜けて廊下を進んでいく。ほどなくして『保健室』と書かれたプレートが目に入った。

周りに、奴ららの姿はない。開きっぱなしになっていた保健室のドアから中へ入った。

保健室の中には……誰もいなかった。飛び散った血痕と倒れさらた、奴らがいるだけである。お嬢が悲しそうな表情で謝る。

「……ごめん上坂。アタシが途中で寄り道させたから……」

「……いや、まだそうだと決まったワケじゃない。言い方が悪いが、とりあえず静……鞠川先生が食われたような後はない」

でも、知り合いはいた。石井……静香姉えの手伝いをよくやってたメガネの男子生徒は俺の友人だった。薬品棚に背を預けて、頭を割られて息絶えている。首のあたりに噛まれたような跡はあったが、奴らくのような不気味な姿になっていない。こんな状況なのに……どこことなく、笑みを浮かべているように見えた。

「奴ら になる前に……誰かがやったのか？」

静香姉えにそんな技術はない……というより、戦えるような人じゃない。おそらく武器すら持ってないはずだ。つまり、こういうことが出来る人物がここへ来た、ということだろう。

「……誰かが、鞠川先生と一緒にここから逃げたってことかな？」

俺は平野の考えにうなづいた。逃げるとすれば……外に行くしかない。どこかに立てこもったとしても、数で押されれば普通のドアなんか簡単にぶち破られてしまうからだ。

「や、やっぱり外に逃げるんだよね？」

「何がいいいのよ？」

「あ、あの……歩くの苦手で……」

平野の情けないセリフを聞いて、お嬢が呆れている。

「これだからデブオタは……贅沢は免許取れる歳になってから言うてよ」

「車なら確かに移動は楽だけど俺は運転できねーし……車？」

俺は静香姉えが車を持っていることを思い出した。コペンだがコパンだったか……名前は忘れたが小さい車だ。ちなみに運転は上手

い。歩きが絶望的なこの状況で脱出するなら……まず間違いなく、車を使うだろう。

「カギは確か……職員室にあるはずよ」

「よし、それじゃさつさと……」

「……だ、誰かいるの……？」

いきなりの声に、俺は驚いて思わず木刀を構えた。

「待って、上坂。>奴ら<じゃないわ」

「そついやそつだった……」

>奴ら<は会話できないからな。こつして話せるってことは人間である何よりの証拠だ。

「周りには僕たちしかいないから大丈夫ですよ」

平野の声に反応して、のそのそとベッドの下に隠れていた人物が姿を現す。気の弱そうな普通の男子生徒だった。

「き、君たちは……？」

「俺は2年の上坂だ。こつちはクラスメイトの平野と高城」

「ぼ、僕は……室田（むろた）」

「よし、室田。俺たちはこれから脱出するけど、一緒に来るか？」

あんまり人数増えると動けなくなるが……目の前で生きてる奴を見捨てるのも後味が悪い。

「な、何も……いないんだよね？」

「ああ、ここには俺たちしかいない……周りにいた>奴ら<は倒し

であるから今のうちだ」

「それなら……い、一緒に行くよ……」

俺たちは室田を加えて、保健室を出ていく。室田はびくびくと周りを警戒している……武器も持っていないし、戦闘はできそうなタイプじゃないな。俺を戦闘に、お嬢、平野、室田の順番で行くことにした。

「室田、お前保健室にいたなら鞠川先生見てないか？」

「ぼ、僕が来た時は誰も……」

「……そうか」

俺は少しだけ気落ちする……いや、落ち込んでる場合じゃない。

今は少しでも早く職員室に確かめに行こう。そう思っただけで歩きたした時のことだった。

外のほうから何か近づいてくる音が聞こえた。ひたひたと……> 奴らくの足音にしては異質なものだった。窓の外を確かめようとした瞬間。

ガシャアアン！

派手な音を立てて窓が割れる。窓をぶち割ってきたのは、正真正銘の怪物だった。そいつを見た瞬間、全員が言葉を失った。

地面に四肢を這わせ、全身が赤黒い皮膚で覆われていた。例えるなら、イモリやヤモリのような爬虫類だ。それが人くらいのサイズになったと思ってくればいい。トカゲのような姿をした怪物は、窓をぶち破って近くにいた室田に喰らい付いた。室田は飛びかかってきたトカゲじみた姿の化物に押し倒され、一瞬のうちに首筋に牙を突きたてられる。

「が、ヒ……た、たすけえ……」

首筋を噛みつかれて、涙と大量の血を流しながら……室田はやがて動かなくなつた。

潰す。頭で考えるより先に身体が動いていた。俺は一瞬のうちに走りだし、トカゲの化物のもとへ走る。俺は問答無用で室田に噛みついたままのトカゲに木刀を振り下ろす。全力で振るつた木刀はすんでのところかわされてしまう。

「くっ……」

「シャアアア！」

殺せなかつた……マズい。奇襲が失敗したらどうしようもない。俺は即座に後ろに飛び退いた。すぐにでも飛びかかってくると思つたが、トカゲは俺と向き合ったまま襲つてこない。まるで、様子を見ているようだった。

パシユン！

平野が釘打ち機でトカゲの化物を撃つ。

「ギヒイイイ……！？」

釘はトカゲの化物に命中するが……身体に釘が刺さってるのに動いてやがる。>奴らと同じく、頭を潰さないとダメらしい。

トカゲの化物は、動かなくなつた室田の身体を啜えて勢いよく投げつけてきた。

「……ぐあっ！？」

俺は猛スピードで飛んできた死体を避けるが、後ろにいた平野がぶつけられてバランスを崩す。

「平野！」

「だ、大丈夫……なんとか……」

「なによこいつ……今までのとまるで違うじゃない」

お嬢も動揺している……無理もない。見た目も動きも……今までに戦ってきた奴らとはまるで別物だった。

「シャアア……！」

唸り声を上げるトカゲの化物の赤黒い舌が怪しくうねる……次の瞬間、トカゲの化物の舌が恐ろしく伸びてきた。いきなりの想定外の攻撃に反応する暇もなく俺は首を絞め上げられてしまう。

「グ、あ……！？」

硬くなった舌が巻き付き、鎖のように首に食いこんでくる……閉まりきる直前に左腕を差し込んだおかげで即死は免れた。

「上坂あつ！」

「……ずいぶん味な真似するじゃねえか、ぐあッ！」

軽口を叩いているが実際はかなり痛い。ギチギチと食いこんでくる舌に腕の骨ごと折られそうだ。引き剥がそうともがくが……力が恐ろしく強く、不可能に近い。

平野の釘打ち機じゃ倒し切れない。俺はこの通り腕を塞がれて死なないようにするのが精一杯だ。意識を飛ばさないようにするのでギリギリである。廊下の反対側から走ってくる足音が聞こえたのは

……ちょうどその時だった。

「離れるッ！」

トカゲの化物に背後から飛びかかってきた男子は小室だった。金属バットがトカゲの化物の身体にめり込み、トカゲが苦悶のうめきと共に舌を解放する。

「はあああッ！」

トカゲの化物が怯んだ隙を逃さず、宮本が槍のようにモップの柄を突き出した。勢いよく突き立てられた金属が頭を貫いた。

「グシャアアア……！？」

トカゲの化物が苦しみにうめく。これ以上のチャンスはない。俺はすかさず化物との距離を詰める。

「くたばれッ……！」

木刀を頭にむかって振り下ろした。断末魔の叫びを上げながら……トカゲの化物は息絶えた。

廊下のむこうから来てくれたのは、小室と宮本だった。それぞれ手に武器を持ち、制服が返り血でところどころ赤く染まっている。俺たちと同じように、奴らくと戦いながらここまで来たんだろう。

「上坂君、よかった……間に合って」

「こっちのほうから声がしたんで来てみたら……驚いたよ、あんな化物と戦ってるなんてさ」

小室たちは俺が生きているのを見て安心してくれたようだ。俺も笑って返す。

「ありがとな、小室に宮本……無事だったんだな」

「ああ、何とか。平野と高城も無事でよかった」

「……アンタ達がさっさと逃げたからアタシ達もそれを見習っただけよ」

お嬢の言葉には棘がある……まあ、幼なじみに置いて行かれたんだし無理もないか。

「孝は悪くないわ……私たちを助けようとして……」

「高城さん……」

「いや……高城の意見は当然だよ。焦ってたとはいえ、クラスの誰にも知らせず俺たちだけさっさと逃げたんだから」

小室のやつ……浮かない顔してんな。やっぱり気にはしてたのか。

「こらお嬢、命の恩人に喧嘩売るなって。こんな状況だ、お互い生きてんだからそれでよしとしようや」

「そう言ってもらえると助かる……でも、一体なんなんだ、このトカゲみたいな怪物は」

「全然形が違うけど……奴らくよね？」

「だと思っが……俺らを襲ってきたし」

3人で出たはずだが、井豪の姿はない。ということは……いや、聞かないほうがいいだろう。今はみんなで逃げることが重要だ。

『キャアアアアッ！！！』

悲鳴が聞こえた……俺のよく知っている声だ。この先には職員室がある。

「……急ごう！」

「ああ！」

俺を先頭に廊下を走り抜ける。職員室の前まで来た俺たちが目にしたのは大量の>奴ら<に囲まれた毒島先輩と静香姉えだった。先輩は静香姉えをかばうように前に立って戦っている。職員室の前はトロフィーの棚や来客用の下駄箱があり、比較的開けた造りになっていた。

小室が素早く全員に指示を飛ばす。

「僕と上坂で周りの>奴ら<を倒して道を開く。平野と麗は先輩たちと合流したら静香先生と高城を守ってやってくれ！」

「わかったわ」

「了解」

小室の指示が飛んだ次の瞬間に、俺たちは行動を起こしていた。背後から強襲する俺と小室に気づいた複数の>奴ら<の頭をバットと木刀で潰す。俺はすかさず蹴りを入れて近くの>奴ら<を転ばせ、小室がバットでとどめを刺す。

俺たちを隙間を縫うように、平野の釘打ち機から釘が発射される。困んでいた>奴ら<の陣形に空白が生まれる。先輩たちのところへ合流することができた。

「助かったよ、数が多くて困っていたところだ」

「だったら今度は、こっちから反撃しましょう」

小室の提案にうなづく俺と先輩。

「僕が左の半分をやる」

「右は任せろ」

「じゃあ俺は職員室の前のほうだな、後ろは頼んだ」

それぞれの得物を手に、奴ら<>へと切り込む。俺は職員室の前にいる。奴ら<>を片付ける為に木刀を振るう。木刀を叩きつけて頭蓋を壊す。返り血を振り払う暇もなく次の奴ら<>の頭を横殴りにする。これで残りは妙に全身が赤い。奴ら<>だけだ。

残った1体は、他の奴ら<>とは少し違っていた。髪を除き、皮膚の全てが血のように真っ赤に染まっており、手にはバットを持っている。

赤い。奴ら<>は、まっすぐに俺にむかって直進してきた。奴ら<>ではありえないはずの、走る動きだ。こいつもこいつで他の奴ら<>とは違うようである。赤い。奴ら<>は、力任せにバットを振り回す。

間一髪のところまで避けたバットが地面を叩く。床にヒビが入ったのを見た。驚異的な腕力である。

『オマエ、オレト……オナジ……？』

眩くような小ささだったので聞き取りづらかったが……赤い。奴ら<>は確かに人間の言葉を話した。いや、それよりも内容だ。こいつは俺が。奴ら<>と同じだと言ったのだ。冗談じゃない……。

「化物が……人の言葉を話すなッ」

俺は怒りを露わに木刀を振るう、頭を狙ったが異様に硬い……。木刀でわずかにバランスを崩しただけに終わる。

「なんて硬さだよ……」
『クル、ナ……』

人間を越えた力で振り回される金属バットが風を切る。俺は狙いを変更し、首を狙う。木刀じゃ首を刎ねるとはいかないまでも、骨をヘシ折ることはできるはずだ。

大きく振り回したバットを避けた後の隙を狙って、首筋を一閃し、木刀を叩きつける。首の骨を粉碎する鈍い音が聞こえた。

「ア、ア……」

赤い>奴ら<は首を折られて、床に倒れた。そのままピクリとも動かなくなった。どうやら、うまくいったみたいだ。小室たちもそれぞれ集まっていた>奴ら<の群れを倒している。周りの>奴ら<はもう片付いていた。

電動ドリルを持ったお嬢が、こっちに駆け寄ってきた。俺が妙な奴と戦っていたから気になったのだろう。

「だ、大丈夫なんでしょうね、アンタ……その、ケガとかしてない？」

「うわーお嬢、ドリル似合わねえな……」

「心配してあげた第一声がそれ！？　しょうがないじゃない、これしかなかったの！」

「そう怒るなつて……ケガもねえよ」

「そう、ならいいけど」

お嬢がふんと鼻を鳴らしてそっぽを向く。恥ずかしがってんのか……そんな事を思った時だった。

『ウア……』

どこからか、声がした。倒したはずの赤い>奴ら<が、再び動いているのに気がついた。狙いは……お嬢だった。俺は反射的にお嬢を突き飛ばす。

「……………ツぐう!?!」

「か、上坂……………?」

赤い>奴ら<が振り回したバットが俺の左腕に直撃している。左腕がミシミシと嫌な音を立てる。腕の感覚が痺れたようになくなっている。激昂した赤い>奴ら<が噛みついてこようとするのを、木刀で無理やり防ぐ。

「お……………お嬢……………ドリルで、頭を……………!」

「……………こ、このおおおお!」

お嬢が赤い>奴ら<の頭に目掛けて電動ドリルを突き刺した。回転する金属が硬い皮膚を裂き、中身をかき混ぜる。頭をグラグラとさせながら悶絶して今度こそピクリともしなくなった。

「はあ……………はあ……………」

「助かった……………ありがとなお嬢……………」

「上坂あ……………」

返り血で真っ赤になったお嬢は、両目から大粒の涙を溢れさせる。

「ああ、怖かったよな。でも大丈夫だ」

「うわああああん!」

お嬢は子供のように声を上げて泣いた。俺は痛む左腕と胸に抱い

たお嬢の温かさを感じていたのだった。

第3話「イレギュラー登場」（修正版）（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

今回はオリジナルの＞奴らくを登場させてみました。

いかがでしたでしょうか。

今後もこんな感じでオリジナルの＞奴らくが登場する予定です。

8/2に描写を追加して、修正させていただきました。おかげで展開が多少変わっております。

第4話「脱出」(修正版)

ひとしきり泣いたお嬢が落ち着いてから、俺たちは職員室へ入った。中は荒れ放題で、奴らくの姿こそなかったが書類や血が辺りに散乱している。

俺は小室たちと協力して、内側から出入り口をデスクや椅子などでふさいでバリケードを作った。これでしばらくは、奴らくの襲撃にも耐えることができるだろう。

みんな疲れをとるために、それぞれ適当な椅子に座ったり壁にもたれかかったりして体を休めていた。

「ちゃんと動く……か」

俺は左手を虚空にかざして拳を握ったり、肩をまわしたりしてみるのが痛みを感じることはなかった。

左腕は赤い、奴らくにバットで殴られて折れたかと思ったが、しばらく放置していると感覚も戻り、今ではこうして動かせるところまで回復している。

傷の治りは早いほうだったが、ここまで驚異的だと軽く恐怖すら感じた……考えても仕方ないか、ケガがないのは素直に助かる。

俺は職員室を探索することにした。職員室に他に武器になりそうなものはなかったが、今あるもので十分だから特に問題はない。デスクの引き出しの中に教師が備蓄しておいたのである。携帯食料を見つけることができた。これで今日明日くらいは何とかなりそうだ。あとは飲み物があればいいだろう。職員室の中には簡素な給湯室があり、そこに確か冷蔵庫があったはずだ。

「ん……？」

水道で顔を洗っていたお嬢が、タオルで顔をふきながら俺のほうを見る。僅かに水滴のついた顔に見慣れないモノが付属している。お嬢は薄いフレームのメガネをかけていた。

「なんだお嬢、メガネだったのか？」

「だからなに？ コンタクトがやたらとズレるのよ！」

いつも通りのお嬢だった。これなら大丈夫そうだな、と判断した俺はいつもの調子で話しかける。

「いや、可愛いと思っただけだ」

「か、可愛いって……あ、アンタの好みなんてどうでもいいのよっ！」

怒りながら通り抜けようとしたお嬢だったが、俺のそばに來ると急に足を止めた。

「……身体、本当に大丈夫？」

驚きを顔に出なかったのは俺の人生で一番のファインプレーだったと思う。俺は、笑いながら腕をブラブラ振ってやる。

「はっはっは。ケガしたヤツがこんな軽快に動けるワケねーだろ？」

「そう……あのさ、さっきはありがとね、かばってくれて」

「……お嬢……頭でも打ったか？」

「あんたって……ホント……バカッ！」

お嬢から持ってたタオルを投げつけられた。そのままお嬢は俺を通り過ぎていく。投げつけられたタオルは、奴らくの血の匂いに混じって僅かにお嬢の甘い香りがしたように感じた。

普段ツンツンしてるお嬢に素直にお礼を言われたら照れるだろうが……俺もさっさと顔を洗うか。俺はバシャバシャと水を顔にぶっかけて少しだけ火照った顔を冷やすのだった。

「あ、やつと来た」

俺がみんなの所に戻ると、職員室の中心あたりにみんなが集まっていた。お嬢が会議みたいに仕切って話を進めている……まあ、こういうの得意そうだな。

いざという時に名前が分からないと困る、というお嬢の助言を受けて俺たちはお互いの自己紹介をすることになった。所属と名前、あとは得意なことなどを簡単に伝える。ここにいる連中はほとんどが2 - B所属で、俺にとっては全員が知り合いだった。

「じゃあ、あとはあの動く死体の特性ね……」

「僕たちは>奴ら<って呼んでる……漫画やゲームじゃないから、な」

それは奇しくも、俺が頭の中で決めていたあいつらの呼称と同じものだった。小室は辛そうに表情を曇らせ、宮本は視線を逸らしたままギョツと唇を噛みしめて悔しそうにしている。まるで『今はいない誰か』を思い出しているように見えた。

>奴ら<という呼称を作ったのは、永井だろうか。3人で出て行ったはずの小室たちが今は2人しかいないことを合わせて考えれば……永井に何があったのか想像するのは難しくない。

「よし、それじゃ呼び方は>奴ら<でいこうぜ……いいよな、お嬢？」

「わかったわ。それで>奴ら<の特性だけ……」

- 1、力が異常に強い。
- 2、音に敏感で、聴覚のみしかない。
- 3、頭を潰さないと死なない。
- 4、> 奴ら<に噛まれると100%の確率で> 奴ら<になって甦る。発症には多少の個人差あり。

みんなから聞いた意見を大雑把にまとめると、こんなところだろうか。あとは、通常の> 奴ら<以外にトカゲの化物や赤い> 奴ら<といったイレギュラー的な存在が混じっていることだが…… それについて詳しい情報はない。

静香姉えが自分のバッグから車のキイを探している。車さえあればあとは比較的安全に学校から脱出することができるからな。

「鞠川校医の車は、全員を乗せられるのか？」

「うっ、そういえば……無理です……」

まあ、無理だろうな。静香姉えの手持ちの車は小さすぎる。乗ってもせいぜい2〜3人だ。今ここにいるだけでも……俺、お嬢、静香姉え、平野、毒島先輩、小室、宮本がいる。

「バイクのキイはあつたけど……やっぱり大人数は無理だよな」

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ、壁のカギ掛けにキイがあるが？」

いい考えだと思った。でかい方が少しくらい奴らに囲まれても突破しやすいし、何より全員が乗ることができる。俺は窓の外から駐車場を眺める。教師の乗ってきたであろう車やサイドカー付きのバイクの他に、マイクロバスが確認できた。

「それはいいけど……どこへ？」

「家族の無事を確かめます。近い順にみんなの家を回るとかして、必要なら家族も助けて、それから安全な場所を探して……」

俺と静香姉えは他に家族がないから問題ないが、家族と離れている小室たちは不安でしようがないだろう。助けることには全面的に賛成だった。俺はそれを無駄な寄り道だとは思わないし、力を貸すのも惜しくない。

「……そんな、なんなのよ、これ……」

宮本が職員室にあったテレビを見つめたまま、固まっている。何かショッキングな報道でもあったんだろうか。信じられないものを見たような顔をしている。様子を見た先輩が、置いてあったリモコンでテレビの音量を最大にした。

事件を報道するリポーターの後ろで、奴らくに噛まれた連中が救急車に運びこまれようとしている。

『……です。各地で頻発するこの暴動に対し、政府は緊急対策の検討に入りました。しかし、自衛隊の治安出動については与野党ともに慎重論が強く……』

「暴動ってなんだよ、暴動って！」

「小室、ちよつと黙れ。聞き逃すぞ」

「あ、悪い……」

『……ません。すでに住民の被害は1000名を超えたとの見方もあります。知事により非常事態宣言と災害出動要請は……』

パンッ！

渴いた音が聞こえた。警官が、奴らくにむかって発砲したようだ。

『発砲です！ ついに警察が発砲を開始しました！ 状況はわかりませんが……きゃあああ！？』

テレビの中で、救護されていた人間が動き出したのだ。> 奴ら< になって、人間を襲い始める。報道していたりポーター達にも魔の手が伸びる。カメラマンは逃げ出したのか、カメラが横倒しになる。

『いや、なにっ……うそっ、た、助けっ……うあっ、ああああっ』

映像が乱れる……お決まりの『しばらくおまちください』のテロップが流れた後に中継が終わり、スタジオに戻った。

『な、何か問題が起きたようです。こ、ここからはスタジオよりお送りします』

『それだけかよ……どうしてそれだけなんだよ！』

『パニックを恐れてるのよ』

怒りながら机を叩く小室とは対象的に、お嬢はひどく冷静に状況を分析している。

『いまさら？』

『いまさらだからこそ、よ。混乱は恐怖をつみだし、混乱は秩序の崩壊を招くわ。そして秩序が崩壊したら……どうやって『動く死体』に立ち向かえるというの？』

とはいえ、だ。人間ってのはそう簡単に団結できるものじゃない。国のトップのほとんどは、危機であっても主導権を争い、混乱が収まった後の事を考えるかもしれない……そこまで愚かではないと信じたいが。

「まあ、最悪の場合……核ミサイルでも落とすかもな」
「そうなたらおしまいよ……」

その後続くニュースもろくでもない事ばかりだった。『暴動』から身を守る為の住民に対する警告と、世界各国で同じような状況になっている、ってことがわかったただけ。下手をすれば、国の中枢である人物すら死んでるらしい。どうやら事態は、俺が想像していたよりずっと重く、壊滅的なようだった。事実は小説より奇なり、とはよく言ったものだ。

「たった数時間で世界中がこんなになるなんて……で、でもきつとすぐいつもどおりに……」

宮本はぎゅっと小室の服の袖を掴んでいる……不安で、どうしようもないのだ。だから希望が欲しいのは分かる。だが、これだけの騒ぎだ……事態が収束するのは、無理だろう。

「なるわけないしー」

現実的なお嬢は宮本の甘い考えを否定した。お嬢の歯にももの着せぬ言い方に小室が食ってかかる。

「そんな言い方することないだろ」

「パンデミックなのよ？ 仕方ないじゃない！」

「ばんでみつく、ってなんだお嬢？」

「感染爆発の事よ！ 世界中で同じ病気が大流行してるって事！ そのくらい知ってなさいバカ！」

> 奴らくは病気のようなものだ。通常なら人が死に過ぎれば感染

すべき人間がいなくなるので物理的に収束するが、今回の場合はそれが無い。『感染』したら>奴ら<になり、動き回って人を襲うからだ。結果的に感染は拡大し続けるので、止まる要素がない。通常の死体ならそのうち肉が腐って動けなくなるだろうが……あれはもはや人間じゃないし、現代医学の常識は当てはまらない可能性が高い。トカゲの化物やさっきの赤い>奴ら<みたいなのもいる。

「……まさに『化物』ってことか」

「>奴ら<に関してはこのくらいでいいだろう。じゃあ、これからどうするか決めようか」

まずは、家族の安否を確認するという事でみんな合意した。それぞれが勝手に動き回っていても意味がないので、チームを組むことになった。

「できる限り、生き残りも拾っていこう」

「はい！」

すでに扉をふさいでいたバリケードは片付けた。あとはドアを開けて外に出るだけだ。

「どこから外へ？」

「駐車場は正面玄関からが一番近いわ」

「……行くぞ！」

時刻はそろそろ夕方になろうとしていた。青かった空が少しずつオレンジ色に染まり始めている。

職員室を出た俺たちは、正面玄関へ向かうために最低限の>奴ら<を蹴散らしながら廊下を進んでいく。階段の途中で、5人の男女が>奴ら<に襲われているところに出くわした。

「アー……」

「きゃあああつ！？」

悲鳴は>奴ら<を呼び寄せる格好の餌だ。本人がそれを知っているかどうかは定かではないが。

「た、卓造……」

「くそっ……下がってる！」

女子をかばいながら、タオルを首にかけた男子　卓造が持っている金属バットで応戦しようとしている。もう1人のさすまたを持った男子もいるが……腰が引けており、とても戦えるような状態ではない。でかい荷物を持つている奴は動けそうにないな。このままでは、すぐにでも>奴ら<の仲間入りだろう。

噛みつきこうとしていた>奴ら<の頭に釘が飛んだ。平野の射撃で数が減ったところへ俺たちが切り込む。少しは体力が回復したおかげなのか、体がいつも以上によく動いているのを感じる。木刀が、まるで小枝でも振ってるみたいに軽いのだ。>奴ら<の頭をトマトのように潰し、倒していった。みんなの奮戦によって、救出戦はすぐに終わった。

「あ、ありがとうございます！」

「でけー声はナシな？　アイツらが寄ってくるからよ」

よっぽど安心したのだろう。嬉しそうに頭を下げる女子の気持ちも分からないではない。>奴ら<に噛まれていないかと質問すると5人の男女は揃って首を横に振った。見たところ本当に噛まれた奴はいないようだ。俺は少し気になったことを聞くことにした。

「なあ、ちよつと聞きたいんだが……それ、何が入ってるんだ？」

背中に大きなバッグを背負った男子が答える。

「あ、これですか……途中で倉庫に寄ったのでチェーンソーとか、カッターとか武器に使いそうなモノを……」

「音が出るのはやめときなさい。> 奴らくが集まってくるでしょ」

「はは、そりゃそうだな」

「ここから脱出する、一緒に来るか？」

「え、ええ！」

小室の提案に、生き残っていた男女たちは同意した。同行者を増やして、俺たちはさらに階段を下りていく。みんなどこか表情が明るくなったように見えたのは、自分たち以外にも生き残りがいたのが嬉しかったのかもしれない。

正面玄関へ辿りついた俺たちは、下駄箱の前で立ち往生していた。下駄箱に隠れながら正面玄関の様子をうかがうと結構な数の> 奴ら< がいるのが見えた。

「さすがにあの数全部相手にすんのは面倒だな……体力持たねーぞ」

「> 奴ら<は音にだけ反応してるんだから隠れることなんてないのに……」

「じゃあ、高城が証明してくれよ」

「ぐ、むう……」

お嬢が言葉に詰まった。実験したとはいえ、絶対に安心というワケでもない。運動神経のあまりないお嬢がやるのは酷ってもんだろ

う。

「しかし……このまま校舎の中を進み続けても、襲われたら身動き

が取れない」

「玄関を突き抜けるしか、ないのね……」

本当に視覚にしか反応しないということ、誰かが確かめるしかない。誰も行こうとはしないのを見て、俺は手を上げて立候補する。

「それじゃ、俺が行く」

「あんた……怖くないの……？」

「お嬢の推理が正しいのは身を持って知ってるからな。突っ込んでも大して怖くねえよ」

「だからって……」

何か言いたそうな小室だが、ここで時間を無駄に消費しても意味がない。

「こつというのは俺に任せとけ。何かあった時もお前と先輩がいれば何とかなるだろ？」

「……わかった。無茶はしないでくれよ」

「上坂……」

お嬢を見ると何か心配そうな顔をしていたので、安心させようと笑ってやった。

「んじゃ、行ってくる」

俺はゆっくり歩いて、下駄箱から出て正面玄関のドアへとむかう。余計な音を立てないように、ゆっくりと歩を進めていく。肩が当たりそうな距離を、奴らくがうめき声を上げながら通って行く。やはり、目は見えない……のか。

「アー、ウー……」

うめきながら歩いている。奴らくが周りに腐るほどいるが、俺を襲ってくる様子はない。目は見えてない……お嬢の推理が大当たりだ。小室たちに大丈夫だと合図する。

さて……どうやって。奴らくを引きつけるかな。足下に転がっている血に濡れたスニーカーを見つけた。ちょうどいい、こいつを使わせてもらおう。俺は足下のスニーカーを拾って、近くのロッカーにむかって放り投げる。

ガツンッ！

「アー……」

> 奴らくの群れがロッカーに向かっていく。その間に、俺は正面玄関のドアを開けた。先輩を先頭にみんなが移動を開始する。ゆっくりひとりずつ、玄関をくぐっていく。

俺の他に、あと残っているのは……さっき助けた男子が2人か。よし、このままなら。奴らくをやり過ぎせる。誰も欠けることなく脱出することができる……そう思った時だ。廊下の向こうから、見たこともない。奴らくが近づいてきた。

それは。奴らくの中でも異様だった、何より目を引くのは、その右腕。歪に肥大化した右腕は黒々とした毛に覆われており、先に鋭く長いカギ爪が生えている。右腕だけが獣になったようだった。あんなものでやられたら肉を裂かれあつと言っ間にズタズタにされるだろう。

「ひいっ!?!」

右腕が獣なカギ爪の。奴らくに恐怖した男子が驚きのあまり、持

っていたさすまたを扉にぶつけてしまった。

カーンッ！

音は、静まり返っていた校舎によく響いた。周りの>奴ら<が一斉にこちらを振り向く。小室と俺が叫んだのは、ほぼ同時だった。

『走れッ！！』

こうして、命をかけた鬼ごっこが始まった。

>奴ら<は外に行けばいくだけ増えていく。外に逃げようとして途中で噛まれた奴が多いつてことか。

ここから駐車場までは、そう遠くない……全力で走り抜ければ、まだ、望みはあるはずだ。俺たちがバスにたどり着くのが先か。それとも……全滅か。

「…………邪魔あつ！」

木刀を横に一閃するたびに 奴ら が地面を転がっていく。走りながら立ち塞がる>奴ら<を、俺たちはひたすらになぎ倒していった。返り血で真っ赤に染まった木刀で、ただ敵を刈り続ける。

先頭を走る小室と先輩が道を開く。さらにそこから宮本、平野、お嬢、俺が続く。

『アアアアアアア！』

後ろからカギ爪を持った>奴ら<が吼えるのが聞こえる。カギ爪の>奴ら<は、俺たちの後ろから追いかけている。>奴ら<のくせに結構な速度で走ってくるのが厄介極まりない。途中で転んで逃げ遅れた女子の1人が、奴のカギ爪で背中を引き裂かれてしまった。

「ひッ、ギヤアアアア!？」

大量の血が飛び散って……絶命する。このままバスに行つて逃げ切れるか……いや無理だ。このままじゃ間違いなく追いつかれる。誰かが足止めしねえと……。

「あんなのに暴れられたら脱出するどころじゃないわ……」
「だが木刀じゃいくらなんでも……待てよ」

お嬢と相談していて、閃いたことがある。俺の少し前を走る大きな荷物を持った男子に命令した。

「おい、荷物をよこせ!」

「は、はい!」

「ど……どうするつもり?」

近くにいた男子から重い荷物を受け取った俺は、大急ぎでバッグから目当てのものを探す……あった。

赤い塗装を施された無骨なチェーンソー。刺々しい見た目のそれは結構な重量のはずだが、今の俺にとっては大した重さではない。片手で持つてスターターを勢い良く引つ張り、エンジンを始動させる。

ギューイイイイン!

燃料の焼ける匂いとともに、刃が勢いよく回転し始めた。派手な音が出るが……この状況ならもう関係ないだろう。

「コイツならあの化物でもぶった切れるだろ」

「何やってんのアンタ……！ それじゃ周りの奴らも集まってきたあつ！」

お嬢に近づこうとしていた>奴らくを回転する刃で一刀両断する。血しぶきとともに、切った箇所がごっそりとえぐられてなくなつた。大した威力である。

「……平野、お嬢を頼む！」
「わかつたよ」

平野は一瞬表情を曇らせたが、すぐに力強くうなづいてくれた。

「っ……し、死んだら……許さないから……」

何か言いたそうなお嬢だったが……どうにか平野と一緒にバスへ向かってくれた。さて、頑張りますか。

「く、来るなツ……くそっ！？」

後ろのほうで戦っていたのは俺だけではなかつた。>奴らくに囲まれながらもバットで奮戦していた卓造という男子は、首にかけていたタオルを>奴らくに掴まれてバランスを崩す。首筋に食いつこうとした>奴らくを俺がチエーンソーで一刀のもとに切り伏せる。返す刃で周りの>奴らくも切り払つた。

威力はすげえけど……血しぶきがひでえなこれ……。

「た、助かりました……」

「いいから走れ……ほら、彼女が待つてんだろ」

お嬢たちと一緒に走っていた女子生徒がこちらに向かってきてい

る。こいつが心配だったんだろう。

「……………ありがとうございました！」

短くお礼を言うと卓造は女子生徒のほうへ走って行った……………これで後続にいるのは俺だけになったか。いや、1人のほうがよっぽどやりやすい。これ以上仲間が食われるところなんて、見たくもない。

「アー……………」

周りにいる>奴ら<はチェーンソーのエンジン音につられて俺のほうへと集まってきた。

俺はチェーンソーを振り回し、>奴ら<を排除していく。>奴ら<は例外なく顔や足などの身体のパーツを切り飛ばされながら倒れていく。

血まみれになりながら戦っている俺の心に恐怖はなかった。戦うことを愉しいと感じ始めてさえいた……………。

カギ爪の>奴ら<が目前まで迫る。俺はチェーンソーの回転する刃を立てるように構えて、カギ爪の>奴ら<に切りかかった。

『オオオオツ！』

血肉を裂きながら、回転する刃が>奴ら<を削る……………だが、浅い。腕を掠ったただけだ。反撃に飛んできた爪を横に飛んで避けた。

こっちは一撃でももらったらアウトだ。カギ爪を持った>奴ら<の身体はあちこちがズタズタになっているが、それでも……………まるで効いた感じがしない。

「……………みなさん急いでっ！」

教師らしい男の叫び声が聞こえた……俺たちに遅れて、向こうから走ってきたらしい生き残り組がまだいたようだ。

大声につられて、カギ爪の>奴ら<の注意が一瞬逸れたのを、俺は見逃さなかった。一気に距離を詰めてチェーンソーを振り下ろす。高速で回転する刃が筋肉を引き裂きながら、肩口から左腕を断ち切った。

『グオオオオオ！』

「……つぐア!?」

ドスっ！

腕を切り落とされ、血をまき散らしながら怒り狂ったように叫ぶカギ爪の>奴ら<の振り回した腕が、俺の脇腹にぶち当たった。俺はボールのように軽く吹っ飛ばされる。

何とか立ち上がった俺は、赤いモノが混じった唾を吐き捨てた。

「チツ……そう簡単には死んでくれねえか……」

チェーンソーの吐き出すエンジン音に引き寄せられて、他の>奴ら<も続々とこちらに向かってきている。さっきの生き残りたちは、俺が引きつけている間にバスへ向かったようだ。

遠く、エンジンの音が聞こえた。

バスのエンジン……にしては何か違うような気がする。だんだんと排気音が近づいてくるのが分かる。チェーンソーのエンジンよりもっと大きな音。これは……より速く走る為に出す音だ。

「上坂ーっ！」

俺を呼ぶ声に振りかえる。小室がサイドカー付きのバイクに乗ってこっちへ突っ込んでくる。俺を囲もうとしていた奴らくを何体かひき殺しながら、目の前で止まった。

「小室っ?! お前なんで……」

「いいから、早く乗れ!」

驚く暇もなく、俺はサイドカーに飛び乗った。バイクはすぐにUターンしその場から離脱する。

「まったく……無茶するよお前は」

「悪いがもうちょい付き合ってもらうぞ。アイツにトドメを刺す」

「どうするつもりだ?」

「アイツの横をすり抜けざまに俺がこいつでぶった切る、単純だろ?」

チエーンソーを構えながら、作戦とも言えない作戦に小室は賛成した。

「よし、やるう!」

「おう、運転は頼んだぜ!」

俺はチエーンソーの刃を真横に立てる。離れないように、がっちり構える。派手な排気音を噴かせながら、バイクは再びカギ爪の奴らくへと突っ込んでいく。途中にいた奴らくは例外なくチエーンソーの餌食になって散った。

『アアアアアッ!』

「くたばりやがれ!」

猛スピードで走るバイクがカギ爪の>奴ら<と交差する。チェンソーの回転する刃が、カギ爪の>奴ら<の脇腹に食いこむ。そのまま、紙を裂くように一気に身体をぶった切った。

『グオオオオオオオ！？』

苦悶の叫びを上げながら、血の海と化した駐車場の地面に倒れる。上半身と下半身はほぼ分かれた状態で、もう立ち上がることもできないだろう。

「よし、このままみんなのところへ！」

小室と俺が乗ったバイクはバスに近づこうとしていた>奴ら<を切り飛ばしながらさらに進む。バスの前では毒島先輩が>奴ら<を近づかせないように木刀を振るい、平野が窓から援護射撃を繰り返していた。俺たちのバイクが到着した時には、無理な使い方をしたチェンソーは動かなくなっていた。バイクと一緒にその場に捨てる。

「何とかなつたようで何よりだ……バイクに乗った小室君を見た時は驚いたよ」

「すみません、無茶を聞いてもらって」

「いや、おかげで勇敢な仲間の命が助かったのだから安いものだ」

先輩が微笑む。生き残っていた者は全員乗ったらしい。あとは小室、俺、先輩の3人だけだ。俺たちは急いでバスに乗り込んだ。

「行きますー！」

バスが勢いよく発進する。静香姉は 奴ら を避けながら器用にバスを運転する。すげえ……やっぱ運転上手かったんだな。

校門の前には 奴ら が大量に群れていた。さすがにバスが通れるだけのスペースはない。 奴ら を避けながら進むのは、無理だろう。

「人間じゃない……もう、人間じゃない！」

静香姉えが自分に言い聞かせるように呟く。覚悟を決めた静香姉えは校門の前にいた>奴ら<をひき殺しながら、バスは進ませる。

ガアアアアン！

閉じていた校門をぶち壊して、バスは勢いよく外に飛び出した。数々の困難を乗り越えて俺たちはようやく、学園を脱出したのだ。た。

後から乗った連中は3・Aの紫藤とその生徒たちだったらしい。紫藤は笑顔で礼を言いながら、話しかけてくる。

「助かりました……リーダーは毒島さんですか？」

「そんなものはいない……生きる為に協力し合っただけだ」

「それはいけませんねえ……生き残る為には『リーダーが絶対に必要』です。全てを担うリーダーが」

何かを含んだような紫藤の台詞が引つかかる。どさくさで助けたことになっちまったけど……宮本が今にも殺しそうな顔で紫藤を見てんだよなあ。

「……なんで、あいつがッ……！」

「麗……」

宮本の怒り様に、小室は困惑した表情をしている。

「だったら宮本、なにかあったら最悪お前がソレでやっちまえばいいだろ？ 武器があるんだから上手く使え」

宮本が驚いた表情で俺を見る。俺は知らないが、あいつと何かあったんだろ。俺は止める気はない。

「……上坂君がそういう風に言うなんて意外だった……そうよね、そうするわ」

すぐにでも紫藤に殴りかかりそうだった宮本は、とりあえず席に座ってくれた。少しは頭も冷えたかな……俺はお嬢の隣に腰を下ろした。

「……お疲れ様。アンタが足止めしてくれたおかげで、残りの連中も無事よ」

お嬢がねぎらいの言葉をかけてくれるが……その表情がどこか怒ってらっしゃるように見えるのは気のせいだろうか？ 普通は好感度アップするところじゃないの？

「お、お嬢……なんか怒ってる？」

「あたし、今回のことで分かったことがあるの……あんたはバカじゃないわ。大馬鹿よ」

ちくしょう、ツンしかねえ！ いきなりどっと疲れがわいてきた……
……瞼が急速に重くなっていく。

「でも……ちゃんと追いついてきたから許してあげ……」
「悪い……さすがに、暴れすぎた……5分でいいから寝かせて……」
「ちょ、ちょっと上坂……もう！」

俺は高城の横でぶっ倒れたように眠りについた。急激に暗闇に落ちていく。

これで全てが終わったワケじゃない。これはほんの始まりに過ぎなかったのだ。

これからさらに過酷な現実と戦わなくてはならない。そのことを俺は……今はまだ知らなかったのだ。

第4話「脱出」(修正版)(後書き)

今回で無事に学園を脱出できました。これにて学園編は終了となります。

読んでいただいてありがとうございます。

感想や意見などありましたら一言でもどうぞ。いつでもお待ちしております。

8/9に修正致しました。展開が多少変わっています。

第5話「対立」

第5話「対立」

俺たちは、生き残るためにいくつもの修羅場をくぐり抜けてきた。そして、ようやく地獄と化した学園を脱出した。

バスで学園を出てからすぐに、新たな問題に直面している。

どうも、上坂です。本当に5分くらいしか眠れませんでした。

起きたら最悪の空気です……寝覚めが悪い……。

原因は、紫藤の連れてきた連中だ。

短い髪を金髪に染めたチンピラみたいな奴がでかい声で騒いでいる。

「ちつ、だからよお、このまま進んだって危険なだけだつてば！

だいたいよお……なんで俺らまで小室たちに付き合わけりゃいけないんだ？

お前ら勝手に街に戻るって決めただろ？

学校の中で安全な場所を探せばよかつたんじゃないやねえのか？」

金髪野郎に便乗して、気の弱そうな男子生徒がさらに続く。

「そつだよ！

どこかで立てこもつたほうが……さっきのコンビニとか……」

「だつたらなんでバスに乗つたよ？」

引きこもりてーなら、学校にいりゃよかつただろつが。

後から乗ってきたのはそつちだ」

「そ、それは……」

やれやれ……。

助けられたのに感謝の気持ちすらねーみたいだな。

最低だなこいつら。

「……馬鹿か、あいつら」

「アンタ以上のバカがいるとは思わなかつたでしょ？」

「それひでーよ、お嬢。まあ確かに俺はバカだけどさ」
「少なくとも……アンタは良いバカよ、安心しなさい」
「キキィッ！」

バスに急ブレーキがかかり、道路の端っこにバスが急停車する。
「いい加減にしてよ！」

こんなんじや運転なんてできない！」
めずらしいな……静香姉えが怒っている。まあ、怒るのもしゃーないわな。

「な……なんだよっ！」

「ならば君はどうしたいのだ？」

毒島先輩のセリフに言葉を詰まらせた金髪野郎は、小室を指差した。
「……気に入らねえんだよ、こいつが！」

こいつが……気に入らねえんだっ！」

大事なことなので2回言いました、ってか？

「くだらねーな」

平野が銃で金髪を狙おうとして、毒島先輩が無言で止めている。

「上坂……手を出しちゃダメよ」

「分かってるって。『手』は出さねーよ、『手』は」

小室が金髪に食ってかかる。

「何が気に入らねえんだ？」

俺がいつお前になんか言っただよ？」

「てめえ……！」

手を出そうとした瞬間、俺が割って入る。

「おい金髪……名前なんだ？」

「あア！？ 角田だよ……なんだてめえ？

いきなりしゃしゃり出てきて……ぐはああアっ！？」

ガスッ！

俺は無言で角田の腹に蹴りをぶち込んだ。

> 奴らくにぶち込むよりちよっとマシ、程度にだ。

「あはは……『手は出さない』ね、なるほど」

「うむ。嘘は言っていないな」

さすが先輩。話のわかる良い女だ。

俺はうめきながら腹を押えている角田をにらみつける。

「角田君さあ、人が寝てんのにピーチクパーチクうるさいよ？」

……潰すぞ。ここで足一本折ってみる？

いらねーだろ引きこもるなら？」

「ゴホツ……や、やめ……っ！」

「ねえ、平野……アイツってこんなキャラだっけ？」

「いえ……いつもとだいぶ違う気がします……」

「京君って寝起きが悪いのよねえ……」

寝てるるところをこんなクソみてーな理由で起こされたんだからそりや気分も悪い。

「上坂君がやらなくても……私がやったのに……」

俺はモツプの柄を構えている宮本に言う。

「俺の安眠妨害は大罪だ……ってのは半分冗談だが。」

動物と同じで力関係ははつきりさせといたほうが後々楽に……」

パチパチパチ！

紫藤が拍手しながら近づいてくる。

「実にお見事……素晴らしいチームワークですね。」

しかし……こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっていきますねえ。

やはり、リーダーが必要なのですよ、我々には」

「ああ、そっちが本題……」

……ようやく寝起きの頭が回ってきた。

「で……候補者はアンタ一人きりってわけ？」

「私は教師です高城さん。そしてみなさんは学生です。」

それだけでも資格の有無ははっきりしてます。

私なら、問題が起きないように手を打てますよ！」

「はい待ったー」

「なんですか、上坂君……？」

話の腰を折られて、紫藤は微妙な顔をしている。

「教師が生徒より上、って定義がそもそも間違いつすよね。」

実際に対応できる能力のほうの問題だ。年功序列の会社じゃねーんだからさ」

「た、確かにそうですが……」

「紫藤先生は、外にいる>奴ら<に突っ込む勇気があります？」

リーダーには勇気も必要つすよねえ。ああ、武器なら貸しますよ俺の木刀を。

あと、具体的な案を示してくださいよ。今ここで、具体的にどうするの？」

「そ、それはですね……」

「驚いたわ……あんたも理論的なこと言えるのね……」

おーい、聞こえてんぞお嬢。

「それがさせねーなら、誰がやるのが同じだ。というわけで俺は反対する」

「アタシも上坂と同じよ」

「僕もです」

「私も上坂君を支持しよう」

「俺もだ」

「私も」

お嬢、平野、毒島先輩、小室、宮本……。

小室たちは全員俺と同じ反対側になってくれた。やっぱり信頼できるのは、こいつらだけらしい。

「……くっ、で、では多数決を取りましようか」

うわぁ……数の力は面倒だな。民主主義最悪。

俺たち以外の連中が全員紫藤を指示しやがった。

俺の論破は無駄になったと……へこむわぁ。

せっかくめずらしく戦い以外で頭使ったのに……。

「ということ……多数決で私がリーダーということになりました」
紫藤の無駄に芝居がかったポーズがすげー腹立つ。

「くっ……!!」

宮本が怒りで身体を震わせながら、バスを飛び出した。

「麗……!!」

「嫌よッ、そんなヤツと絶対一緒にいたくなんかないっ!」

宮本はそのままトンネルのほうへ歩いて行く。

「行動を共にできないのであれば……仕方ありませんね」

「何言つてんだ……あんた!? くっ!」

「……小室っ!?!」

小室が宮本を追ってバスを降りる。トンネルのそばで宮本を説得し始める。

「街までだ、街まで我慢するだけじゃないか……歩きじゃ危険……」

「だから後悔するって言つたのよ!」

「ともかく今は……!!」

響くクラクションの音。

迫ってくるモノを見て、俺はバスから身を乗り出して叫んだ。

「小室、逃げるッ!!」

「なっ……!!?」

道路をすごいスピードで突っ込んでくる大型バスが見えた。

中が 奴ら で溢れかえってやがる。

大型バスが他の車にぶつかってバランスを崩す。

横転しながら道を滑ってくる。

「マジかよっ……!!?」

小室がとっさに宮本を抱いてトンネルの中に飛び込んだのが見えた。

ガシヤアアアアア!

大型バスはトンネル前でようやく止まったが……道をふさぐように

横倒しで炎上している。

隙間がほとんどねえ……。

「ちっ、これじゃ小室たちが戻れねーじゃねーか！」

俺はバスから降りて小室たちを呼ぶ。

「小室っ、大丈夫か！？」

ガシャアアン！

バスから出てきた 奴ら が燃え上がったまま、俺のほうへむかってくる。

「おいおい……火にずいぶん強えんだな」

俺は近くにいた>奴らくを蹴り飛ばす。

「熱ッ……面倒な連中だ……！」

「上坂っ！」

わずかにある隙間から小室が顔を出す。

「警察で……東署で落ちあおう！」

「時間はどうすんだ！」

「午後7時に！ 今日が無理なら、明日のその時間で！」

「わかった！ くたばるんじゃねーぞ、小室！」

「お前もな！」

そこまで言って、道が完全にふさがってしまった。

俺は急いでバスに戻る。

「鞠川校医……ここはもう進めない」

「分かったわ……戻って他の道を！」

バスはUターンして、走り始めた。

こうして俺たちは、一時的に仲間と離れ離れになってしまった。けど、きっと再会できるはずだ。

今はそれだけを信じる。

第5話「対立」(後書き)

読んでくださいますありがとうございます。

今回は短めですが、次回でガンガン進む予定です。

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

こんな話でも楽しみにしてくれてる方がいるんだなあ、と励みになつてます。

それでは、近いうちにまた。

第6話「再会」(前書き)

前回の続きになります。

評価してくださった方、ありがとうございます！

これからもできるだけ定期的に更新できるように頑張っていきたい
と思います。

第6話「再会」

不幸なアクシデントによって、小室たちと別行動をとることになってしまった。俺たちの乗ったバスはすぐに道を引き返して街の中を走行する。

街中を通る道路は、車がすし詰め状態となっっているせいで長い渋滞が続いていた。あまりの多さにうんざりする反面、あれだけの騒ぎがあつたのに、まだこれだけ人間がいるのを見て俺は少しだけ心の中で安心していた。

「こりゃ、歩いたほうがよっぽど早いな」

「この調子じゃ、朝までに橋を越えられるかどうか……」

残った俺、お嬢、毒島先輩、平野はバスの運転席の近くに集まっていた。紫藤たちからは十分に距離をとっている。一緒にいたくないのだ。正直絡まれても面倒なだけだし、本音を言えばすぐにでもぶっ飛ばして追い出してやりたい気分だった。

くうう~~~~。

間の抜けた音が車内に響いた。平野の腹の虫が盛大に鳴くのを聞いて俺と先輩が苦笑する。

「うるさいわね、黙りなさいよ！」

「黙れって言われても……お腹すいたなあ……」

平野の呟きは当然だろう、俺たちは昼から何も食べてないのだから。職員室に寄った時に水を少し補給したくらいである。お嬢が若干イライラしているのも仕方ない。

「よし。お嬢、カバンに入れておいたもん出すから貸して」

俺はガサゴソとお嬢が持っていたカバンをあさる。中からは携帯系の食糧を中心に、水や缶コーヒーなどが出てきた。工具が入っていたのであまり大量とはいえないが、それでも俺たちで分けるには十分な量だった。

「うわっ、食べ物と飲み物がこんなに……いつの間に？」

「職員室探したら結構あつたから詰めておいたんだよ」

「どつりでカバンがえらくパンパンだと思つたら……意外と抜け目ないわねアンタ」

「はっはっは。もっとほめてくれたまえ」

「調子のんなっ！」

俺たちは夕食をとることにした。比較的匂いのしないゼリー状の食品なんかを選んでみんなに配る。

「上坂、アンタは食べないの？」

「ああ、俺はあとで食うよ」

俺はバスの後方を警戒していた。紫藤たちに食料の存在を知られると面倒だからだ。絶対に分けると言ってくるだろうが、少なくとも紫藤たちに数少ない食料を分ける気は欠片もない。

簡素な食事だったが、それでも食欲が満たされたことで落ち着いたので、平野はすぐに寝息を立て始めた。

「よっぽど疲れていたんだな……」

「疲れない方がおかしいわよ……こんな状況だもの」

「お嬢、先輩、休んでていいぞ。紫藤の言うとおり『ここは安全』」

だ。とりあえずはだけど」

「私は大丈夫だ。君こそ休んでおいたほうがいいんじゃないか？
学校からここまで、ずいぶん無理をしてきただろう」

「うちの女性陣は強いな……じゃあ、お言葉に甘えて」

俺は席に座ると、あつという間に意識が落ちていった。やはり、
疲れていたのだと自覚した。

世界は変わってしまった。まだ……たった半日しか経っていないのに、俺は自分が少しずつ変化し始めていることを感じていた。>
奴らくと戦うことを恐れず、むしろ嬉々として最前線に赴き木刀を
振るう……まるで戦闘狂のように。

これから、どうなってしまうのだろうか。俺達はどう変わっていく
のだろうか。それは 誰にもわからない。

それから数時間が経った。ぼんやりとした視界のなか、紫藤の
演説が聞こえてくる。

「それぞれが勝手に行動するより、どこか安全な場所を得た後に行
動するべきです。例えば家族の安否も、規律のある集団としての準
備ができてから……」

周りに目を向けると、平野はまだ寝ているようだった。先輩は木
刀を磨いており、お嬢は何か考えているのか難しい顔をしている。

「……あ、起きたの？」

「おう、今度はばっちり快眠だ、さんきゅ。しかしまあ……平野は
よく眠ってるな」

「眠れる時に寝ていられるというのも、いい戦士の条件だよ。まあ
……そろそろ起きてもらおうでしょう」

先輩が平野をゆさぶって起こすと、平野は寝ぼけた顔で目を覚ました。

「あ……先輩……おあようございまふ……」

「あんたもよく寝てられるわねえ……」

「だって、これじゃあ……」

「無理もねーよなあ。ろくに進まないし」

バスの窓から外を眺めると、車と人でごった返していた。警官が住宅街を移動する市民を誘導しながら、やかましく警笛を吹いている。道路は相変わらず車で渋滞しており、ろくに進んでいる気がしない。

「街の外に逃げたほうがいいのに……」

「車だけが脱出の手段じゃないわ」

床主市には洋上に建設された大型の空港がある。空を飛んでいる飛行機の大半はそこから飛び立ったものだろう。人の多い都市部は危険だと判断して、どこかの島や孤立した地域を目指している人間が大勢いる、ということをお嬢は語った。

「沖縄とかか？」

「適切な対処が行われているなら……北海道や九州でも大丈夫なはず。飛行機がむかっているのは大抵そのあたりよ」

「僕らもそういって行きますか？」

「遅すぎるわ。自衛隊やアメリカ軍が多い地域は、例え>奴ら<を制圧できていても、受け入れに厳しい方針をとり始めているはずよ」

>奴ら<に食われた人間は>奴ら<になって周りの人間を襲い始めるんだ。そう簡単に受け入れられないだろう。

「いずれ世界のあらゆる場所がそうなる。他者との接触が、> 奴らの侵入を意味しかねないとしたら、アンタどうする？」

「引きこもります」

「世界中の人間がそう考えたらどうなるかしら？」

疑心暗鬼になり、他者が全て> 奴らに見えるようになってしまったら……それはつまり、誰とも関わり合いをもたなくなることの意味する。生き延びるのに必要な最小限のコミュニティを維持するだけだ。

「今更だが……お嬢って本当に頭がよかったんだな」

「なに言ってるのよ……あいつ、もうそういうノリになってるじゃない」

後部座席で生徒たちにむかって演説を続けている紫藤を示すお嬢に、俺は納得した。紫藤は出て行った小室や宮本を追いかけようとしたしなかった。あいつは自分に従わない人間には容赦しない。おそらく、これからも同じように見捨てるだろう。

「ああ……納得。すげー分かりやすい例だな」

「自分で気づいてるかどうかはわからないけど……いい、たった一晚でそんなのよ？」

「……追い出しましょうか？」

「よし、やるか」

平野と俺がヤル気まんまんて紫藤に喧嘩を吹っ掛けようとするのを、お嬢が止める。

「やめときなさい。それより、あたしたちがどう生き残るか考えた

ほうがいいわ。信用できる相手と……」

「俺は少なくとも、紫藤より『こっち側』にいる人間は信用できると思うがな。それ以外は論外だ」

つまり お嬢、平野、先輩、静香姉えだ。プラス、小室と宮本だ。学校でもチームを組んで、互いに背中を預け合って戦ったんだ。

「そ、そうね……あんたにしては上出来よ」

「……仲がいいですねー、上坂君と高城さん」

「な、なに言ってるのよ……」

「お嬢がめずらしく俺をほめてくれた……や、槍でも降るのか？」

「あんたってヤツは……ホントバカね！」

バスは渋滞の中をゆっくりと進んでいき、ようやく住宅街を抜けた。橋へと続く川沿いの道を走り始める。ここをもう少し進むと床主城があり、その先に御別橋がある。橋を越えることができれば、小室たちと約束した東署に行くことができるのだ。

リーダーとなった紫藤の演説は、まだ続いていた。それは別に構わない。耳障りではあるが、無視していればいいだけの話だ。

「こっこういう時だからこそ、私たちは藤美学園の者としての誇りを忘れてはならないのです……その意味で、バスを飛び出していった小室君と宮本さんは、みなさんの仲間になさわしくなかったのです！生き残るため、団結しましょう！」

それでも、今の言葉はカチンときた。仲間のことを悪く言われて、頭にこないワケがない。

「皆で力を合わせ、この難局を切り抜けるのです！」

紫藤の言葉に熱が入り、バスの車内は異様な空気に包まれていく。紫藤の言葉を聞く連中は、紫藤から片時も目を離さず、もはや紫藤のことしか見えていないようだ。

「…………マジ、ヤバイわよ」

「確かにな。あれではまるで新興宗教の勧誘だ」

「まるで、じゃなくてまんまその通りよ。話を聞いてる連中を見てみなさい」

後ろにいる生徒たちは、全員が紫藤の言葉に聞き入っていた。それだけならまだしも、その瞳には狂信の色が宿っている。紫藤を絶対のリーダーと崇め、信賴しているという何よりの証だった。

「ありや、洗脳もいいところだろ」

「宗教カルト…………『紫藤教』の始まりを始まりを目にしてるの、あたしたちは」

「道がこの有様では、バスを捨てて逃げるしかないな」

「なんとか御別橋を渡って東署に向かわねーと…………小室と約束したし」

例えばバスから降りたとしても、橋さえ渡ればどうとでもなる。小室と約束した時間は7時だから、今日は急いでギリギリってところだろう。

「あなた、自分の家族は心配じゃないの？」

「…………俺の家族は大丈夫だ。静香姉えしかないからよ」

「…………あつ、ごめん」

「ははっ、気にすんなお嬢」

「毒島先輩は、ご家族のほう大丈夫なんですか？」

平野が先輩に聞く。そういえば先輩のお父さんは、有名な剣術家だと言うのを聞いたことがあった。

「心配だが……家族は父一人だし国外の道場にいるよ」

「あ、そうなんですか……」

「それに、私たちはチームだろう？ 仲間のした約束は、私の約束も同然だ。そして父からは、一度した約束は命に代えても守れと教えられた」

一切の迷いなく、そう答える毒島先輩はとても凛々しく見えた。

「みなさん、おうちはどこなの？」

「小室とかと同じ、御別橋の向こうよ」

「ぼ、僕も両親は近所にいないんで……あの、みんなと一緒にならどこでも……」

平野の両親は仕事の関係でずっと海外にいるらしい。親父さんが宝石商を営んでいて……お袋さんはファッション・デザイナーだったか。俺も初めて聞いた時は驚いた。エロゲの主人公かと思っただけである。

「いつの時代のキャラ設定よそれ！」

「王道だよな」

「ふふつ……マンガだとパパは外国航路の客船で船長さんとかですよ」

「お祖父ちゃんがそうでした。お祖母ちゃんはヴァイオリニストだったし……あははは」

「か、完璧じゃない……」

何でもないことのように笑う平野を見て、お嬢が打ちのめされたように頭を抱えている。あまりにも道が渋滞して動かないので、静香姉えは運転を止めている。

「で、どうするの？ 私も一緒に行きたいから」
「いいの？」

「だって京君は高城さんたちと行っちゃうだろうし……」
「……そういえば、鞠川校医と上坂君はどういう関係なんだ？」
「そっぴや、先輩には説明してなかったっすね」

俺は先輩に俺と静香姉えが義理の姉弟であることを教える。先輩は事情を聞いて少し驚いたようだった。

「そっぴやだったのか……」
「意外よね、上坂がこの顔で……あははっ」
「人は見かけによらない、ということかな」

前にも同じようにからかわれた記憶があったような気がする。お嬢と先輩は笑っていた。

「先輩まで……笑わないでくださいよ」
「ふふっ、すまない」
「あと、こんなこと言っちゃいけないんだけど……紫藤先生あんまり好きじゃないの」

真顔で言う静香姉えの言葉に、みんなで一斉に噴き出した。とにかく、これで方針は定まった。あとは俺たちでバスを降りて小室たちと合流するだけだ。

運転席のほうで集まっている俺たちを不審に思った紫藤が話しかけてきた。

「どうしたのですか、皆さん？　ここは一致協力して……」
「ご遠慮するわ、紫藤先生。あたしたちにはあたしたちの目的があるの。修学旅行じゃあるまいし、あんたに付き合う義理なんてないわ！」

「はははっ、よく言ったお嬢！」

「ほっ……」

お嬢が紫藤を否定した瞬間に、後部座席にいる連中の目つきが変わった。殺気だったような視線で俺たちを見ている。特に、さつき俺が蹴り飛ばした角田というヤツは今にも殴りかかってきそうな面をしていた。いかにも紫藤教の信者らしい反応だ。

さつきはお嬢に止められたが、あっちから来るなら話は別だ。俺は木刀をいつでも抜けるように構えておく。

「あなたたちが決めたのならどうぞご自由に。なにせ日本は自由の国ですからね……」

「自由の国って、アメリカじゃなかったっけ？」

「上坂君、本当に君は……人の話の腰を折るのが好きですねえ！」

口の端を引きつらせながら、額に青筋を浮かべる紫藤を煽るように俺は減らず口を叩いて返す。

「しょうがないでしょ？　俺、紫藤先生が嫌いなんで」

「口の減らない生徒だ……とにかく、あなたは困りますね鞠川先生。現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます。どうです、残ってもらえませんか？　こちらにも貴女を頼りにする生徒たちが……」

紫藤が嫌な微笑みを浮かべながら運転席のほうへゆっくり歩みよってくる。

パシユン！

紫藤の頬を掠めて釘が飛ぶ。外れた釘は後部座席へと突き刺さり、紫藤の頬から血が一筋流れ出した。

「ひ、平野君……？」

紫藤は傷ついた頬を押さえながら、平野を見ている。この距離で紫藤の頭に風穴が開いていないのはむしろ不自然だった。おそらくは平野が威嚇として撃つたのだ。

「外れたわけじゃない……外したんだ」

「き、君はそんな乱暴な生徒では……」

「俺が学校で何人片づけたと思ってるんです？ だいたい……お前は前から俺のことバカにしてやがったじゃねーか！ 我慢してきた……俺はずっと我慢してきた。普通に生きていたかったから、ずっと我慢してきたんだ！」

平野は、胸の内に秘めていたものを吐き出すように吼える。

俺が平野と出会う前のことだ。平野はいつもひとりだった。まわりにいるのは、こいつをイジめる屑ばかりで……当然、仲良くなつた俺にも矛先が向いたが、全員まとめて返り討ちにした。反逆の姿勢を見せたことで、表立って平野をイジめる連中はいなくなった。

「救ってくれた友達がいたから……俺は耐えていられたんだ！ でも、もう耐える必要はない！ 普通なんて何の意味もない！ だから……俺は殺せる。生きている奴だつて殺せる……！」

「ひ、平野君……そ、そんなことは……」

俺はその瞬間、平野が何か覚悟を決めたように感じた。こいつに
なら、背中を預けられる……そう思った。平野の迫力に気圧されて、
紫藤が後ずさっていく。

「毒島先輩、先に降りてください。ぼくらが後衛をつとめます！」
「男子だな……平野君！」

先輩が得物を手にバスを降りていった。先輩に続いてお嬢と静香
姉えが荷物を持ってバスを降りていく。

これで、車内に残っている仲間は、俺と平野だけになった。平野
は釘打ち機を構えたまま、紫藤をにらみ続けている。紫藤は死ぬか
もしれないという恐怖で震えていた。これ以上邪魔する気はないよ
うだ。

「上坂……どうする？」

「一発くらい殴るつもりだったんだが、気が変わった。コイツにや
殴る価値もねーよ」

「……そうだね」

「よし、決まりだ。さっさと行こうぜ、コーター！」

「ああ！」

「じゃあな、紫藤先生」

俺は吐き捨てながら外に出ると、思い切りドアを閉めてバスから
降りた。

バスから降りた俺たちは、ここから近い御別橋へとむかうことに
した。歩いてもそれほど距離はないから、遅くても日が暮れるまで
には橋を越えられるだろう。

「それにしても平野、さっきのは痺れたぜ」

「あはは……頭に血が上っちゃって……」

「はははっ、俺なんていつもそうだから気にすんなよ！」

「アンタはもうちよっと頭使いなさい……」

「細けえこたあいんだよ！」

そんなやり取りをしている間に、俺たちは御別橋の前に到着した。道は相変わらず渋滞している……どうやら普通の渋滞ではなく、警察の手によって向こうへ渡る道が完全に封鎖されてしまっているようだ。別の橋を探すなら、ここから川沿いに歩いて、城の脇を通っていけば床主大橋のほうへ抜けられるが……。

「……って、あれ……？」

どうしたものかと思案している最中、道の向こうからこっちに来る男女には見覚えがあった。あの特徴的な2本の触覚は、宮本か。小室のほうはどこで手に入れたのか、大型のバイクを押して歩いている。

「先生っ！」

「あらあら、宮本さん。小室君も！」

先に気付いた宮本がこっちに走ってきて、笑顔で静香姉えの胸に飛び込んだ。静香姉えは宮本の頭を撫でながら、嬉しそうにしている。

小室も宮本も、学校で使っていた武器は失っているものの、ケガなどはしていないようだった。

「無事でなりよりだ、小室君」

「毒島先輩も無事でなによりです。上坂たちも来てくれたのか」

「約束したからな……そういや、どうしたんだよそのバイク？」

「ああ、途中で拾ったんだ」

「……小室つて、免許持ってたっけ？」

「無免許運転は、高校生の特権！」

「同感だな！」

はっはっは、と小室と俺は笑った。お嬢がそんな俺たちを呆れたような表情で見ている。

「まったく……あんたたち少しは緊張感を持ちなさい。このままじゃ向こう岸に渡れないんだから」

「他の橋はどうだったんだ？」

「どこもダメだったよ、ここと同じように封鎖されてる」

護岸工事をしていない上流から渡ろうにも、服を着たまま川を泳いで渡る……というワケにもいかず、俺たちはどう進むべきか悩むことになった。小室たちと上手く合流できたまではよかったが、手詰まりである。そんな空気の中で、静香姉えが提案した。

「あの……今日はもうお休みにしたほうがいいと思うの。もうすぐ暗くなるし……暗くなって出くわしたら、さすがに京君たちでも大変でしょ」

「夜に戦闘は確かに勘弁だな……」

「それはそうだけど……どこで朝までの時間を潰すの？」

「あのね、使えるお部屋があるの。歩いてすぐの所」

「カレシの部屋？」

「し、静香姉え……いつの間にか?!」

突然に降ってきた身に覚えのない彼氏疑惑に、静香姉えが恥ずかしそうに手を振って否定する。

「ち、ちがうわよ！ 女の子のお友達の部屋だけど……って、京君

は知ってるでしょ！」

「南さんのところだろ？　そういえばこの近くだったっけな」

南　リカ（みなみ　りか）さんは静香姉えの友達だ。俺も何度か会ったことがある。小麦色の肌が特徴的な美女で、県警のS A T（警察特殊部隊）に所属しており、射撃の腕は全国でもトップクラスの凄腕だそうだ。毒島先輩といい、どうしてこう俺の知り合いの女性はやたらとハイスペックなのが多いのか。

　　この川沿いに建っている豪華なマンションの一室に部屋を持っているのだが、仕事の忙しさから家を留守にすることが多いので静香姉えがカギを預かっているのだ。時々メンテに行く関係で俺も場所は知っている。

「知り合いなの、上坂？」

「ああ、S A T所属の人でさ。仕事が忙しいから静香姉えがカギを預かってんだよ。この川沿いに建ってる豪華なマンションだから見晴らしもいい。休むには十分な場所だと思うぜ」

「へえ、そうなんだ」

「たしかに、今日はもうくたくた……電気が通っているうちにシャワーを浴びたいわ」

　　みんな学校からずっと戦い続けているから疲れも溜まっていた。

> 奴らくの返り血で少なからず服も汚れている。男連中はまだ大丈夫だろうが、女性陣としては身体を清めておきたいところだろう。

　　髪をかきあげながらいうお嬢を見て、風呂に入る姿を想像した俺の視線は自然とお嬢の制服を窮屈そうに押し上げる胸にいつてしまふ。お嬢は着やせするタイプだ。俺は笑顔で親指をグツと立てる。

「風呂、いいね！　風呂は人類の生み出した文化の極みだろ！」

「だったらまずはエロい目で見るのをやめなさい、このスケベッ！」

俺の視線に気づいたお嬢が怒りのキックを放つ。脇腹にクリーンヒットだ。

「い、いい蹴りだぜお嬢……」

「うっさいエロ脳筋！」

「今日見た中で一番、上坂がダメージを受けているように見えるよ……」

げしげしとお嬢に足蹴にされる俺を見て、小室が苦笑している。俺は話題を変えることにした。

「いてて……あ、コータは喜ぶかもな、武器もあつたぞ。俺は使えねーからすっかり忘れてたが……」

「まじで!?!」

「お、おう……目が輝いてんなお前」

「早くいこつー!」

バイクを持つてる小室に、静香姉えを乗せてもらって先にマンションの様子を見に行ってもらうことにした。俺は残りのみんなを連れて後から合流する。

少し歩いて、南さん家のマンションの前に到着した。建築からそれほど経っていないメゾネットタイプのマンションは、白を基調とした綺麗な外観をしている。

マンションのまわりはわりと高い塀で囲まれていた。他の住民の姿はなく、窓が空きっぱなしの部屋もあるくらいだ。マンションのそばにある駐車場にはゴッイ見た目の装甲車が止まっている。

「ハンヴィーだ! それも軍用モデルだよこれ!」

「ね、戦車みたいでしょ?」

「> 奴ら<は塀を越えられないだろうから、安心して眠ることはできそうね」

宮本の言葉を聞いて、俺はどこことなく不安を感じていた。イヤな方面には異常な中率を発揮してしまう直感が反応している。

「……だといーけどな」

「なあ上坂、何か武器ないか？ 拳銃は手に入れたけど当てる自信がないんだ」

「だよな、慣れてない武器じゃさすがに……」

そう言っつて小室は、制服のベルトに差していた黒光りする拳銃を見せる。俺たちと別行動している間にも色々あつたんだろうな。何があつたのか詳しく聞く気はないが。

「え、銃!?!」

「落ち着け、コータ」

「あとで弄らせてやるよ、ともかく今は……」

『おおおおおおおおお』

> 奴ら<の低いうめき声がこだまする。マンションの塀の中に多数の> 奴ら<がいるのが見えた。俺たちの声に反応して出てきやつたのか。

「……ああ、休む前に『掃除』しなきゃな。小室、これ使え」

俺は持つてた木刀を1本、小室に手渡した。小室は受け取った木刀の重さに少し驚いているようだった。

「結構重いなコレ……」

「お互いにカバーし合うことを忘れるな」
『はい』

先輩の言葉に返事をしながら、俺たちはそれぞれの武器を構える。槍をなくした宮本は途中で拾ったらしい警棒を構えている。平野の釘も残り少ない。近接戦のできる俺たちが奮戦するべきだろう。

「無茶はするなよ……行くぞ！」
「おうよ！」

俺と小室を先頭に、マンションの門を開けて中へと踏み込んだ。庭、階段、通路。至るところにいる。奴らくを潰しながら進む。俺たちは攻めに出ていた。奴らくから逃げる為ではなく、一時の居場所を得る為に。奴らくと戦っている。

階段の上にいる。奴らくの前まで踏み込んで、俺は木刀を下から掬い上げるように跳ね上げた。木刀は顎を打ち抜き、奴らくを沈黙させる。

> 奴らくを倒すことに、俺は喜びを感じていた。最初に戦った時は、恐怖すら感じていたというのに……。

お互いをカバーしながら進む俺たちを止めるものは、何もなかった。最上階まで制圧し、奴らくの気配がなくなったのを確認する。俺たちはマンションにいた。奴らくを片付けた。オレンジ色だった空は、ほとんど紺色に染まってきている。

「よし……外にいるのはこれで全部だな。僕たちは先に部屋を見てくるよ」

「そーだな。じゃ、門閉めてくる」

俺はマンションの門のロックをかけようと手を伸ばす……その時、俺は妙な違和感を覚えた。誰かに見られてるような気がしたのであ

る。周囲を見回すが、奴らくの姿はない。だいたい、アイツらに視力はないはずだ。俺が自分で身体を張って証明したことだ。

「どうしたの、上坂？」

俺の様子を見て、お嬢が心配そうにしている……。むやみに警戒させても仕方ない。俺は何でもないように笑ってお嬢に話しかけた。

「いや、暴れたら結構疲れちまってさ。日も暮れてきたし、さっさと部屋ん中入るうぜ」

「そうね……。これでやっと、ゆっくり休めるわ」

「そうだな。風呂風呂」

「言っとくけど、覗いたら……。殺すわよ？」

「H A H A H A、ソナナコトシマセンヨ？」

「急にカタコトになってんじゃない！」

「痛えよ！」

門にカギをかけた俺は、お嬢に蹴られながら、もう一度だけ後ろを振り返った……。何もいない。いや、気のせいならそれでいい。

そして、終わってしまった世界で、初めての夜が訪れる。

第6話「再会」（後書き）

はい。ようやく南さんのマンションまで到着です。

……ここまで来るのに6話、先は長いですね。

時系列は基本的にマンガのほうを参考にさせてもらいました。

アニメ版だとだいぶ違うんですね……。

ご感想など、お待ちしております。それでは。

第7話「ひとときの休息を」(前書き)

投稿が遅れて申し訳ありません。
前回の続きになります。

第7話「ひとときの休息を」

南さんの部屋に着いた俺は、まずは女性陣に風呂に入るように勧めた。みんな戦いつぱなしなせいで返り血がひどいし、いい加減服を着替えたいだろう。

「野郎は後でいいだろ、なあ小室、コート？」

「そうだな、別に僕は構わないけど……」

「うん」

2人の了承を得た俺はポンと、手を叩きながら思い付きを口にする。

「そうだ。別々に入っても時間かかって面倒だし、いつそみんなが入っちまえば？」

「では、そうさせてもらおうか……のぞかないでくれよ？」

毒島先輩は冗談っぽく言って笑う。

「はは、そりゃあ保証できないっす。先輩のが拝めるなら命をかける価値はありますからね」

「……き、君は時々正直すぎるぞ」

ストレートに気持ちを言ってみると、先輩が頬を僅かに染めて恥じらっている。お嬢がにっこりと笑って聞いてきた。

「ねえ上坂、右足と左足どっちがいい？」

「仕方ねえだろ、それが男の子なんだよ……！」

「かつこよく言って誤魔化すなっ！」

もうちょっと反応を見てみたかったが、お嬢が本気でキレそうなのでこれ以上は自重することにした。リビングは着替えに使っらしいので、俺たちはそそくさと階段を上がって2階の部屋に向かった。リビングからは階段で2階へと向かうことができる。

2階の部屋は、南さんの私室だった。大き目のベッドに薄型のテレビなど、飾り気はないがどこか高級感のある部屋である。ただし壁際に女性の部屋には似つかわしくない鉄製のロッカーが設置されており、それだけが明らかに浮いていた。武器があるとすれば、この中しかないだろう。でも、このカギは持ってないんだよなあ……ぶっ壊した方が早いかな。

俺は持ってきた荷物の中からボールを取り出す。ロッカーには扉が2つあり、先に右側を開けることにした。

「よっ、と！」

ロッカーの隙間にボールの先をぶち込んで無理やり力任せにロッカーをこじ開けた。

ガギッ！

鈍い音を立てて開いたロッカーの中には外国語で文字の書かれた小さな箱が大量に収納されていた。コータが箱の中身を調べると、銃の弾丸がみっちりと入っていた。あとは双眼鏡や、銃のパーツのようなものがある。コータが弾薬を1つ1つ調べて何があるか見ている。やたら楽しそうだ。

「弾薬がこんなにあるなんて……これだけあれば……」

盗賊じみた行為に勤しむ俺たちとは対照的に、階下から聞こえて

くる女性陣は黄色い声を上げながら、仲良く入浴を楽しんでいる様子だった。キャツキヤと騒ぐ声が2階まで響いてくる。

「楽しそうだなあ……」

「今からでものぞきに行くかい？ 俺あ同士をいつでも歓迎するぜ」

「あれだけ高城に蹴られてもまだ行こうとするお前は本当にすごいよ……僕はまだ死にたくない」

「でもよう、小室。好きな女の子の裸を見たいと思うのは男として当然の欲求だぜ。宮本の……見たくねえのか？」

「そ、そりゃあ見たいけど……」

小室の奴は顔を赤くしながら悩んでいる様子だ。ははっ、初々しい奴だなあ。

なんせ、うちのガツコの美少女、美女が揃ってる。命の張るくらいの価値はあるだろうよ……まあ、あつちのお宝映像も見たいところだが、今はこっちの宝箱に集中しようかね。

「……ふんっ！」

俺は左側のロッカーの隙間にバールを差し込み、勢いよくこじ開ける。ロッカーの中に入っていた黒光りする『お宝』を見て、俺は思わず笑みを浮かべた。

「見るよ2人も。大当たりだ」

ロッカーの中に入っていたのは、黒光りする銃器の数々だった。ライフルにショットガンにクロスボウに……とにかく各種の銃器が色々ある。どこからこれだけのモノを揃えたんだろうかと思いたくなるほどだ。

コータが目を輝かせて武器を手取る。嬉しそうに銃を手を取っては、解説をし始めるが……ごめんコータ。説明が長くて覚えきれなかったよ。

「へえ……」

小室が目の前にあったショットガンに手を伸ばす。そしてガチャリとバーを引き、何気なく銃をコータに向けた。

「た、例え弾丸シヘルが入っていなくても、絶対に人へ銃口を向けるな！
向けていいのは……」

「> 奴らだけ……か」

「……それで済みゃあいいけどな」

こうして、銃を手に入れた俺たちは、コータに教えてもらいながらマガジンに弾を詰め始めた。

「さすが、コータは実銃撃つただけあつて教えが的確だな、つと……」

「本物撃つたことあるのかよ!？」

「前にアメリカに行った時にね」

民間軍事会社……ブラックウォーターのインストラクターに1ヶ月教えてもらったらしい。その人はデルタフォースの曹長だつていう話だ。本当にそっち方面は完璧だな、と小室が感心している。

「けど……こんなに銃を持ってて大丈夫なのか？」

「基本的には違法じゃないよ」

コータ曰く、ここにある銃をパーツを別々に買う分には違法では

なく、その後で組み合わせたら違法だそうだ。その辺の法律の抜けど道的なものはどこにでもあるものだなあ、と思った。

「警官ならなんでもありかよ……」

「まあ、いいじゃねーか。おかげでこうして武器も手に入ったんだし」

「普通の人じゃないのは確かだね」

本来ならば、独身の警官っていうのは寮に住まなければならないらしい。にも関わらず、豪華な部屋に住んでるのは何か理由があるのだろう。

「実家が付き合ってる男が金持ちなのか、もしくは汚職でもしてるのか……その辺りはどうなの上坂？」

「んー、良い人なのは間違いないんだが……とりあえず、すごい美人だぞ」

「まずはそこなんだな……」

俺の答えに小室が苦笑している。

「おかげで静香姉えと一緒にいるとナンパ野郎が絶えなくてなあ……
…ありや面倒だった」

まあ、遊びに行ったりした時に色々あったのだ。その話は機会があれば話そう。

キヤツ、キヤツ。

風呂からの楽しそうな声は相変わらずだった。騒ぎすぎな気もするが、楽しそうで何よりだ。小室はロッカーで発見した双眼鏡でベランダから外を眺めている。コータは心配そうにしているが……。

「さすがに騒ぎすぎかも……」
「大丈夫だろ。>奴ら<は音に反応するけど……橋のほう騒がしいからな」
「にしても……すげえことになってんなー」

太陽が沈んで、真っ暗な空が広がっている。外はすっかり夜の色に染まっていたが、御別橋のほうはライトで煌々と照らされて昼間のように明るい。封鎖された橋に人が集まっているせいもあってこの辺りで一番騒がしい場所だろう。俺は詳しい情報を知るためにテレビの電源を入れた。テレビ中継では、ちょうど御別橋付近の映像が映し出されているところだった。

『床主市西部の封鎖はなおも継続されておりますが、日本全土のみならず全世界で殺人病の蔓延するなか、その意味があるのかどうかについて批難が噴出しています』

リポーターの言う殺人病……というのは>奴ら<のことだろうか。言い得て妙な呼称だった。

『警察の横暴を許すなー！』

『ゆるすなあああー！』

『ただいま、警察などによる橋の封鎖に対する抗議を目的とした団体らしき人々がシュプレコールを叫びはじめました！』

リポーターの後ろに大声を張り上げながら警察に抗議する団体の姿が移っている。それぞれが拡声器やプラカードなどを持ち、声高に主張を繰り返している。

『われわれはあ、政府とアメリカの共同開発した生物兵器による殺

人病の蔓延についてえ、徹底的に糾弾するう！」

警察に対して抗議をする団体は『殺人病』というアメリカが極秘に開発していたウイルスが原因でこのような事態になったと声高に主張しているようだ。

「殺人病、ねえ……………」

「正気かよ！ 死体が動くななんて科学的に証明できるはずがないのに……………」

とはいえ……………まんざらありえない話でもないんだよな。だいたい、死体が動きまわっている時点で科学的じゃない。俺たちはそれ以外にも、トカゲじみた化物やカギ爪を持った連中……………そういう常識を越えた化物たちとも戦ってきたのだから。

空気感染だとすれば俺たちが無事なはずはない。奴らに噛まれたら感染するということは血液感染だが、少なからず>奴ら<の返り血を浴びてもなお大丈夫な俺たちを見ると、他にも何か条件があるのだろうか。

「連中、左翼サユウだね？ 設定マニアにもほどがあるよ」

「確かに左翼は設定マニアで悪い病気だ……………極右翼の人種差別主義者と同じくらいに」

小室は複雑そうな表情で語っている。こいつがこつこついう事を言うのは珍しいな。

「へえ、意外だぜ。小室がそういうこと言うなんてよ」

「ああ、お袋の同僚に今でも左翼活動やってるのがいるんだよ……………それでちよつとな」

「お袋さんの職業は？」

「小学校の先生だよ。川向こうの御別小学校で1年生のクラスを持つてる……生徒がいる限り逃げてないだろうな。そういう人だよ」
パンっ、パン！

遠く、窓の外から拳銃を発砲する音が聞こえてくる。テレビを見ると、警察が>奴ら<と化した市民に発砲を開始したらしい。だが、中にはまだ噛まれていない人間もいた。1人の母親が娘を噛まれた娘を抱いて助けを求めている。

『やめてえっ、撃たないでっ！ 私もこの子もまだ生きてる！』

母親はともかく……娘のほうはもう手遅れだろう。事実を裏付けるように、母親に抱かれてぐったりしていた娘が母親の首筋を噛みちぎった。我が子によって食われた母親はじきに>奴ら<と化す。胸が軋む。家族を失う光景を目の前で見せられて嫌でも昔を思い出してしまうからだ。

抗議団体は、正義を得たといわんばかりに暴力を振りかざす警察を猛烈に非難し始める。中継のカメラが、警察の現場責任者らしきおっさんが、最前列で抗議する男の元へ歩み寄っていくのを映し出した。

『ただちに立ち去りなさい。ここにはあなたたちも危険だ』

自分の熱弁に酔った団体の男はまるで意に介さない。警察官は最後の警告をするが、それさえ無視して男は批難を続ける。

『詭弁だ！ おまえたちはあ、政府とアメリカの陰謀を隠す為にい……』

『もう一度言う。政府と県警は最後の命令で治安維持のために必要な全ての手段を取れと命じてきた。法律的には怪しいが……命令は

命令だ』

パンッ！

抗議をしていた男は、額を拳銃によってぶち抜かれた。倒れる男と同時に悲鳴が上がリ……テレビは放送を中断した。これ以上の情報は得られそうにないな。小室たちを見ると、言葉を失っていた。少なからず動揺しているみたいだ。

「どうにもならなくなってる、すぐに動いたほうが……」

「小室、暗い中で奴らくとやりあう気がよ？ 身体が持たねえぞ」
「だね。明るくなってからのほうが……」

その時、話に集中していた俺たちは、背後からこっちに近づいてくる人影に気づいていなかった。俺はいきなり暗闇から伸びてきた手に頭を掴まれてしまった。

「ぬあ……！？」

「きょうくん〜」

暗闇から姿を現したのは、静香姉えだった。抱きついてくるせいで、湯上りで若干湿った長い髪が肌に触れる。シャンプーの香りになんか酒臭いものが混じっているのに気がついた。良く見ると風呂上りにしても顔が赤いような……まさか。

「……静香姉え、怒らないから正直に話せよ？ 酒飲んだか？」

「はい、のんじやいましたあ〜！」

「おい誰だ静香姉えに酒飲ましたの！ この人あんな酒強くねえんだぞ！」

静香姉えは、酒に酔っ払うところして誰彼構わず絡んでくるのだ。ぶっちゃけると、酒癖がよろしくない。後ろから抱きつかれてるからバスタオル越しに温かくて柔らかいものがあるなあ！ちくしょうでつかいくせにやわらけえなあ！むにゅむにゅだよ！

俺だけじゃなく、小室や平野にも抱きついてキスやら何やら……ああ、どんどん被害が拡大していく。思春期の男子にとっては刺激が強すぎるだろ。乱れまくりの姉を見て、弟としては複雑な気分だった。

「こら、静香姉え……でかい声は出すなって……」

「えーやだー。しずかお外こわいからずっとここにいるのー」

まるで小さな子供のようにぶーたれてだだをこねる静香姉え。あんな今年で27歳だろうに……。

「い・い・か・ら・寝ろ！弟命令だッ！」

「じゃあ、おんぶー」

「はいはい……」

身体だけ大きな子供と化した静香姉えに背を向けて、首に手をまわさせる。そんなに重いわけじゃないが……疲れるな。酔っ払いの相手はいつだって面倒だ。俺は静香姉えのふとももに手を伸ばして支える。びくんと反応した静香音姉えが甘い声を上げる。

「ひゃん。お尻に触ってるう……きょうくんのえっちー」

「我慢しろ、この酔っ払いめ」

「はあーい」

「あはは、慣れてるなあ……上坂」

「何やってんのよ孝ったら……静香先生見てデレデレしちゃって……」

……

「れ、麗……？」

階段を上がってきた宮本が、小室を見て怒っていた。発育の良い身体を薄手のキャミソールが包み、下半身はパンツ一枚……お前ら一応男がいるってことを忘れてねえか？ 目の保養になるからいいけどよ。

小室を見る宮本の目がどこか据わっているように見える。

「おい宮本……まさかお前も酒を……」

「なわけないでしょ」

「だ、だよな……お前がまともでよかつ……」

「あゝ、孝と上坂君が3人ずついるよゝ、増えたあゝ」

「よし、お前がダメなのはよゝく分かった」

まったく、足下がふらついているじゃねえか。どんだけ……飲んで忘れたいことがあったんだよ。

「……小室、お前は宮本の相手してやれ。俺は静香姉えを下に寝かせてくるからよ」

「ああ、わかつたよ」

「こらー、孝ー、聞ってるのー？」

酔った宮本が小室に絡んでいる……宮本と付き合いが一番長いのは小室だし、何とかしてくれるだろう。

「コート、悪いけど見張りよろしくな」

「あ、う、うん……」

静香姉えに過激なスキンシップを食らったコートがショックで軽くふらついているのが分かる。すまん……コート。

俺は静香姉えを担いでリビングの階段を下りる。1階のリビングの絨毯の上に静香姉えを下ろして寝かせておいた。広々としたリビングはみんなで寝てもまだ余裕がありそうなくらいだった。

まあ、この時期だから風邪をひくのは心配しなくて大丈夫だろう。メガネのないお嬢が俺の後ろからひよつこりと顔を出した。

「上坂……こんなとこで何やってんの、姉に夜這い？」

「人聞きの悪いことを言うな。酔っ払いを運んできたんだよ」

お嬢はタンクトップにホットパンツか……これまたラフ極まりない格好だ。つたく……どいつもこいつも。洗濯してるせいで着るものがねえのかもしれないが、若い女が肌を見せすぎだ。襲われても文句は言えねえぞ。

「こんな状況だもの……お酒で気が紛れるなら安いものでしょ？」

「……まあ、確かにな」

世界は変わってしまった。今日だけで普通に一生分以上の人が死ぬところを見た。下手をすれば大切なものを無くしたりしてるんだから、酒でも飲まなきゃやってらんねえ、か。そりゃ何もかも忘れてたいって思うよな、人間なら。

「ねえ……上坂」

お嬢が俺の耳元で囁く。やたら距離が近いせいで風呂上りで上気した肌の温度さえ感じられる。お嬢がいきなり抱きついてきた。

「んな……!？」

さっきの静香姉えと同じ状況だが相手が違う。お嬢の小柄な身体

に似合わないほどに大きく発育した双つの柔らかいものが背中て漬れて自己主張している。熱い吐息が首筋にかかってゾクゾクした。

「あんたの背中、おつきいね……やっぱ男の子なんだ」

「ま、まあ……それなりに鍛えてるしな」

待て待て……これは本当にお嬢か、キャラ違くない？ 偽物か！？
やばい、混乱しているせいで思考がまとまらない。やっぱり酔ってるのかお嬢も。

「お嬢……俺まだ風呂に入っていないからあんまくっつくくと汚れちまうぞ」

「ほんとだ、汗臭い……」

「だろ？ さっさと離れて……」

「上坂はイヤ？ あたしにくっつかれてるの」

お嬢が不安そうに聞いてくる。アルコールのせいで潤んだ瞳が可愛さに拍車をかける。

「イヤなわけあるか。嬉しいに決まってるだろうが」

俺も酔いがうつったか、口はいつも以上に正直だった。可愛い女の子に抱きつかれて嫌がるのはガチホモだけだ。

「……このままだと理性がぶっ飛びそうなんだよ。今も正直危ない。お嬢が可愛いから悪いんだ」

「ふふっ……なにそれー」

普段のツンツンしたお嬢とは違って、まるで子供のように甘えてくる。お嬢の性格が変わっているように思えるのは、俺が本当の高

城 沙耶を知らないからだろうか。

「あのね、上坂……ありがとうね、守ってくれて」

それは、予想もしなかった言葉だった。素直な感謝の気持ち。俺は胸の中に温かい感情が生まれるのを感じた。

「約束しただろ。死なせねえし守るって」

「うん……ありがとう……」

お嬢はそのまま、静かに寝息を立て始めた。やれやれ……これだから酔っ払いに付き合うのは大変だぜ。そう思った俺の顔には自然と笑みがこぼれていた。

俺はお嬢をゆっくりとリビングのソファに寝かせてから、リビングをあとにした。

喉が渴いたので水でも飲もうかとキッチンにむかうと、そこには料理を作っている先輩がいた。鍋からは湯気が立ち上っており、どうやら煮物を作っているらしく、醤油の良い香りが辺りに漂っている。

「ああ、上坂君か。もうすぐ夜食ができるところだ、明日の弁当もな……どうかしたか？」

俺は入り口でアホ面をさらして固まっていた。先輩がキッチンに立って料理を作っているのはいい、驚いたのは服装のせいだ。みんな薄着だったから先輩もそうだろうとは思ったが……。

先輩は素肌の上に白のエプロンを直接着ている、いわゆる裸エプロンである。下着は黒。面積が小さいせいで、きゅっと締まった綺麗なお尻から太ももにかけてのラインがほとんど見えてしまっていた。肌色面積も多く、男子高校生には扇情的に過ぎる光景だった。

「せ、先輩……その格好……」
「は、はしたなさすぎただろうか……？ 合うサイズのものがない
てな、服が乾くまでのごまかしなのだが……」

ちよつと恥ずかしそうに服をつまむ先輩、胸の谷間が強調される。
いや、実にけしからん格好です。男のロマンが詰まっっていて、とて
も良い。

「戦える格好じゃないから危ないかなーと……」

「君がいるし、平野君たちが警戒をしてくれている……評価すべき
男には絶対の信頼を与えることにしているのだ私は」

そう言つて優しく微笑む先輩は、ひどく魅力的だった。俺はそれ
以上に仲間として、信頼してもらえたことが嬉しく思えた。

「ありがとうございます。先輩にそう言ってもらえて嬉しいです」

「友人には冴子、と呼んでほしいよ」

「……じゃ、冴子さんで。なんか手伝いましょうか？ 俺こつ見え
て家事は結構……」

わんっ、わんっ！

犬の吼える声。それに呼応するように、外がやけに騒がしくなっ
たように感じた。俺と先輩は急いで2階のベランダへとむかった。

「ヤバイよ……」

平野が眼下の光景を見てそう呟いた。先に来ていた小室も同じよ
うに固まっている。ベランダの下には、塀の向こうで大量の奴ら

くが、光に群がる虫のように集まってきていた。夜は人間の時間じゃない。どつやら、本当の地獄は、まだ始まってすらいなかったらしい。

夜が深まり、最初の夜は本番を迎える。

第7話「ひとときの休息を」（後書き）

どうも狂犬です。

読んで頂いてありがとうございます。

最近、ユニークが2000を突破しました。これも作品を読んでくださるみなさまのおかげです。お気に入りの登録件数が増えるたびにヒヤッホウ！ と舞い踊っています。めざせ1000件登録！ それにしても……恋愛系のイベントって書くの難しいですね。どこまでやるうかと迷ってしまいます。

ご意見、ご感想ありましたらよろしくお願いします。

第8話「衝動」

夜になって活発に、奴らくは動き始めた。映画にしる漫画にしる化物の類が夜のほうが活動的なのはお約束だが……ベランダから見える光景は惨状という他に言いようがなかった。

ある者は手にしていたショットガンを奴らに撃ち、戦っていたが奴らに弾丸のリロードに気を取られている間に食われた。またある者は逃げながら家のドアへとたどり着くが、中へ入る前に奴らに追いつかれて食われた。それぞれに違えど、誰もが生きるために動いている。ただし、その中で生き残れるのは何人なのだろうか。その意味で言えば、俺たちは幸運だったのだろう。今は勝ち取った居場所があり、少なくともここに籠っていれば安全なのである。凄惨な光景を目にした俺以外の3人も凄惨な光景に表情を硬くしていた。

「畜生、ひどすぎる……!!」

「小室、撃つてどうするの?」

今にも外に飛び出していこうとする小室にコータが聞いた。問いの答えは単純だった。

「決まってるだろ、ここから 奴ら を撃つて……」

「撃つたら 奴ら が反応する。銃声はでかいし、隠しようがねえからな……」

冴子さんが部屋の明かりを消す。夜闇を払っていた電気の光が消え失せて、部屋が本来あるべき暗闇へと包まれた。冴子さんは諭すように俺たちに告げる。

「そうだ。そして……生者は光と我々の姿を目にし群がってくる」

今から外に飛び出して戦う、あるいはここから銃を使って倒すにしても、全ての人間を救えるわけじゃない。俺たちは英雄じゃないくてただの人間なのだから。学校からここまで何人も死ぬヤツを見してきたんだから、そんなことは分かっている。それでも、抗うこともできない自分に苛立ちを覚える。気がつけば木刀を折れそうな程に強く握りしめている自分がいた。

「……私だって、君の気持ちが分からないわけじゃないよ。それでも、慣れておかなくてはならない」

そんなことはわかってはいるつもりだった。外にいる 奴ら は自分の力だけで生き残らなきゃならない。俺たちがそうしてきたように。冴子さんは、決して臆病や非情な気持ちから言っているわけではない。友人として、仲間として俺たちを心配しているからこそ、こうして忠告してくれているのだ。

「はい……」

冴子さんの気持ちが伝わったのか、どうやら小室は落ち着いてくれたようだ。

それでも俺は、胸のざわつきが消えなかった。この地獄のような光景を見ていられなかったのだろうか……それが自分でもよく分からない。コータが心配そうに聞いてくる。

「京也、顔色悪いけど……大丈夫？」

「わりい、コータ……見張り頼むわ」

木刀を手にしたまま俺はふらふらとした足取りで階段を下りてい

く。なんだ、この血が滾るような感覚は……？

俺は明らかに興奮していた、まるで酒でも飲みすぎたみたいに熱っぽく、頭が上手くまわらない。俺の中で強い衝動が頭を支配しつつあった。

戦いたい。血を浴びながら 奴ら を殺して、ひたすらに暴れたい、壊したい。

頭の中にそんな衝動が突き動かされている。破壊的な衝動は収まることはなく、ただ強くなつていくばかりだった。喉の渴きのようにつきまとい、俺を揺り動かす。俺の脚は、ゆっくりと玄関に向かっていた。明らかにおかしいとわかっていても、俺は止めることができなかつたのである……。

「ア……」

「……死ね」

いつの間にか俺は、門を乗り越えて道路で暴れていた。振るつた木刀が 奴ら を肉の塊に変えていく。2本の木刀を軽々と振るいながら 奴ら を刈り殺していく。まるで血に飢えた通り魔のようだった。倒すたびに 奴ら の返り血が身体に降りかかっていく。木刀はもはや真っ赤に染まってしまっていた。

俺が外で暴れていることに気付いた小室たちが、ナニかを叫んでいる。

「上坂っ、何やってんだよ!？」

「危険だよ、早く戻って!」

俺がこいつら程度に負けるはずがねえだろうが……現に今だってこうして戦えているだろ。本当にこいつらは鈍い。学校であれだけ

苦戦したのが嘘のようだった。小室たちの声に振り返った 奴らを木刀で殴り飛ばす。

「……足りねえ」

「……ウー」

グチャア！

地面に倒れた 奴ら の頭をさらに足で踏みつけて潰した。肉を潰す気持ちの悪い感触に、嫌悪するはずの感情は湧いてこない。あるのは興奮と空腹にも似た感覚だけだった。こんなもんじゃまだまだ満たされない……もっと、もっとだ。

俺は道路を幽鬼の如くさまよいながら 奴ら を屠り続ける。木刀を一振りする度に 奴ら が倒れていくのは爽快だった。

「お願いです、入れてください、子連れで逃げられないんです」

「来るな、よそに行ってくれ！」

「ん……？」

民家の前を通りががった俺は、小学生くらいの女の子を連れた父親らしき男が民家のドアを叩いている場面に出くわした。子供を連れた状態で、武器も特に大したものを持っているワケでもないのにここまで逃げてこれたのは大したものだった。

だが、やっと逃げ込んだのにも関わらず、家の人間の返答は冷たかった。自分たちの身を考えれば、安易に人を迎え入れることはできないのだろう。それでも少女の父親はあきらめない。娘だけでも助けるために、さらに家のドアを叩く。

「頼む。自分はどうでもいいんです……子供を、娘を！」

父親の必死に訴えに対しても返事はない……どうあっても助けな
いつもりだ。それを見て、俺は苛立ちを覚えるのを感じていた。小
室たちみたいな良い仲間といたから、忘れていた。世の中の多数の
人間はこういうものなのだ、ということ。

「パパ……？」

女の子の不安そうな顔に、父親は持っていたスパナを振りかざし
てドアを壊そうとする強硬策に出た。

「開けてくれ！ 開けてくれなければ、ドアを壊す！」

それでも民家の人間に警告したあたりこの人は根が優しい人なの
だろう。娘を救うために必死な父親を本気だと感じたのが、ドアを
壊されてはかなわないと慌てて返事をする。

「ま、待ってくれ……いま開ける」

「ありがたい……」

その時の父親は、ひどく安心した顔をしていた。娘だけでも助け
ることができた、そう確信できたからだろう。ロックの開く音が聞
こえ、ゆっくりとドアが開かれていく。

嫌な予感を感じた俺は、民家に飛び込むように父親らしき男のシ
ヤツを掴んで倒し、割り込んだ。ドアが開いた瞬間に、包丁が飛び
出してきた。長い棒をガムテープか何かで巻いて槍のように長くし
た鋭利な刃物は間違いなく、殺すつもりで突き出されたものである。
俺が割りこんでなかつたら……今頃は父親の胸に突き立っていたか
もしれない。

「ちいッ……！」

左肩に焼けたような痛みが走る。突き刺さった包丁から鮮血が流れ出しているのが見えた。

家の中には包丁を持った男、その妻らしき女、息子に娘。武器を持つているヤツもいる。どいつもこいつも……恐怖に支配された目をしている。俺を刺した男は、怯えた声で謝罪の言葉を繰り返していた。

「許してくれ……許してくれ……」

自分たちが生き残る為に、こいつらは人を刺した。お嬢がバスで話した、生き残るための最小限のコミュニケーションの話思い出した。文字通り、俺は身を持って知ることになった。突き刺さった槍のような包丁の柄を握って、家の連中を思い切り睨みつけた。

「……謝るんじゃねえ」

「ひっ……!?!」

「……んだよ、この家の連中は雁首揃えて子供1人受け入れられねえってのか。拳句、人を殺そうとまでしゃがって。この人たちはどう見たって人間だろうが」

「わ、私は、家族を守らなくてはならないんだ……」

「だったら……こっちの気持ちだって分かるはずだろ。この人は娘を守ろうとして必死だっただけだ」

男の怯えた瞳の中には後悔があった……これ以上話しても時間のムダだろう。俺は刺さった包丁を引きぬいてドアを閉めた。いきなり割りこんできた俺を見て、女の子と父親は驚いているようだったが、お礼を言ってくる。

「ありがとう。おかげで助かったよ……ケガは大丈夫か？」

「お……お兄ちゃん血が出てるよ、痛くない？」

「……あー、結構痛いけどまあ、大丈夫」

まださっきの衝動の興奮が残っているのか……感覚がマヒしているようだ。傷口が少し熱く感じる程度だった。止血くらいはしておかないとマズイか。

「あの、これ……」

「お、ありがとな」

そう言っただけの子は俺にピンク色の綺麗なハンカチを差し出してくれる。俺は笑顔で頭を撫でながらハンカチを受け取って傷口を縛った。父親は八方ふさがりになってしまったことに複雑な表情を浮かべている。確かに、このまま 奴ら のうろついている中を娘を連れて他の家を探してまわるなど、自殺行為でしかない。

「……すぐそこに、俺たちが使ってるマンションがあります。俺の仲間なら、噛まれてないなら受け入れてくれるはずですよ」

「だが……見ず知らずの君にそこまでしてもらうのは……それにそのケガでは……」

「わんっ！」

犬の鳴き声に背後を振り向いた俺は、近づいてこようとしていた 奴ら を一閃した。頭をボールのようにぶん殴られた 奴ら は問答無用で行動不能になったようだ。

……今のは危なかった。わんこが吠えてくれなかったら噛まれていたかもしれない。白い毛に耳だけが黒い犬は身体こそ小さいが、ずいぶん勇敢なようだ。 奴ら を見ても怯えた様子がない。

「おう、サンキュなわんこ」

だが……あんまり吠えられると 奴ら を呼んでしまう。犬が女の子に懐いている様子を見て、連れていったほうがマシだと思った。

「お嬢ちゃんがコイツを持ってってくれるか？ 吠えないようにしてくると助かる。でかい音を立てると 奴ら が寄ってきちまうからな」

「うん！」

「わう……」

女の子は優しく犬を胸に抱きかかえた。集まってこようとすると 奴ら を見て、父親は迷っている時間はないと判断したらしい。

「よろしくお願いします」

「……俺の後ろから離れないようについてきてください」

俺は女の子とその父親を連れて、来た道を駆け抜ける。小室たちが受けて入れてくれるかどうかはわからない。俺は勝手に暴れて勝手に連れてきただけだ。最悪の場合……俺もこの親子も行き場を失うことを考えないといけない。奴ら は押しのけたり、足を転ばせるだけにしてひたすらに親子を護衛することに専念する。ただ殺してまわっていたさつきとはまるで正反対の状況だった。

刺された左肩だが、すでに血が止まっている。気味が悪いほどの驚異的な回復力だった。さっきの衝動といい、本当に俺の身体はどうなってしまったのだろうか。まるで人間のものじゃないみたいなきさえる。

散発的に襲ってくる 奴ら を転ばせながらようやく、駐車場のハンヴィーが見えるくらいまで戻ってきた。門の外に人影が見える。小室に宮本……冴子さんとお嬢もいる。仲間たちは門の前で待っていてくれた。まわりには襲ってきたのだろう 奴ら が倒れている

のが見えた。どうにか俺たちが駆け込むと同時に再び門が閉まった。俺はみんなの顔を見ることができなかった。俺は勝手に行動して迷惑をかけたのだ。追い出されても文句は言えない……。

「上坂、顔を上げなさい」

「お嬢……」

お嬢が俺の前にツカツカと歩み寄ってきて思いっきり平手打ちをした。

スパアン！

周りの 奴ら が集まってきそうなくらいいい音だった。叩かれた頬がジリジリと痛む。それはさっき包丁で刺された傷よりも、痛く感じた。

「……どう、目は覚めた？」

「……ああ」

「言いたいことは色々あったけど……とりあえずこれでいいわ。ア
ンタがバカなのは今に始まったことじゃないしね」

呆れたような顔で肩をすくめながらお嬢は言った。

「みんな……怒ってないのか？」

みんなの顔はとても怒っている様子ではなかった。むしろ俺たちを温かく迎えてくれているのである。面食らったような表情をする俺を見て、小室が苦笑する。

「上から見てたからだいたい事はわかってるよ。俺たちは仲間だ

る、助けあうのが当然だ」

「まったく……君は本当に無茶をするよ」

「でも、こうして無事だったんだもの、いいじゃない」

仲間の温かい優しさに触れて、俺は瞳が潤むのを感じていた。涙が溢れそうになって、思わず目を覆った。

「あー、お姉ちゃんがお兄ちゃん泣かせてるー」

「な、何言ってるのよこのチビツ子は！？ これは上坂が勝手に…」

…

「わう！」

「ほら、この子もそうだって」

お嬢が女の子と犬に振り回されているのを見て、みんなが笑っていた。女の子の父親は穏やかな声で俺に言う。

「君は……いい友達を持っているんだね」

「はい、自慢の仲間です」

俺は、迷うことなくその言葉を紡いだのだった。

壊れてしまった世界で迎えた初めての夜。地獄のような世界で、俺は凶らずもとある親子を救い、今日を生き延びた。それが悪夢のように続く毎日のたった1日だとしても……確かに得たものがあるのだから。俺はそれで十分だった。

第8話「衝動」(後書き)

評価して下さった方、お気に入り登録して下さった方。この場
でお礼を申し上げます。どうもありがとうございます。このような
拙い作品ですが、今後ともよろしくおねがいます。

今回は結構オリジナルな感じになりました。上坂がだんだんと人外
になりつつ、ありすちゃんのお父さんも生きています……名前どう
しよう。

感想などはいつでもお気軽にどうぞ。お待ちしております。最後に、
読んでいただいた方に最大限の感謝を。

第9話「暴走」

親子を助けて帰ってきてからは、おおむね平和な時間を過ごすことができた。無茶したのがバレて静香姉えに泣かれたり、冴子さんの作っていた煮物を味見させてもらったらやたら美味しくて感動したとか。まあ色々だ。風呂にもゆっくり入れたし、みんなちゃんと睡眠をとったので気力も体力もそれなりに回復することができた。

大変だったのはケガの説明だった。コータや小室はベランダから俺が刺されるところを見てたらしく、ずいぶんと心配された。包丁でぶっ刺されたのだから当然と言えば当然なんだが……これに関しては俺もよく分からないことが多い。静香姉えに一度調べてもらったが、特になにもわからなかったしな。不安にさせても仕方ないので、傷そのものが浅かったと言っておいた。

見張りの合間に、俺はコータに銃の使い方を教えてもらった。普通の 奴ら はともかく、イレギュラー相手にはバリエーションがほしかったからである。

デザートイーグル。大口径のマグナム自動拳銃で、拳銃の中では最高の威力を持っている。銀色をメインとした無骨なフォルムが気に入った。クマでも殺せるほどに威力があるそうだが、それに応じて反動も相応にでかい。まともに撃てるのが京也くらいだよ……とコータは言っていた。まあ、ちゃんと射撃の姿勢などを覚えれば女でも撃てるそうだが、銃そのものが結構な重さだしな。

「狙う時は胸のあたりを狙ったほうがいい。訓練してないし、間違いないく照準がブレるから」

「おっけー、わかった」

それから俺は、2階のベランダで見張りをしながら外の景色を眺めていた。長かった夜が明けて、また日が昇ってくる。世界がどれ

ほどに壊れてしまったとしても、ちゃんと朝は訪れるのだと俺は知った。

小室たちはまだ部屋で眠っている。まだ夜が明けたばかりだから…… 出発するのはもう少しあとになるだろう。そんなことを考えていると、後ろから声をかけられた。

「おはよう、上坂君」

「ああ、ケンジさん。おはようございます」

俺に挨拶してきたのは、昨夜俺が助けた親子の父親だった。名前は希里 ケンジ（まれさと けんじ）という。年齢は30半ばといったところで、短めに刈った灰色がかった髪にワイシャツにネクタイ姿の男性だ。優しそうな見た目だが、娘を守りながら 奴らの中を駆け抜けてきた勇敢な人である。職業は新聞記者だそうだ。俺の名前を聞いた時に昔の事件を思い出したのか、複雑そうな表情をしていたことを覚えている。勘のいい人だ。俺は彼のことを下の名前で呼ぶことにした。希里さん、だと娘のほうとごっちゃんになって分かりづらいしな。

「昨夜は助けてくれて、本当に助かったよ。君がいなかったら……私も妻のようになっていたかもしれない」「

「あの……失礼ですけど、奥さんは？」

「……家に 奴ら が押し寄せてきた時に……ね。ありすには内緒にしておいてくれないか？ 真実を知らせるには、あの子はまだ幼すぎる」

「……わかりました」

この人も……大切なものを失っているのだ。いや、失っているからこそ2度と失わない為に戦うことができるのだろうか。

「……うゝ、パパあ？」

とてとてとケンジさんの後ろから現れた女の子は、希里 ありす（まれさと ありす）だ。ケンジさんの娘で、小学2年生の元気な女の子だ。頭にヘアバンドをした赤みがかったショートカットの髪に左目の泣きぼくろが特徴的な少女である。眠い目を擦りながら歩いてくる。お父さんがいなかったので起きてしまったのだろう。

「お、悪いなありす。起こしちゃったか？」

「あ……京也お兄ちゃんおはよう」

俺を見てちゃんと挨拶してきた。この年齢なのに生意気なところがまるでなく、素直な性格をしている。とてもいい子である。

「わん！」

俺もいるぞ、といわんばかりに犬の鳴き声が出た。ありすにぬいぐるみの如く抱えられていた小型犬である。名前はもうある。

「ようジーク。お前は相変わらず元気だなあ……でもあんま吠えるなよ？」

「くうん……」

「ああもう、可愛いなあお前は」

ジークというのはこの犬の名前で、名付け親はコータである。アメリカの零戦だったかの名前らしい。小さいのにやたら元気のあるこいつには相応しい名前かもしれないと思った。

俺はジークの頭を撫でる。わんこと少女がいるだけでこんなにも和む。俺のささくれだった心がほわ〜っと、癒されていくのを感じられた。ありすは、撫でられているジークを見ながら、なんだかう

ずづずしている。

「ありすも撫でてほしいのか？」

「……う、うん」

俺は上目づかいに首を振ったありすの頭をゆっくりと撫でる。ありすの髪はサラサラしていて手触りが良い。

「えへへ〜」

ありすは俺に撫でられて嬉しそうだ。犬と少女を撫でながら、和やかムードに入っている俺たちを見ながら、ケンジさんが穏やかな顔で俺たちを見ている。

「……俺って子供に好かれるようなタイプじゃねーはずなんだが」

見た目優しそうなコータとか静香姉えならともかく、俺は不良っぽいから普通は怖がるはずなんだが……不思議なことにありすは全然怖がっている感じがしない。

「京もお兄ちゃんはこわくないよ。だってありすたちのことを助けてくれたもん」

無邪気に懐いてくるありすを見て、昔に亡くしてしまった妹のとが頭をよぎった。昔はよくこうして撫でてやってたな。

「お兄ちゃん……どこか痛いのか？」

「え？」

「泣いてるよ」

自分の頬に触れてみると、濡れた感触が指先にあつた。涙が伝つた跡が残っている。ありすは心配そうな顔で俺を見上げている。

やれやれ、なにをやつてんだ俺は。高校生にもなつて昔を思い出して泣くとか……色々あつたせいで気が緩んでるかな。俺はすぐに笑顔を作つてありすを安心させる。

「大丈夫。ちよつと目にゴミが入つただけだ」

「よかつたー」

「わん」

もう少ししたら、俺たちは川を越えるためにマンションを去ることになる。おそらくは、ありすたちとも別れることになるだろう。

まあ、それまでは……もう少しくらいこの穏やかな時間を楽しませてくれ。

それから数時間後。太陽が昇つた頃に俺たちはハンヴィーに武器や食料などの必要な荷物を積み込んで、川向こうへ渡る為の準備を整えた。ケンジさん達は残ると思つていたが、一緒についてくると言いだした。

「いいんですか……危険ですよ？」

「ずっと部屋に立てこもつている訳にもいかない。それなら信用できる君たちと行動したほうが、よほど安全だよ」

「うん、お兄ちゃんたちと一緒に！」

こう言われてしまつては、小室も連れて行くしかない。俺たちは新たな仲間を加えてマンションをあとにした。

さて、川向こうに行くための方法だが、主だった橋は警察によって嚴重に封鎖されている。しかし、川の全てが警察によって渡れないよつになつていふというワケではない。俺たちはハンヴィーでとかく御別川の上流を目指した。護岸工事がされていない川の上流

は水深も浅く、流れの遅いところならハンヴィーでも十分に通れるだろうと考えたからだ。ちなみに発案者はお嬢である。

予想は的中した。現在、ハンヴィーはゆっくりと川の中を走行している。さすが装甲車、半分くらい水につかっても問題なく進んでいる。ちなみに、まだ着替えのいくらかは乾いてなかったため、棒を立てて風に晒して乾燥させているところだ。

偵察として、ハンヴィーの天井に座っているのは俺、コータ、お嬢、ありすだった。背中あわせに周りを見ている。他の仲間は車内にいる。ありすはコータの膝の上で楽しそうに歌っていた。抜けるような青空の下で、ありすの無邪気な歌声が響く。

「……らんらんらん、川くーだりー」

「へえ、歌が上手いんだな、ありすは」

ありすはコータの膝に座って楽しそうにしている。歌をほめてやると嬉しそうに笑った。

「えへへ……ありすえいごでうたえるよ」

「すごいねえ、歌ってみてよ」

「うん！ Row row」

子供ながら流暢な英語で紡がれた歌詞は、よどみなく耳に入ってくる。実に綺麗な歌声で、癒されて思わず顔に笑みがこぼれる。周囲を双眼鏡で警戒しているお嬢を横目で見ると、どこか機嫌が良さそうだった。

「じゃ、今度は変え歌だ」

「うん！」

「shoot shoot」

コータが歌い出す。いや、発音とかはいいんだが問題なのは歌詞の内容だった。銃をぶっ放して、全部ぶっ殺す的な。ただのトリガーハッピーじゃねえかよ。英語とはいえ、さすがのバカな俺でも単語で物騒なのは伝わってきたぞ。あ、お嬢のやつ拳をわなわなと震わせてやがる。さっきまでの穏やかな表情が嘘のようだ。

「コータちゃんすごいー」

「いや……確かにすげえんだが。ありす、これは覚えなくていいからな」

内容を理解してないのか、ありすは純粹にコータを褒めている。ものすごいドヤ顔をしているコータに切れたお嬢がバン、とハンヴィーの硬い天井をぶっ叩いた。

「そこのデブオタ！ 子供にろくでもない変え歌を教えるんじゃない！ 分かってんの、元はマザー・グースなのよ！？」

「は、はい」

「あつはははは」

お嬢の怒りに恐れをなしたコータは素直に大人しくなった。俺とありすがそれを見て笑う。そうこうしているうちに、向こう岸が近づいてきた。

「みんな、そろそろ川を渡り終えるわよ」

川を渡り終えたハンヴィーが、ゆっくりと河原の砂利道へ戻る。すぐさま俺は木刀を手にハンヴィーから飛び降りて、周囲を見回すが 奴ら も人間もいない。とりあえずの安全を確保した俺たちが行った行動は、着替えだった。いい加減服も乾いたし、何より明るいうちからあの痴女みたいな格好じゃ戦えないだろう、常識的に考

えて。

「お友達の服、持ってきたから好きなの選んでいいわよ」

静香姉えはこういう時は用意周到だった。ハンヴィーを挟んだ向こうで女子連中が楽しそうに着替えを始める。男4人とわんこ1匹は女子の着替えが終わるのを大人しく待っている。男は着替えがないので服はそのままだ。コートだけは、南さんの家にあったカーキ色のベストを学ランの上から着用している。学ランやシャツは一応洗ったのでそれで十分だ。

「わん！」

「ジークはいつも元気だな」

ジークは短いしっぽを振っている。会ったばかりだというのに、ありすもこいつもずいぶんと人懐っこいやツみたいだな。

「さて、じゃあ武器を配るよ。京也には渡してあるから、小室とケンジさんのぶん」

コータが銃を手渡す。小室にはショットガンを、ケンジさんにはライフルをそれぞれ渡した。小室とケンジさんは初めて持った本物の銃の重さと感触に緊張しているようだった。

「まさか、本物の銃を持つ日が来るとは思わなかったね」

「俺もです」

「まあ、おいおい慣れていくしかないだろ」

俺の使うデザートイーグルのマガジンはポケットに入れてある。コータはそれぞれの銃の扱い方を即席でレクチャーしていた。あり

すのそばにいてもらうケンジさんはともかく、前衛の小室にはしっかり覚えてもらわないとな。ショットガンなら棍棒の代わりにならないこともないだろうが、あくまでそれは最終手段だ。あとは実戦で覚えるしかない。

「おにいちゃん！」

「おう、あります。みんなの着替えは終わった」

俺たちが振り返って目に入った光景は、なかなか壮観だった。

宮本は上下ともに制服のままだが、関節の部分に黒いプロテクターを付け、腰にホルスターを巻いている。ライフルを吊るすためのベルトが、身体に食い込んでるので、逆に胸を強調しているように見えなくもない。

冴子さんは上だけ制服のまま、黒いタイトなミニスカートを履いていた。スカートには深いスリットが刻まれていて、白いふとももと黒いガーターストッキングとのコントラストが目眩しい。そういえば前はロングスカートだったからすごく新鮮に感じる。足を露出しているのが恥ずかしいのか、頬を染めているのも個人的には高ポイントである。

お嬢は白いジャケットを着ている。何故かは知らんが胸の部分だけ開いているので黒いタンクトップが見えて、それがアクセントになっている。やっぱりでかい……下は制服のミニスカートである。

静香姉は白いシャツを羽織っていた。ブラをしているのかと心配しそうなくらい谷間が見えている。お気に入りだったスカートは破れていたので履き替えたのだろう。今はオレンジ色を基調とした短めのスカートをはいている。

それぞれが個性的な格好だったが、まあ似合っていると思う。動きやすいのはいいことだ。

「なかなか似合ってるぞ」

「わん！」

「いや、確かに似合ってるけど……銃なんて麗は撃てるのか？」

「平野君に教えてもらうし、いざとなったら槍代わりに使うわ」

「あ、使える使えます！ それ軍用の銃剣ついてるし！」

宮本の下げていた長いライフル銃に、コータが嬉しそうに銃剣を取りつけながら使い方を教えている。ありすがととととこっちに駆け寄ってくる。

「わあ、パパも持つてるんだ！ かつこいいい！」

「本来なら……大人が前に出るべきなのかもしれないが……」

「心配しないでください。俺たちが前衛をやりますから」

適材適所で人材を配置するのがいいだろう。前衛は俺や冴子さんがいるし、小室もいる。できるならお嬢やありすみみたいな、非戦闘タイプには武器を持たせずにすむようにしたい。

「さあ、ハンヴィー上げるわよ。男子、安全確保！」

『了解！』

お嬢の号令で俺たち3人は、河原から堤防を上り道路へと出る。互いの背中をカバーしながら周囲を確認するが、奴らはおろか、人間の姿さえ見えなかった。完全なクリアである。上は大丈夫だと小室が河原のほうに合図を送る。

静香姉えがハンヴィーのエンジンをふかし、一気に堤防を駆け上がり道路へ着地する。普通の車と勝手が違うにも関わらず、静香姉えの運転は上手かった。まるで映画のスタントのようである。

奴ら がいなのは、もしかすると川で阻止できたからかもしれないと少しだけ淡い期待を抱いたが、遠くに血のついた車や死体が見える。川は渡れなくても、奴ら はいるようだ。

「……やっぱこっちにも 奴ら がいるっばいな」
「世界中で同じ状況らしい……という話だからね」
「でも、警察が残っていたらきつと……」

宮本はよほど父親を信頼しているんだろうな。こんな絶望的な状況でも希望を捨てていない。

「……そうね。日本のお巡りさんは仕事熱心だから」

宮本の言葉に、お嬢はどう返答するべきか少しだけ考えたようだったが、宮本の気持ちを汲み取ってたのか同意した。

「……だな。武器もあるし、結束してればそう簡単にやられてねえだろ」

「うん！」

宮本の表情が明るくなる。甘い期待だと切って捨てるのは簡単だ。でも、悪いほうにばかり考えても状況がよくなるわけじゃない。だったら俺は、現実を踏まえて前を見よう。もしも仲間が落ち込んだり、転んだら引き上げてやればいい。

「これからどうするの？」

「高城は東坂の2丁目だったよな？」

「そうよ」

小室は次の行き先として、ここから近いらしいお嬢の家を候補に挙げた。東坂の2丁目だったらまっすぐ行ければ昼前には到着するだろう。そこで頭に思い浮かんだのは、最悪の可能性。もし、お嬢の両親が亡くなっていたら……きっと悲しむだろう。

「……あー、お嬢、あのよ」

ちくしょう……肝心な時に言葉が出てこない。お嬢は寂しそうな表情で言う。

「あんたらしくないわよ、言い淀むなんて。わかってるわ……期待はしてない」

お嬢はちゃんと理解している。この状況において両親が生き残っているということが、どれほど絶望的な望みであるか。

「うまく言えねえけど……希望は捨てんなよ。子供が親に生きていてほしいって思うのは当たり前だし、悪いことじゃない」

なくしてしまった俺は、それすらできないから。だからこそ、お嬢やみんなには希望を持っていてほしいのだと思う。

「……ありがとう」

それでも、どれほど甘い考えだとしても、できることなら……お嬢の両親が無事であることを願う。お嬢だけではない。みんなの家族も生きていてほしい。

再びハンヴィーに乗った俺たちは、お嬢の家に向かって出発した。俺と小室に宮本の3人がハンヴィーの上で見張りをすることにして、他はみんな車内にいる。ハンヴィーはすいすいと道路を走りながら川沿いの道から住宅街のほうへと抜けていく。今日は日が昇ってかrazuと 奴ら を見ていない。桜の舞い散るなか、優しい春の風が肌に心地良い。 奴ら のいないドライブは快適そのものだった。宮本も小室に寄り添って機嫌が良さそうだった。

「やれやれ、お熱いねえ。こりゃ、お邪魔だったかな」

「か、からかうなよ上坂」

「そ、そうよ……」

小室も宮本も顔を真っ赤にしている。初々しくていいもんだな、友人として仲の良い2人を見るのは素直に嬉しい。

「それはともかく……上坂、気づいてるか？」

「ん……静かすぎる、だろ」

空を見ながら、俺たちは気づいていた。昨日はあれだけたくさん飛び交っていたヘリや旅客機の姿が、全く見えないのである。やれやれ……このまま何事もなくお嬢の家まで着いてくれれば御の字なだけでな。少しの不安を乗せて、ハンヴィーは進んでいく。

東坂2丁目の付近は、閑静な住宅街だった。つまり人はいるからそれなりに 奴ら がいてもおかしくはない。とはいえ、行くところほとんどに大量の 奴ら がいるのはどう考えてもおかしい。

「どんどん増えてる……?!」

ハンヴィーの行く手には大量の 奴ら がいる。お嬢が車内で指示を飛ばして、別ルートから進もうとするが、そこにも 奴ら が群れをなしているのだ。東坂2丁目に近づくにつれてどんどん 奴ら の数が増えているようだった。右折左折を繰り返しながらハンヴィーは走り続ける。

そのうちに、大きな通りに出た。周りより低い位置に道がある綺麗に舗装された道の両脇は、コンクリートの壁がそびえていた。道は 奴ら で溢れているが、さすがにこれ以上曲がっていても目的地にたどり着けない。ハンヴィーが突っ切っていく。俺たちは落下

しないように、ハンヴィーの天井にはりつくように身を屈めていた。まるで何かによって人為的に流れがせき止められているような違和感を感じていた。橋が封鎖されていた状況にどことなく似ている気がする。

「ん……？ 向こうになんか見えないか？」

「あれって……もしかして……」

奴らの後ろに見える道路の途中で、キラリと光っているものを見た気がした。正体に気付いた宮本が大声で叫ぶ。

「だ、だめっ、停めてええ！」

太い銀色のワイヤーが道をふさぐように張られている。あんなものにぶつかったらいくらハンヴィーでもヤバイ。

キキイッ！

ワイヤーにぶつかるギリギリで車体が横に向いた。ワイヤーと車に挟まれた 奴ら がワイヤーで細切れになっている。

ハンヴィーは停まるうとするが、滑っているようでスピードが止まらない。道路脇の壁に突っ込む寸前でようやく急ブレーキがかかる。その瞬間、車体が大きく揺れてしまった。

振り落とされた宮本が車から落ちてしまう。小室がすぐに手を伸ばすが……届かなかった。宮本はボンネットにぶつかりながら道路へと叩きつけられた。

「あ……ぐっ……！」

「麗ッ！」

宮本が苦しそうにうめく。かなり強く背中を打つたらしく、動ける様子じゃない。

「……スライドを引いて、頭のあたりを狙って……撃つ！」

バスンツ！

小室がショットガンを構えながら宮本の前に群がろうとしていた奴らを撃った……が、倒せたのは1人だけだ。狙いが明らかにブレている。コータがハンヴィーの上からアドバイスすることで、まともに撃てるようになった。飛び散る弾丸が 奴ら の数を減らす。銃声を聞きつけて後ろからもどンドン 奴ら が増えている。

「弾切れかよ……！」

小室がショットガンにリロードしようとしてポケットから弾をこぼしてしまう。奴らは目の前だ。俺は腰の大型拳銃を抜きながらハンヴィーから飛び降りた。小室に近かった 奴ら の心臓あたりに狙いを定め、引鉄を引く。

ドオン！

胸を穿たれた 奴ら が後続を巻き込みながら吹っ飛んでいく。十分にすぎる威力だった。肩にもすごい反動がくるものの、撃てないほどじゃない。上等だ……だがやはり数が多い。すぐに弾丸がなくなってしまうだろう。機関銃かロケットランチャーでも欲しいところだった。小室の前に割り込んで木刀を一閃して 奴ら を薙ぎ払う。冴子さんがハンヴィーから飛び出して加勢する。

「小室君、私たちが支える！ その間に宮本君を……」

「ダメだ！ 木刀でやるには 奴ら の数が多すぎる！」
「んなもん……関係ねえッ！」

気合とともに木刀で殴りつけて 奴ら を倒す。冴子さんが左、俺が右だ。数が多かるうがやるしかない。

「コータっ、援護は任せた！」

「了解！ ケンジさんは近くの奴に狙いを絞って！」

銃声とうめき声が交差する。コータはハンヴィーの上からケンジさんと 奴ら を狙い撃っている。ハンヴィーはエンストを起こしたのかまるで動く様子がない。

急に車内からお嬢が飛び出してきて、小室のショットガンを拾いに走った。俺はお嬢の近くにいた 奴ら を木刀で殴り飛ばした。潰した 奴ら の脳漿がお嬢に降りかかる。

「きやあっ！？」

「なにやってんだ、バカ野郎！ 危ねえから下がってる！」

「あたしは臆病者じゃない……だから、アタシも戦っ！」

お嬢の顔は真剣そのものだった。お嬢は足下にばら撒かれたショットガンの弾を拾って装填し、 奴ら に向かって放つ。

「お嬢……」

「これからは……名前で呼びなさいよ」

覚悟を決めた人間を説得する方法を俺は持っていない。お嬢がリードする間に俺が切り込んで戦う。銃と木刀、即席のコンビで前線を支える。

「死ぬもんですか、誰も死なせるもんですか！ アタシの家はすぐそこなのよ！」

「ああ、その通りだ！ 誰も死なせねえ！」

そこから先はただひたすらに戦っていた。無限に湧いてくるのではないかと錯覚しそうだ。 奴ら をなぎ倒しながら俺たちは戦い続けた。空の色は変わり……いつしか夕方になっていた。

「ぐ……はあ……はあ……クソ、まだいやがる……のか」

全身が 奴ら の脳みその汁や返り血で濡れていた。ハンヴィーはいまだにエンジンがかからない。あまりに酷使したせいで、振っていた木刀は折れかかっている。お嬢のショットガンもさっきついに弾が切れて棍棒代わりに使おうとしている。

カチン！

「……こつちも弾切れだ」

宮本の銃を使って戦っていた小室も弾がなくなった。まだみんな生きてはいるが、このままでは全滅するのは時間の問題だった。

どうすれば全員を助けられる？ 頭によぎるのは全滅の光景。悪夢のようなそれを殴り飛ばしながら俺は思考する。せめて昨日の夜くらい身体が動けば……そう思わずにはいらなかった。

『なあにいい子ちゃんぶって戦ってんだよ？ 本当は殺すのが楽しくて仕方ないくせに』

心は嘔く。命をかけてギリギリで戦っているせいで、普段は奥に眠っている感覚が表に出るようになってきたせいだろうか。

絶望的な状況のなかで、限界を迎えたはずの身体は、まだやれると言いたげに熱く滾ったままだ。血が沸騰したように、火照りが収まらない。

『仲間のため……なにいつてんだお前は、ただ暴れたいだけだろうが。理性を捨てるよ』

夜の俺を思い出せ。いまはただ、殺すためだけの狂気があればいい。力だ……力がほしい。人格理性感情優しさ情け……そんなものは全て邪魔だ。殺し合いには必要無い。本能に流されるまま、俺は木刀を捨てて、拳を握った。

「ウ……おおおオオツッ!!」

吼えると同時に俺は 奴ら の顔を殴り飛ばした。ミシリ、と拳が鈍い音を立てる。あまりに強い力で殴ったせいで、拳が軋んでいる。下手をすれば骨にヒビくらい入っているかもしれないが、痛みすら構うことはなく、俺は近くの 奴ら を蹴り飛ばす。後頭部に直撃したハイキックで 奴ら が地面に沈む。

奴ら の頭を掴み、力を込めるとグシャリと音を立ててあっけなく潰れた。まるで腐った果実のようだ。倒れた 奴ら の身体を引きちぎり、投げ飛ばし、時には腕や足を武器のように振り回した。すぐに使いものにならなくなるが関係ない。殺せば殺しただけ 奴ら の身体が増えるのだから。

「ひやははははははー!」

獣のように、理性もなくただ殺すことだけを繰り返す。 奴ら がいなくなるまで……何度も何度も。そのうちに 奴ら は少しずつ減ってきた。心なしか、俺を避けているようにさえ見える。化物

のくせに逃げるのか、根性のない 奴ら だ。

「……………う、あ？」

気がつけば、近くにいた 奴ら は殺し尽くした後で、俺の周りは血の海だった。

「全員すぐに伏せなさ……………こ、これは……………」

突然の声に振り返ると、フルフェイスのヘルメットや耐火服のよ
うなものに身を包んだ多数の人間たちが集まっていた。背中にある
ボンベのようなものからホースが伸びている。まるで消防士の集団
だった。そいつらは俺がやった 奴ら の山を見て驚いて言葉もな
いようだった。

奴ら を全部殺し終わっちまった……………どうしよう。ああ……………目
の前にまだいるじゃねえか。こんな死体どもより、よりよほど歯応
えのありそうな連中が。あいつらは顔が見えない。敵なのか……………こ
っちに向かつて銃みたいなもの構えている。なら……………敵だな。

「テキは、ころ……………さねえと」

俺は熱を帯びた身体を引きずるようにワイヤーのほうに向かって
行こうとする。お嬢が飛びこんできた。

「上坂、もういいっ、もういいの！ もう戦わなくていい！ 助か
ったのよ！」

お嬢は俺の身体にしがみつくようにして……………必死に何か言ってい
る。泣いてるのか？

「オレ……は」

両手を見る。ペンキに手を突っ込んだようにドロドロで、真っ赤だった。拳など骨が見えそうなほどに傷ついていた。あまりに強い力で暴れすぎたせいだろう。お嬢の声でようやく俺は我に返った。

そして理性が戻り、自分のやったことに恐怖する。

まわりにはおびただしい死体の山。動いている 奴ら はいない。ここを血の海にしたのは誰だ？

笑いながら 奴ら を引き裂き、潰して殺す。まるで化物じゃないか。

みんなが、俺のほうを見ていた。その瞳に浮かんでいるのは……明らかに恐怖である。『人でないもの』を見るような目だった。

「あ……アアアアあああああああああああ！」

俺は叫び声を上げて、お嬢を振り払う。

「上坂っ!？」

みんなに背を向けてその場から逃げ出した。仲間に化物を見るような視線で見られていることに……耐えられなかった。

俺は……こうして1人になってしまったのだった。

第9話「暴走」(後書き)

さて……今回はっちゃけすぎたかもしれませんが……。
お気に入り登録や感想ありがとうございます。とても良い活力に
なっております。

作品を読んで頂き感謝致します。それでは。

第10話「反逆するという意志」

奴らの徘徊する街を走り続ける。息が切れそうになっても足を止めずに走り続けた。行く当てなどなかったが、とにかく今は誰もいないところに行きたい。逃げて逃げて逃げて……逃げ続けた先になにかあるのか。そんなことを考えている余裕など今の俺には存在しなかった。

自分自身が怖くてたまらない。奴らを殺すことを楽しむ殺人鬼のような自分がどうしようもない程に恐ろしい。もう1人の俺がいて、まるで殺せと命令されているようだった。

戦うのは楽しいよなあ。奴らならば殺しても文句ひとつでない。むしろ感謝さえされるんだぜ。

そうじゃない……俺は仲間を守りたいから戦っていたんだ。

自分自身に言い訳をしながら、俺は一体どうなってしまったのかと問いかけても答えは返って来ない。答えを返してくれるだろう仲間はいない。

俺は人間なのか？ 自分のことなのに、分からないことがこれほどまでに恐怖を感じるものだと俺は知った。

お嬢たちから逃げるように走り続けた俺は、日の落ち始めた世界で住宅街の中をさまよっていた。がむしやらに走ったせいでどこをどう走ったのかさえ覚えていない。

戦いに疲れきった身体は熱く鉛のように重いのに対して、心は冷水に突っ込んだかのように冷え切っていた。

ふと、道の脇に停まっていた車の窓に映っていたものを見る。窓に映った自分の姿を見て……俺は目を疑った。まるで頭から赤いワインでも被ったかのように全身が真っ赤だったのである。

「これが、俺……？」

全身が 奴ら の血や体液で汚れてはいるが髪の毛まで全てが染まった、というワケでもないだろう。黒かったはずの髪は根元から明らかに変わっている。家族を殺したあの女と同じ燃える炎のように赤い髪だ。血のような深紅の瞳の俺が、間抜け面を晒して窓に映った自分を見ている。姿が変わった上にボロボロだった両手の拳が再生したかのように治りかけている。

「…… 八八八、まるでマンガだな」

笑っしかない。見た目こそ、まだかろうじて人間だと言えなくもない。それでも俺の存在そのものが怪物と同じようなものだった。そうでなければ説明がつかない。思えば、今までも不明な部分はいくつもあった。極限の状況に置かれて精神がイカれた…… そのほうがよほど救いがあっただろう。

俺の中にある衝動的な殺意は『人間』を殺すことにさえ躊躇いがない。なくなっている。力の代償にしても大き過ぎるものだった。

ドガアッ！

苛立ち紛れに車のドアを殴りつけると、鈍い痛みと共にドアが思い切り拳の形に歪んだ。拳の先から伝わってくる痛みはこれが紛れもない現実であることの証明だった。ふらふらとした足取りで俺は街をさまよう。熱に侵された頭で思考する。

小室たちは、あとから来た連中が救助してくれたはずだ。周りの奴ら はどうにかしたから大丈夫だろう。逃げる時にお嬢を突き飛ばしたことを思い出して…… 胸が痛んだ。

「…… 謝りてえな…… でも」

怖いのだ。俺の持つ衝動が、いつか仲間たちすら殺してしまうんじゃないかと。そう考えるだけで背筋が凍りつく。

俺は、どうすればいい？ 考えても結局答えは見つからないまま……疲れ果てた俺は誰もいない適当な家を見つけて倒れるように眠りについたのだった。

一人で迎えた朝の目覚めは最悪だった。話せる相手もおらず、俺は泊まった家を出た。空にある太陽は高いから昼くらいだろうか。ずいぶん長い間寝ていたようだ。

ドオン、ドドドド……！！

歩きながら俺は、住宅街には似つかわしくない物騒な音を聞いた。遠くから断続的に銃声が轟いている。

「……………行ってみるか」

どうせ俺に行くあてなどないのだから……それに、戦っている間は全てを忘れられる。俺は戦いの匂いに引き寄せられるかのように銃声のほうへと向かっていくのだった。

戦場になっていたのは、住宅街の中でもかなり広めの道だった。集合住宅の間に作られた道は深く掘り下げられたような形になっており、両脇の壁がコンクリートで造られている。堀のようになっている間を道路が通っているのだった。俺は上から道を見下ろしている。

戦っていたのは、軍隊で使われるような形の黒い服を着た男たちだった。大きなトレーラーを守るように多数の人間が戦っている。近くにある黒塗りの車はいかにもカタギの人間が乗るものではない。黒い服の肩には日の丸や『憂国一心会』と縫われたロゴが入っている。

「ヤクザ……じゃないな。右翼か？」

黒い服の男たちは、刀を持っており、拳銃やマシンガンなどを持っている者もいる。戦っている相手はたったの1人で、それも完全な丸腰だったが、それでも異様な光景だった。

2メートルを越える巨体。初めてみるタイプの 奴ら だった。姿形こそ体格のいい人間といった感じだが、全身が赤く覆われており、腕は丸太のように太い。銃弾の雨を胴体に浴びながらもわずかに体に傷を負うばかりでびくともしない。黒い服の男たちを殺そうと前進を続ける。

「なんなんだ……この怪物は！」

「とにかく撃て！」

黒い服の男たちは奮戦しているようだが、初めて見るであろうイレギュラーに困惑しているようだった。見た目、耐久力ともに怪物だからな。

「こ、こんなの勝てるワケが……」

「男が弱音を吐くなッ！」

一際威圧感のある、やたらと眼光の鋭い男が弱腰だった部下に喝を飛ばす。どうやら連中のリーダーらしい。黒い詰襟の服に身を包んだ男の纏う雰囲気は尋常なものではなかった。遠くにいるのに軽く威圧感を受けてしまうほどである。腰のベルトに帯刀しており、陣頭で指揮を執っている。ロケットランチャーでもあれば倒せるだろうが……圧倒的に火力が足りないのは事実だった。

あのデカい 奴ら ……とりあえずDと呼ぼう。アイツは規格外の存在だ。

「うおおおおお！」

黒服の1人が埒が明かないと判断したのか、銃ではなく刀を抜いて斬りかかるが、Dの筋肉の前に阻まれ浅く表面を切った程度で終わる。男が絶望したところを、殴りかかったDの拳が顔面をぶち抜いて、首ごと吹き飛ばされた。主を失った刀が地面に落ちて乾いた音を反響させる。

「化物め……！」

強いな……今までもイレギュラーな 奴ら と戦ってきたが、間違いなくDは強い。血が騒ぎ、心臓の鼓動が跳ね上がる。

だからこそ、殺しがいがある。

俺は両脇にあった道路へと下る階段を降りながら、戦場へと近付いていく。いちいち階段を使うのが面倒に感じた俺は、途中で手すりを越えて一気に地面に飛び降りた。落下地点は……デカブツの頭だ。落下する重力に任せ、俺は飛び蹴りを放つ。

俺の全体重を乗せた蹴りは見事にDの頭を捉えるが、少しバランスを崩した程度だった。そのまま転がるように着地して、近くに落ちていた刀を拾う。

こいつ相手に素手は無理だ、殺しきれない気がしない。首を飛ばされた男が持っていた刀を使わせてもらう。

「な、なんだあの子供は!？」

黒服の男たちは、突然乱入してきた俺に驚いている。銃弾の雨が止まっているうちに、俺はDとの距離を詰めて突撃する。刀を振り

力の限り右脚に向かって刀で斬りつけた。深く斬りつけた脚から大量の血が噴き出す。

重いはずの真剣を小枝のように振ることができ……やはり腕力が相当に上がっているようだ。

「……アアアアッ！」

さすがにまともなダメージが入ったようだ。俺を敵だと認識したらしく、真っ赤に染まった目でこちらを睨みつける。足を止めたDの反撃に振り回された腕を全力で回避する。腕がわずかに頬を掠ったのか、血がにじみ出す。まともに喰らったらヤバいだろう。

Dの拳が俺に向かって勢いよく突き出される。まるで戦車の砲だった。当たれば先程の男のように潰されるだろう。一瞬の後に迫ってくる死に対して、俺はギリギリまで見極めてから身を屈め、刀を跳ね上げて腕を斬りつけた。体を切られたDが吼える。

「グオオオオオオ！」

「いきなり現れたかと思ったら……あの怪物とまともに戦ってやがる」

後ろから聞こえる黒服たちの声を聞きながら、俺は戦い続ける。

さんざん切り刻んだが、倒れる様子は見えない。俺は後ろに大きく飛んで一旦距離をとった。

Dの腕の筋肉がさらに大きく盛り上がり、近くに乗り捨ててあった乗用車を持ち上げた。そのまま車を砲弾のように投げってくる。

あんなものに当たったらさすがに死ぬ……避けるしかない。後ろには黒服もいるが、他にも車がある。引火したら大惨事確定だ。俺は腰の大型拳銃を抜き、投げられた車に向かって銃弾を撃ち込む。

車は派手な音を立てながら爆発し、燃えたパーツを周囲に飛び散らせた。Dの体にも燃えたパーツがぶつかっている。チャンスだと

感じた俺は銃を戻しながら弾丸の如く走り、Dのもとへ飛び込む。
一気に距離を詰め、渾身の力で切り下ろした。

Dの体を鋭い刃が切り裂いていく……だが、肩口から切り込んだ
刀が途中で根元から折れてしまった。

「なッ……！？」

確かに刀は人を切る為に作られた武器だ。だが……それは人間や
普通の生き物に対してだ。『怪物』を斬るなんてことは想定されて
いない。武器を失った俺の隙について、Dの拳が俺の腹を捉える。
内臓を全部吐き出しそうになる衝撃が体を貫く。

「ぐべはッ……！？」

腹を殴られた衝撃はあまりにも強く、俺は地面をボールのように
転がっていく。勢いが止まったあとも、体が痺れてすぐには動けな
かった。

「じぼっ……ゴホッ……！」

咳き込む口からは血を吐き出す。そうしている間にもDは足音を
響かせながら俺を殺そうと迫ってくる。早く立て……じゃないと殺
される。吹き飛ばされた時に離れたのか、目の前には大型拳銃が落
ちていた。

「あ……あ……」

いいじゃないか、このまま寝ていれば、アイツがきっちり殺し
てくれるぞ。

諦めてしまえ、と声は囁く。化物に生きている資格はないと。それでも俺は……震える手で必死に拳銃を掴もうとする。

こんな体になっても、まだ生きたいのか？ 見苦しいなあ、おい。

うるさい。そんなことはわかってる。

化物が人間とられるワケないのによ。

ああ、そうかもしれない。それでも、俺は仲間といたいんだよ……お嬢に謝りたい。

だから、こんなところでは死んでやれない。死んでやるワケにはいかない。

お前が……俺が仲間を殺そうとするなら、徹底的に抗ってやる！ てめえは俺だ。他の誰に負けたとしても……自分には絶対に負けられない。

目を見開き、手を必死に伸ばす。拳銃を掴んだ俺は、震える両脚を奮い立たせて、再びDと対峙する。Dが俺を殺そうと手を伸ばしてきた瞬間、俺は引き金を絞った。

頭に向かって発射する。いくらか外れるものの、何発かは頭をぶち抜いたはずだ。

「さすがに痛えだろ……？」

「ウオオオオオオ！？」

頭から血を流しながら、それでもDは倒れなかった。もう少しで倒せるはず……そう思ったのも束の間、弾丸がなくなった。

「クソツ……もう武器がねえ！」

「受け取れッ！」

後方から飛んでくる声に俺は振り返った。黒く長いモノが目の前に迫っていた。眼光の鋭いリーダーの男が、自分の得物を俺に投げつけて寄こしたのだった。刀を空中で受け取り、一気に鞘をから抜き放つ。

体を沈みこませるように、大きく前へ踏み込む。Dの懐に滑り込んだ俺は太い腕をくぐり抜け、刃を上立てたままDの顎を下から刀で貫いた。

生暖かい血が顔に降り注ぐ。Dは全身を震わせながら地面に倒れ、動きを止めたのだった。

「やつ……た……」

もはや完全に屍と化したDを見て、後ろの男たちが勝利に歓声を上げる。俺は全身を襲う倦怠感に包まれながら、突き刺さった刀を抜いて鞘に戻す。黒い服の男たちのほうへ歩いていく。周りの黒服たちは、警戒したように俺の挙動を見ている。俺にツカツカと近づいてきたのは、眼光の鋭い男だった。近くにいとよく分かる。降りかかるプレッシャーが並みではない。

「……助かりました。こいつはお返しします」

俺は恭しく鞘に戻した真剣を男に返す。男はうなづきながら刀を受け取った。

「うむ。よくやってくれた、勇敢な少年よ……君のおかげで部下の犠牲が少なく済んだ。礼を言わせてもらおう」

「ありがとうございます」

男は部下と共に物資を運んでいたのだが、途中で 奴らの群れに出くわし、そこへあのDが出現したらしい。これから車で拠点である家に戻るそうだ。

「そういえば少年、君の名前は？」

「上坂……上坂京也です」

「名乗るのが遅れたな……私は高城 壮一郎（たかぎ そういちろう）。憂国一心会会長だ」

高城、つて。これがお嬢の親父さんなのか。ああ……そういや右翼の会長だつて言つてたっけな。

どうやら俺は、とんでもない人物のところに来てしまったようだ。

「う……」

どうにか気合で立っていたが、それもいい加減限界だった。エネルギーが切れた俺は、ばたりと地面に倒れる。そのまま意識は闇に飲まれていった。

第10話「反逆するという意志」（後書き）

投稿遅れてすみません！

これからの展開をどうしようかさんざん迷いまくっていました。

感想を書いてくださった方、お気に入り登録してくれた方ありがとうございました。
うございます。

感想や意見などありましたら一言でも構いませんので、お気軽にど
うぞ。

最後に、読んでくださった方全員に感謝を。

第11話「名前を呼んで」

あいつを『お嬢』と呼び始めたのは、いつからだっただろう。名前の理由なんて雰囲気 그게それっぽいから、である。まったく、我ながら何というテキトー加減であろうか。

藤美学園きつての天才少女 高城 沙耶。

彼女は紛れもない天才だったが、頭が良すぎるが故に周りを遠ざけてしまっていた。家の評判によって周りはビビっていたのか、コートのようにイジメられることはなかった。クラスには幼なじみの小室がいたが、今みたいに積極的に話しかけてくるわけじゃなかったしな。

きっかけは、1人でいるあいつがただ気になったから……それだけだ。お嬢が可愛いから、という下心かとも考えたが、見た目だけなら可愛い子は他にもいたわけで。万年赤点ギリギリだったバカな俺が話しかける相手ではないだろう。それこそ、住む世界が違うてもんだ。

最初にあいつをその名前で呼んだ時、ずいぶんイヤな顔をされたのは何となく覚えている。なれなれしかったのが気に入らなかつたのか罵倒もされたが、それから俺はめげずに話しかけ続けた。少しずつ、少しずつ仲良くなっていたのである。

お嬢がツンツンした態度をとるのは、防衛本能的なものなのだろう。

話す内容そのものが変わっていたかと聞かれれば、そうじゃなかった。普通の友人どうしが話すような他愛のないもの。お嬢は俺をバカと呼びつつも、決して拒絶はしなかったのである。

お嬢は俺にとって仲の良いクラスメイトになった。小室とは積極的に話すことは少なかったお嬢だったが、それでもあいつのことが気になっているのは俺でも分かった。

応援してやるのも悪くない、それはそれで楽しそうだ。そんなこ

とを考えていた時期もあったな。お嬢をからかうと真っ赤になって否定するのが可愛くて面白かった。

まあ、今は無理だろうな。それを考えるだけで、胸が痛くなるから。

重い瞼を開けると、俺は知らない部屋でベッドに横たわっていた。散々暴れた後だというのに大した疲れすら感じられない。

いったい俺は、どれくらい眠っていたんだろうか。高城会長の前でぶっ倒れてからの記憶がない。

周りを見回してみる。部屋の中に置いてある調度品にはどれも気品があり、高級そうなのが伝わってきた。俺が寝ているベッドも2人くらいは余裕で寝られそうなほど広かった。

そういえば、服も身体も返り血でドロドロだったはずなのに今は綺麗な白いシャツを着ている。俺が寝ている間に、誰かが着替えさせてくれたのだろうか。

「あ、京也お兄ちゃん起きたよ！」

部屋には俺のよく見知った顔がいた。ありすは、眠りから覚めた俺を見て嬉しそうにはしゃいでいる。お嬢は傍らのイスに腰掛けたまま、目覚めた俺を見て硬直している。服装が変わっており、可愛い感じのする白いフリルのついた服に、黒いスカート姿だった。見た感じケガもなく元気そうである。仲間たちの無事な姿を見て俺は、ほっと胸を撫で下ろす。

「ありす、みんなを呼んでくるね！」

ありすは嬉しそうに部屋を飛び出して行った。俺の暴れる姿を見たのにありすの反応は以前と変わっていないように思えた。それは無邪気な子供だからなのか。

部屋は俺とお嬢の2人きりになってしまった。ぎこちない空気が漂っている。どう反応すればいいのか分からない俺は、沈黙を守ることしかできないままに時間だけが流れていく。

「……上坂」

静寂を破ったのは、俺の名前を呼ぶお嬢の声だった。お嬢に呼ばれることに、俺は妙な懐かしさを感じていた。離れていた時間はたったの1日だというのに、こんな気持ちになるとは思ってもみなかった。

メガネ越しに見えるお嬢の瞳は潤んでおり、今にも泣き出しそうな表情をしていた。それは俺にとって完全に予想外の反応である。「お嬢、泣かないでくれ」

言葉は考えるまでもなく、自然に口から飛び出していた。

「えっ？ あたし、泣いて……」

信じられない、といった風にお嬢は自分の頬に触れる。瞳から零れている涙に気づいて戸惑いながらも途切れ途切れに言葉を紡いでいく。

「だって、アンタここに運ばれてからずっと寝たままで……せつかく会えたのに」

ぎこちない言葉は、だからこそ感情が込められているのが分かる。俺の胸が温かい気持ちで満たされていくのを感じていた。

「アンタが悪いんだからっ、助けるだけ助けて勝手にいなくなるなんて、許さないから……」

「でもさ、お嬢。俺は普通の人間じゃないんだよ」

頭に渦を巻く異常としか表現しようのない獣じみた暴力的な衝動。人間離れた身体能力を有し、興奮すると血に染まったような髪と瞳に変化する俺はどう見たって人間というカテゴリーから外れてしまっている。

かろうじて外見だけは人間を保っているとはいえ、狂ったまま戻れなくなったら 奴ら のようになってしまっただろう。抗うと決めた今でも、恐怖で手が震えてしまう。

不意にお嬢の腕が伸びてきて、俺の後頭部に回される。

「え？」

柔らかな感触が俺の視界をふさぐ。俺はお嬢に優しく抱きしめられていた。顔に弾力のある魅惑の膨らみが当たっている。お嬢の行動があまりにも唐突すぎて頭が回らず、上手く反応できなかった。温かくて、良い匂いがする。

「アンタはアタシたちを命がけで助けてくれたわ。他の誰が何て言おうとアタシが保証してあげる。アンタは紛れもない人間だって」

お嬢は人間であるかどうかさえ怪しい俺に対して温かい言葉ををくれる。その言葉は、何よりも俺の心に響いた。

「いて……いいのかな、俺は」

「当たり前じゃない」

お嬢の胸の中で優しく抱きしめられながら、俺は守るという決意を新たにするのだった。

その後、ありすがみんなを呼んできた。宮本は白い服を着ており、

ケガが治りきっていないのか小室に肩を借りていた。

小室たちは話をどう切り出すか迷っているのか、微妙な沈黙が場を支配していた。俺は絨毯の上に両手をつき、声を張り上げた。

「……勝手に飛び出して、すまなかった！」

肉を焼き焦がすほど熱された鉄板の上ではないが、俺は謝罪の意を示す為に地面に擦りつけるほど深く頭を垂れていた。いわゆる土下座である。みんなは驚き、声もないようだった。

「ねえ、京也お兄ちゃん、なんで謝ってるの？ 悪いことしてないよ」

「え……？」

「京也お兄ちゃんは、みんなを助けてくれたんだよ。だから、何も悪くないの！」

そう言っておりすは、俺に笑顔を向けてくる。子供だからこそその純粹で無垢な信頼が嬉しかった。ジークもありすに続いてわんと鳴いた。場の空気が変わったのを、俺は確かに感じていた。俺を非難するような視線などなく、いつも通りのみんながそこにいた。

「そうだな……上坂。らしくないぜ。確かにあの時は驚いたけどさ、みんなお前のおかげで助かったんだ」

小室の言葉を聞いて、みんなが賛成するようにうなづいた。誰ひとりとして、例外はいなかった。

「まったく、急に何をするかと思えば……バカなんだから」

お嬢は呆れたように肩をすくめながらも微笑んでいた。

「そうだな、君は本当に大馬鹿者だ」

「上坂君らしいけどね」

「そうよね」

冴子さんの言葉に続く宮本と静香姉も、穏やかな笑みを浮かべている。

「まあ、京也がムチャクチャなのは今に始まったことじゃないしね」「私たちに君を批難する気なんてないよ」

コータとケンジさんも、明るい表情をしている。拍子抜けするほどにあっさりと受け入れられてしまって、俺は逆に戸惑ってしまっていた。

「でも俺はこの通り、人間かどうかも怪しい状態だぞ？」

「確かにかなり変わってはいるけど、上坂は上坂だ。奴らとは違う。今だって分かりあうことができてるじゃないか」

仲間に対しての絶対的な信頼があるから、怯える必要などない。小室はそう言ったが、実行するのは簡単なことじゃない。小室のそういうところは、素直にすごいと思う。

「だいたい、一人で悩んでないで少しはアタシたちを頼りなさいよ」

「仲間なのだから一蓮托生だよ」

「ああ、今度は僕たちが助ける番だ。今度暴走しそうになったら止めてやる」

まったく、みんなお人よしにもほどがあるだろ……悲しくもねえのに、涙が出てくるじゃないか。

「おう、頼むぜ！」

それから俺の状態に関して情報をまとめることになった。暴走時に髪と瞳が赤くなっていたことや、凶暴性が増すこと。爆発的な身体能力の増加などだ。体力も相当なものだったが、限界を超えるとブレイカーが落ちるようにつぶ倒れてしまう。現状で分かっているのはこんなところだった。

「上坂君の身体能力って、いまだれくらいなの？」

「とりあえず、素手で車をぶん殴ったらドアがぶっ壊れた」

「……アンタってホント人間離れしてるわよね」

お嬢を含め、みんなが呆れかえっているなかで、ありすだけはすごいと目を輝かせていた。

「まるでマンガみたいよねえ、はむ」

静香姉えがバナナを食べながらのんきな声で言うが、まったくもってその通りだ。現在は髪と瞳の色が元に戻っている。

「とにかく、どんなことにも何かしらの原因があるはず。なにか心当たりはない？」

「そう言われてもなあ、こういう体質だと知ったのは昨日今日だけ。何かあったとすれば、ガキの頃だろう。あの頃の記憶は妙に面白いのである。窓の外から人のざわめく音が聞こえてきた。」

「なにやら表が騒がしいようだ」

「パパが帰ってきたから何かやってるのかも」

俺たちは窓からベランダに移動する。ここもテーブルでお茶を楽しめそうなほどの広さがあった。屋敷の正面にある開けた場所には結構な人ばかりができていた。こんなにもたくさん生存者がいることを知って俺は驚いた。

その中央に置かれていた白い台の上に、1人の男が立っている。腰に日本刀を下げた眼光の鋭い男には見覚えがあった。お嬢の親父さんである高城会長である。周りはいかつい男ばかりだが、1人だけドレスを身に纏った女性が混じっている。

「あれがアタシのパパ。正邪の割合を自分で決めてきた男よ」

確かに目つきは鋭いし、雰囲気も只者じゃなかったのは間違いないが、自分の親に対して言うセリフじゃないような気がする。

「じゃあ、あのドレス人は……」

「アタシのママよ」

エンジンの音を立てながら、高城会長のところに走ってくる1台のフォークリフトがあった。運んでいるのは大きな金属のオリで、中に黒服を着た 奴ら が入っているのが見える。

「この男は土井哲太郎。四半世紀もの間共に活動してきた我が同志であり友だ！ 救出活動のなか部下を救おうとし、噛まれた！」

低く威厳に満ちた声が響かせながら、高城会長は鞘から日本刀を抜き放つ。オリを運んできたフォークリフトが台に横付けされた。オリの中にある 奴ら は、ただ理性もなくうめきながら鉄格子にぶつかっている。

「我が友に最後の友情を示す！」

部下の1人がオリのカギを開けた。いまやただ暴れるだけの存在となり果てた。奴らは、相手が誰かも分からずに高城会長に襲いかかる。飛び出してきた次の瞬間に、奴らは首を一太刀で落とされた。

俺には、大切な友人に介錯をしているように見えた。変わり果てた友人をせめて自分の手でケリをつける。だが、それを大衆の中で見せる意図はなんだろうか。集まっている生存者の多くはただの一般人である。人殺しなど見慣れているはずもないので、大抵の人間が顔を青くするのは当然の反応だった。

俺の仲間も少なからず動揺しているようで、お嬢は衝撃的な光景に目をつむっている。ありすはブランドの手すりが高かったおかげで見ずに済んだようだ。少なくとも、子供に見せるものじゃないな。

「さらばだ、友よ！」

友人と決別するように告げた高城会長は、首だけになってもうめいている。奴らの頭を踏み潰し、全員に向かって宣言する。

「これこそが我々の『いま』なのだ！」

奴らになつたものは無差別に人を襲う。そこには友人も家族も恋人であつても例外はない。だからこそ、倒さなければならぬのだ。残酷で、救いなどない。それがこの世界の現実だった。

「生き残りたくば、戦え！」

結局のところ、大切なものを失わない為には戦うしかない。こうして殺すところをわざわざ見せたのはそのことを伝える為、という

ワケか。

「刀じゃ効率が悪すぎる……」

「そうか？」

刀の耐久力を弾丸の数と同じように考えればそう変わりはないだろう。あとは向き不向きの問題だ。冴子さんに持たせれば相当だろうが、コータが持ってもあまり役には立たないという具合に。

「日本刀の刃は骨に当てたら欠けるし、3・4人も切ったら役立たずになるだろ！」

「そうとも言い切れないよ、平野君。技量のある人間が使えば継続的で十分な戦力となり得るのだ」

剣士として冴子さんの意見はもっともだが、コータは銃を否定されたように感じてしまったのかもしれない。俺の場合は力任せにやってる部分が多いからコータの言うようにすぐにダメになっちゃうだろう。今の状態じゃ加減を考えないとすぐに折れてしまう。素手で戦い続けるのはあまりにも負担が大きい。

確かに銃は強いが、近接武器と比べれば扱うことそのものは簡単だ。近接武器は折れたり、切れ味が落ちなければある程度は戦い続けることができる。今までの俺がそうだったように。

射抜くような視線を感じて、高城会長がベランダにいるお嬢を見ているのだ。

その後もコータは血脂などを指摘して冴子さんと論戦していたようだが、結局論破されてしまった。もうこの辺りでいいだろうと止めに入った俺の手をコータは勢いよく払いのける。

「邪魔するな！ 僕は……京也みたいには戦えないんだよ！」

怒りの込められたコータの目を見て何となくだが、分かってしまった。コータは銃がなくなってしまうことを恐れている。銃があるからこそ、戦うことができる。コータにとって銃は命を守る為だけの道具じゃない。自らの存在を確立させる大切なものだ。

「平野ッ！ アンタいい加減に……」

お嬢の制止も聞かずに、コータは大量の銃器を抱えて部屋から飛び出して行った。

「なんなんだ、あいつ」

小室はどうにもコータの気持ちがあつかっていないようだ。男なら誰かを守りたいと思うのは当然だろう。

「分からねーか、小室？ あいつも男だってことだよ」

「それは知ってるけど」

「あー、まったくこのにぶちゃんは……俺はコータを追っぞ」

「アンタは来たばっかだから、道が分からないでしょ。アタシも一緒に行くわ」

「おう、頼む」

早くコータを連れ戻さないと。あれだけ大量の銃を持ってウロウロしてるのを大人たちに見られると厄介なことになる。

俺たちはすぐにコータを追ったものの、屋敷はあまりにも広すぎてすぐには見つからなかった。

「多分、こっちに来たはずなんだけど……」

お嬢にナビを頼んで迷い込んだのは和の雰囲気が漂う庭園だった。

緑が豊かで大きな池もあり、錦鯉が悠然と泳いでいる。職人の手入れが行き渡っているのがよく分かった。そよぐ風が肌を優しく撫でていく。こんな状況じゃなければ落ちついて心を休めることができただろうな。

「それにしても、広い屋敷だよなあ。本当に『お嬢様』だったんだな」

「なによ、いまさら？ お嬢お嬢言ってたのはアンタでしょ」

「いや、お嬢ってのはあくまで雰囲気から付けた愛称だからな」

「……ねえ、上坂。聞いておきたいことがあるんだけど」

お嬢が口にしたのは、これからのことについてだった。

俺たちは今、大きなグループと合流した。ここには頼れる大人という存在がある。もし留まるなら、しばらくの間はこれまでのように子供でいることもできるだろう。正面切って 奴ら と戦う危険だって格段に減るはずだ。

「気楽でいいわよ？ 戦力はそれなりにいるんだから、アンタも無茶しなくても済むわ」

「確かに、な。小室はどうするって？」

「まだ聞いてないけど……多分アイツはここを出ていくでしょうね」

小室と宮本の家族はまだ街に取り残されている。2人はどれほど危険だと分かっているにも両親を助けに行く為に街へ戻るはずだ。あいつはそういうやつだからな。その場合、俺たちチームは分離してしまう。

「だから、アンタの意見を聞いておきたいの」

「俺は、小室たちを助けてやりたいと思ってる」

家族を助けにいくにしても、ある程度の戦力は必要だろう。1人や2人じゃ無理がある。

以前までメインで使っていた木刀は、度重なる酷使で限界を迎えており、いつ折れてもおかしくない状態だ。新しい武器をどこかで調達する必要があるな。武器さえ手に入れば、あいつらに力を貸してやれる。友人として、仲間として俺はできる限り手伝うつもりだった。

「でも、それは俺の勝手だ。お嬢まで巻き込むワケにやいかない」「なによそれ……ここに残れ、つてこと？」

「ああ、ここより安全な場所なんてそう多くはないだろ」

できることなら、一緒にいたい。最も近くでお嬢を守ってやれたらと思う。だが、それだって俺のわがままで。守ってくれる両親んががいるなら、それに任せるべきだ。常識的に考えればそうだろう。あれだけの修羅場をくぐり抜けてやっと家族に会えたんだ。それがこのぶつ壊れた世界でどれほどの幸運か。失くすにはあまりにも大きすぎる。

お嬢は俺の言葉を聞いて、烈火の如く怒りを露わにする。

「ふざけないで！ アタシが戦力にならないから？」

「そうじゃない、俺は……！」

言葉に詰まってしまう。頭の中に疑問がわき上がった。

俺はお嬢を『沙耶』をどう思っているんだ？

大切な仲間 確かにそうだ。けれど、今はそれだけじゃない気がする。俺は……。

「『沙耶』に、死んでほしくねえんだよッ！ でも仕方ないだろ、守ってくれる両親がいるなら俺はもう必要ねえんだ！ せっかく生

きて両親に会えたお前に……泣いてほしくない！」
「あつ……」

飾らずに俺の気持ちを吐き出した。沙耶の顔からみるみるうちに怒りが消え失せ、嬉しさで満たされていく。

「やっと、名前で呼んでくれた……」
「そうして欲しいって、言ってただろ」

暴走する少し前に、沙耶が微笑みながら言っていた。

「じゃ、じゃあたしもアタシもアタシのことを名前で呼ぶわ」
「お、おう。好きにしるよ」

沙耶は豊かに発育した胸に手を当てながら、大きく深呼吸をしている。おいおい、メチャクチャ気合入ってるじゃないか。

「き……京也」

耳まで真っ赤にしながら、俺の名前を呼ぶ沙耶。呼んだ後も俺の反応をうかがうように上目づかいでこっちを見ているのだ。あまりにも可愛くて、抱きしめたい衝動に駆られる。

ああ、ちくしょう。何で名前呼ばれるだけでこんなに顔が熱くなってるんだよ、ワケわかんねえぞ。悪いのは沙耶だ、こいつが可愛いからいけないんだ。

『なにを騒いでいる！』

互いに赤くなっている俺たちのところへ、遠くから男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「パパの声ね……行ってみましょ！」

俺と沙耶は急いで騒ぎの中心地へと向かった。

「どうあっても銃は渡さぬつもりか」

「ダメですっ、イヤです！」

庭の一角にある和風な離れの近くで、憂国一心会の黒服たちに囲まれていたコータは、その中心で高城会長と話し合いの真っ最中だった。高城会長のコータは地面に膝をついてガタガタ震えながらも決して銃は手放さない。実際に向き合った俺は知っている。高城会長と向かいあうプレッシャーは相当なものだ。この場から逃げ出していないだけ上出来である。

「銃がなくなったら、俺はまた元通りにされてしまう！ 自分にも出来ることがようやく見つかったのに！」

コータは涙声になりながらも、自分の意志をはっきり伝えようとしていた。顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだし、メガネもズリ落ちてしまっている。

「出来ることとは何だ？」

「そ、それは……」

「あなたのお嬢さんを守ることです！」

言葉に詰まったコータの元に、小室が割って入った。小室はコータをかばうように前に歩み出る。

「こ、小室」

「小室……なるほど。沙耶とは長い付き合いだったな」

「はい。ですが、地獄の始まりからずっとお嬢さんを守ってきたのは、平野と上坂の2人です」

「そいつの言う通りよ、パパ！」

俺と沙耶も小室に続いて、コータのそばに行く。

「京也に沙耶さんも……」

「君は……そうか、先刻の少年だな。目が覚めたようで何よりだ」

高城会長から感じる威圧感が前より強いような気がするのは気のせいだろうか。

「ここまで運んでくださったことを感謝します、高城会長」

「気にすることはない。先に助けられたのはこちらのほうだ」

それから続々と仲間たちが駆けつける。冴子さんにありすやジーク、ケンジさん、ケガをしている宮本も静香姉えに肩を貸してもらいながら現れる。ここに、小室チームが全員集合した。

「そうよ、このバカとでぶちゃんがいなかったら……アタシは今ごろ奴らの仲間だったわ」

沙耶は自分の父親と対峙しながら、凜とした声を庭じゅうに響かせる。

「こいつが、こいつらが守ってくれたの！　パパじゃなくてね！」

沙耶の言葉を聞いたコータは、さらに両目から涙を溢れさせる。

「……そうか」

高城会長の表情は変わらないが、降りかかっていた威圧感が和らぐのを俺は感じていた。会長のかたわらにいる沙耶の母親は、どこか嬉しそうな微笑みを浮かべていた。娘の成長を喜んでいるのだろうか。

わずかに緩んだ雰囲気の中で、黒服の男がやってきた。どうやら生存者が徒党を組んで、騒いでいるらしいという話だ。それを沙耶に説得してほしいと頼まれたのである。

「なんでアタシがそんなことを……」

「我が娘は語らねばならないほど愚か者ではない!」

「沙耶、私からもお願いするわ。パパや私だと、あの人たちは警戒しすぎてしまうもの」

特に断る理由もない。助けてもらった礼代わりになるか分からないが、できることはやってみるか。

「よし、そうと決まればさっさと行くこうぜ」

「い、一緒に行くよ!」

「僕も付き合うよ」

俺とお嬢、それからコータと小室が加わって4人で説得に行くことになった。宮本もついてこようとしたが、静香姉えに薬を塗るからとドクターストップをかけられた。悲鳴を上げながら逃げ回る宮本を静香姉えが追いかけるという、非情に面白い光景が見れた。

薬を塗られるのは、そんなに痛いもんなんだろうか。

冴子さんは、高城会長の頼みでそっちに付き合ってもらうことになった。沙耶の母親はジークにプレゼントがあるらしく、ありすとジーク、ケンジさんはそっちについて行った。

「上坂君、と言ったか。君にも後で話がある。そちらの問題が片付いたら私のところへ来てくれるかね」

「はい。分かりました」

高城会長から直々にお呼び出しをされてしまった。とりあえず、先に騒いでるアホどもを黙らせに行くのでしょうかね。

「コータ、説得に銃はいらねえぞ。無駄に刺激しちゃってもアレだし、部屋に置いてきてくれるか」

「あ、そうだね」

今回は戦闘するわけじゃないからな。俺たちがやるのは、あくまで説得だ。下手に武器を持つてるのを見られると面倒だ。武器を一旦置いてから、俺たちは問題の起こっている場所へと向かった。

高城会長が演説をした台の近くで、ざわめいている人ばかりがあった。集まった大人たちはざっと見積もって20人以上いる。

「ずいぶん多いなあ……」

「まあ、こんだけものが見えてない大人が多いってのは問題だな」

「そうだね」

「とにかく、説得するわよ」

こうして話し合いが始まった。ここに集まっている大人たちは、ニュースで放送されていた殺人病の情報を信じ切っているようで、殺すなんて人道的に間違っている。治療してあげるべき、という意見だった。

とりあえず、バカかと言いたい。治療するにしたって 奴ら をどうやって大人しくさせる気だろうか。基本的に会話も通じないつてのに。 奴ら はこっちを見境なく襲ってくるだけだ。イレギュ

ラーの中にはおぼろげながら話せるやつもいたが、あれは例外だろう。沙耶は集まった大人たちに、殺人病は政府の流したデマであると告げ、奴らは人間とは別のものだと言明した。

まあ、そこまではよかつたんだが……平和ボケしてる連中がそれを信じるはずもなかったのである。

「信じられるワケがないだろう、あれは新種の伝染病のようなものなんだきつと！」

実際はそうかもしれないが、どっちにしたって正当防衛は成り立つだろう。奴らは人間を殺す気で襲ってきてるんだからな。

「死んで動き続けるものに納得の行く説明があるワケないじゃない！」

「だが、実際に動いているんだから何かしらの理由があるはずだ」「そうよ、理由もなしに起こることなんてないわ！」

沙耶と主に話している中年の男と目の細いオバサンは、常識を盾に食い下がってくる。まあ、非常識の塊がここにいるワケだが。

沙耶は、たわ言を正論でねじ伏せてオバサンたちを黙らせた。流石と言うべき手腕だった。

「アタシたちは 奴ら に食われず生き続けるしかないの。その為にどうしたらいいかはさつきパパが説明してくれたでしょ」

「……そういうことね」

オバサンは意を得たり、とばかりにイヤな笑みを浮かべる。

「みなさん聞いてください！ この子は、殺人を肯定する男の娘で私たちにも殺人者になれと言っています！」

「あの……いったい何の話をしてるんですか？」

小室の言っていることはひどくまともだ。それすら、現実から目をそらした大人たちには通じない。怒りの込められた目でにらみつけてくる。

「子供が口を挟むことじゃない！」

子供か、あんたたちよりずっと現実が見えているんだがね。

その後も大人たちは、獣のようなヤクザには任せられないのだと言っていた。助けくれたはずの相手をバカにしているのを見て、俺の中にふつつつと怒りがこみ上げてくる。

「沙耶、ちよつと代わるぞ」

「え？」

俺はヒートアップした大人たちのほうへ向かって歩み寄る。怒りはできる限り内に抑え込んだが、それでも人を殺しそうな目つきになってしまう。顔は笑っているが、目が笑っていない状態だ。俺を見た大人の1人が悲鳴を上げる。

「ちよつといいですかねえ？」

「な、なんだキミは……？」

怪訝そうに俺を見る大人たちの無遠慮な視線には構わず、俺は続ける。

「聞いておきたいことがあるだけです。これから具体的にどうするんですか？」

俺の視線に耐えながら、オバサンは話す。思ったより根性あるな。

「そ、そうね。ボランティアを集めて殺人病の人達を治療しましよ
う」

「殺人病の方は、どうやって連れてくるんですかね？」

「そ、そんなの外にいけばいくらでもいるじゃないか」

「殺人病の方は会話が通じませんが、それについての解決策は？」

「た、高城会長のほうに助力をお願いして人員を割いてもらえば…

…」

「それはつまり、力づくで連れてくるってことですよ」

淡々と質問を繰り返す俺に、騒いでいた大人たちはついに黙った。

「あなたがどうしようと勝手ですが…：助けてもらった相手を
バカにするのも大概にしてくださいね。『大人』なんですから」

まあ、こんなものか。結局、こいつらは現実が見えてないだけだ。
これ以上話しても時間のムダだろう。俺は沙耶たちとその場を離れ
たのだった。

「アンタ…：ただのバカじゃなかったのね」

「ひっでえな、オイ!？」

沙耶は心底感心したように目を丸くしている。なんだろう、せつ
かく上手くいったのにこの反応は。小室にコータまでうなづいてや
がる。お前ら、人のことをなんだと思ってたんだ。まるで俺が脳筋み
たいに…：まあ、否定はせんが。

「京也、怒ってる？」

「ああ、すっげームカついた」

命を助けてもらっておいて、その相手すらバカにしてるんだからな。ああいうバカどもの面倒まで見切れない。

「でも、ヤクザと右翼って似たようなものだから」

「うちは違うのよ、利権右翼とかヤクザには命を狙われたこともあるわ！」

「で、でも、活動にはお金がたくさんいらすよね？」

「私も天才だけど、ママも天才なのよ」

沙耶の母親は、知らない人間がいけないほどの凄腕トレーダーだったらしい。高城会長と結婚してからは、その才能をフルに発揮して財産を100倍に増やしたそう。金つてのは集まる場所には集まるもんなんだな。

「なにも見て来なかったのか、あの連中は」

「現実から目をそらしてる、ってことだろ」

「ちよつと分かるけどね、あの連中の気持ち。人間って見たくないものは見ようとしなから」

確かにそうかもな。俺だって自分の身体がおかしくなっていることを認められなかった。とことんまで追い詰められなければ、人間つてのはそう簡単に現実を直視することができない生き物なのかもしれない。

小室も思うところがあったのか、少しだけ表情を曇らせている。

「現状を元に戻そうとするのは……当然の反応ってことだな」

「なるほどなあ……勉強になったよ」

納得しながらうなづく小室を見て、笑う俺につられてお嬢とコー

夕も笑い声を上げる。

小室は、変化を素直に認めることのできる人間だ。だからこそ、俺たちのリーダーたり得ている。

「な、なんだよ？」

「そういうお前だから、俺たちのリーダーってことだよ！」

「はあ？」

分かってないな。まあ、それでこそ小室だと言えなくもないか。

『い、いたいのだめえええっ！』

上から宮本の情けない悲鳴が聞こえてきて、俺たちはみんなで顔を見合わせて大笑いしたのだった。

第11話「名前を呼んで」（後書き）

更新遅れて申し訳ありません！

感想をくださった方にお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。うございます。

上坂がチームに復帰しました。あとはようやくヒロインの名前を呼びましたね。だいぶ強引に話を進めましたので、見づらい点などがあるかもしれませんが。意見や感想などがありましたら一言でも頂けると嬉しいですよ。

さて、原作ではそろそろ冴子さんが村田刀を入手するところですが、上坂にも新しい武器が必要になってきました。何か良さげな武器があればいいんですが……。

最後に、読んで頂いた方に感謝を致します。

第12話「せめて、後悔しない選択を」

騒いでいた大人たちの『説得』を終えた俺は、沙耶に高城会長のところへ案内してもらおう。沙耶の住んでいる屋敷は広すぎて、俺みたいの不慣れな人間が迷うには十分すぎるからだ。

高城会長が待っていたのは、屋敷の奥のほうにある場所だった。ここは他の部屋とは違って和室である。『敬天愛人』と書かれた掛け軸が飾られており、下には横に置かれた日本刀があった。まるで時代劇で出てくるような部屋みたいだ。

俺と沙耶は、畳の上に置かれた座布団に正座で腰を下ろし、胡坐をかいた高城会長と向き合っている。

「わざわざ呼びつけたのは、他でもない。君自身について聞かせてくれるかね」

そうだよな、でなければ忙しい身分の人が俺をわざわざ呼ぶわけもないか。

高城会長と初めて会ったのはDと戦った時だから、俺の髪と目は赤く発色していた。その上、ただの高校生が日本刀1本でDみたいな化物を倒したのだ。ワケが分からなくて当然だろう。

俺は、現時点で分かっていることをできる限り高城会長に話し始めた。俺の身体に起こっている異常。人を越えた身体能力や、これまでに会ったイレギュラーな奴ら についてだ。

「……まるで、夢物語のような話だな」

話を聞いた高城会長は、訝しげな表情を隠せないようだった。

「でも事実よ、パパ。こいつの力は見たんでしょ。身体が変化した

のも何かしらの理由がきつとあるはず。だけど、今の状況じゃそれを調べることもできないわ」

「ふむ……」

沙耶の言葉を聞いた高城会長から放たれる威圧感が、鋭さを増したのを俺は感じた。高城会長が一瞬で後ろに置いてあった日本刀を掴み、刀身を鞘から引き抜く。居合のように俺の首筋に向かって走らせる。

「き、京也ツ?!」

驚く沙耶とは対照的に、俺は表情を変えることもその場から動くこともせず、高城会長の動きを見ていた。日本刀の煌く刃は、俺の首筋に触れる寸前の位置でぴたりと止まっている。達人だからこそのできる芸当だった。

「どうして動かなかった？」

「会長の剣に殺気を感じなかったからです」

威圧感が増したが、俺を切ろうとする意志というか、殺気を感じられなかったのだ。そして、高城会長が理由もなく人を切るとも思えなかった。だから俺は動かないという選択をしたのである。

「はははっ、見抜いていたか！面白い少年だ！」

高城会長が豪快に笑いながら、日本刀の鞘に刃を納める。沙耶が安心したようにほっと息をつく。再び腰を下ろした高城会長の表情は、和らいだものになっていた。

「大した胆力だ。これならば、今まであの地獄を生き抜いてきたと

いうのも領ける。君は、これからどうするのかね？」

「仲間の両親は、まだ街にいます。恐らくは助けにいくでしょう。どれほど危険だとしても」

高城会長は、黙ったまま俺の言葉を聞いてくれている。

「こんな、人間かも分からない自分を沙耶さんや小室たちは『仲間』だと言ってくれたんです。だから、自分は自分を信じてくれる仲間を守る為に力を使いたい。そう思っています」

例えこれが、人の道から外れた化物の力であつたとしても構わない。俺にものであるのなら、どんなものであつても俺の目的の為に使わせてもらうだけだ。

「……友の為に剣を振る、か。気に入った！ ならば武器がいるだろう。蔵にあるものを持っていくがいい」

「ありがとうございます」

俺は、高城会長に深々と礼をして和室をあとにした。

「ハア……びっくりして心臓止まるかと思つたわよ」

「もし沙耶がぶつ倒れたらマッサージと人工呼吸は俺がやってやるよ」

「ば、バツカじゃないの!？」

「はっはっは！ いてえッ!？」

半分冗談混じりに言つたセリフに、顔を赤く染めた沙耶のキツクが尻を蹴飛ばしたのだった。

高城家の蔵へとたどりついた俺たちは、カギを開けてもらつて中に入った。薄暗い蔵はどこか埃っぽい空気が漂っている。蔵には日

本刀を中心に、槍や甲冑など様々な武具が揃っている。これだけあれば戦でも始められそうだと思いつながら蔵の中を物色していると、隅のほうに置いてある白い布に包まれたものを見つけた。

「こいつは……？」

何故かそれが気になった俺は、布を取ってみた。

それはあまりにも無骨で、一見するとただの鉄の塊にも見えた。刀身の長さは2メートルに近く、俺の身体くらいはある上に幅もかなり広い。あまりにも規格外の大きさを持った武器だった。

刃の造りなどを見ると、まっすぐな刃紋のようなものが見えるから一応は日本刀なのだろうか。ナタの刃を大幅に分厚くして、かなり巨大にしたような感じである。

確か、マンガで似たようなものを見たことがある。これの名前は。

「せんばとう斬馬刀か」

馬すら切り捨てると言われた超重量の武器だ。鎧を着ている相手すら関係なく両断するが、こいつはその中でもさらに桁外れな気がする。

俺は、柄を力強く握り巨大な斬馬刀を両手で持ち上げる。見た目からそうだったが、相当な重さだ。前の俺なら持ち上げることすら相当に難儀しただろう。両腕に確かな重みを感じる。

鈍い光を放つ刃は厚く、とても頑丈そうだ。振れば 奴ら を真っ二つにすることができそうである。これならかなり無茶な使い方をしてもしよう簡単に壊れはしないだろう。 奴ら のような化物と戦う俺にとってこの上なく『向いている』武器だ。

「お気に召したかしら？」

「ああ、こいつにするぜ」

「はいはい。まあ、こんな重いものアンタ以外には使えないか」

これでまた沙耶やみんなを守ることができると言える。鞘はないようなので、背負うようにして帯刀することにした。俺は斬馬刀の刃に布を巻き直して蔵から持ち出した。

こうして俺は、新たな得物を手に入れたのだった。

部屋に戻った俺は、屋敷を出る為の準備を整えている。斬馬刀を担ぐ為の皮紐は用意してもらったので、引っかければ持ち運びは何とかなりそうだ。

俺は部屋のテーブルに立てかけられた2本の木刀を見る。度重なる戦闘でボロボロになってしまった俺の武器。地獄が始まってから一緒に駆け抜けてきた相棒はもう限界だった。だから、ここに置いていく。

「今までありがとな。助かったぜ」

こいつがあつたから、初めて 奴ら に囲まれた時、沙耶とコータを守り切れた。数え切れないほどの 奴ら を倒してきた。感謝を抱いたまま、相棒に背を向けて部屋を出た。

かつての相棒との別れを済ませた俺は、正面門があるところへ向かった。既に小室チームは冴子さんを除いて全員集まっていた。

小室から話を聞くと、両親を探すので街に戻るらしい。宮本も一緒だ。親孝行な小室のことを気に入った高城会長は、小室の為に乗り物を用意してくれたらしい。

8輪のゴツイ水陸両用のバギーが停まっていた。しかも、軍用モデルらしい。またすごいものをくれたな。

「どうだい、なかなかだろ？」

「う、運転できるかな」

バイクは乗ったことのある小室も、さすがに不安そうだった。松戸さん、と呼ばれたメカニックの男性は心配ないとばかりに笑って言う。

「バイクを無免でいけんたる、基本は同じだ」

松戸さんから説明を受けた小室は早速バギーに乗り込む。アクセルを回転させてバギーを勢いよく走らせる。馬力の強さに驚きつつも、何とか転ばずに運転してみせたのは流石と言うべきだろう。

「こりゃいいな！」

「こいつなら 奴ら をぶっ飛ばして進めそうだ」

面倒なら水の中にも入れるそうだ。というよりも可能ならば公園や河原を走ったほうがいらしい。舗装された道ではタイヤの水かき用の山がすぐに崩れてしまうとのこと。

「本当に2人だけで行くつもりなワケ？」

「僕と麗の親だからな、沙耶たちに迷惑はかけられないよ」

厳しい表情で問いかける沙耶に、小室は仕方ないと言った感じで返事をする。俺は小室の背中をぶっ叩いた。

「ぐ……か、上坂？」

「なあに水臭いこと言ってんだ。だいたい、2人だけでどーやって親御さん救出するつもりだよ」

「確かにそうだけど……上坂、ついてくるつもりか!？」

「おいおい、何のためにこんな重いもん持ってきたと思ってんだ」

そう言って俺は、背中に背負った斬馬刀を見せる。今は刃の部分を白い布で巻いてある。

「おつきいねー！」

「わん！」

ありすが歓声を上げる。小室たちは俺の新しい武器に驚いているみたいだ。

「お前には驚かされてばっかりだな」

「ちったあ役に立てると思うぜ。だから俺も連れていけ」

「やっぱり……アンタも行くのね」

沙耶の表情はどこか悲しそうだった。俺は努めて明るく笑いながら言う。

「らしくねえぞ、沙耶。死ぬワケじゃねえ、『必ず』生きて戻ってくるんだ。だから待っていてくれよ」

「……いいわ。絶対だからねっ！」

冴子さんがやってきたのは、ちょうどその時だった。服装が変わっている。上着はウチの制服だが、タイトな黒のスカートには深いスリットが入っていた。黒いガーターストッキングからのぞく白い太ももが実にいいバランスである。脚と関節には黒いサポーターが装着されていた。凜々しさの中にエロスが漂う格好の冴子さんを、宮本がジト目で見ている。

「なんてーかさ、狙ってない？」

「いや、ありゃ天然だろ」

「つぎね……」

宮本の言いたいことは分かるけどな。本人に自覚はないだろうよ。ほら、冴子さん小首を傾げてるぞ。

「私も連れて言ってもらえるかな」

「だから、私たちは……！」

「さつき上坂君が言った通りだ。ご家族を救出するにも人数は必要だよ。私も役に立てると思う」

冴さんは腰に帯びた日本刀に手をやって存在を主張する。村田むらた刀という名刀らしい。冴さんも武器を手に入れたのか。木刀ですらかなりのものだったのだから、この人が真剣を持ったらどれほど強いのだろうか。一度戦ってみたいと思ってしまうのは、やっぱり何かに影響されてるんだろうか。

「だってさ、どうするよリーダー？」

小室は少し困ったような表情を浮かべながらも、俺と冴さんを連れていくことに同意した。

こうして、俺、小室、宮本、冴さんを加えた4人のメンバーで小室と宮本の両親を探しに行くことになった。高城会長がここを発つのは2日後だと言っていたらしいから、それまでには戻れるようにしないとな。

「んじゃ、あとは頼んだぜコータ」

「任せてよ……」

静香姉えにありす、ケンジさんたちには沙耶と一緒に残ってもら。また会うまでしばらくお別れだな。

「あーっ、やったやった思い出したあ！」

静香姉えが嬉しそうに飛び跳ねている。嬉しさのあまり、ジークをだっこしているありすを胸に抱きしめていた。巨大な胸で溺死寸前のありすとジークは苦しそうだ。なんだあの天国と地獄。

「どうしたよ、静香姉え？」

「やっと思い出したの、お友達の電話番号！」

「あー、やっと思い出したのか、南さんの番号」

南さんの番号は俺の携帯にも登録されてたんだが、バッテリーがなくなってたから調べようがなかった。静香姉えも携帯とか学校に忘れてきたせいで今まで思い出せなかったんだろう。

「友達って……銃とかハンヴィーとか持ってた人ですか？」

「うん、SATの隊員だから合流できたらすごいわよ」

戦力としても魅力的だが、南さんのマンションで色々なものを借りてるし礼も言っておきたいところだ。おかげさまで、ここまで生き残れたんだ。無事であってほしいんだけどな。

「京君、電話電話っ」

「俺のはバッテリー切れだ。小室持ってねえ？」

「ああ、それなら……」

小室から携帯を借りようとしていると、いきなり宮本がものすごい勢いで飛び出して行った。何かと目を向けると、門のほうに藤美学園のマイクロバスが停車しているのが見えた。バスの周りには、俺がぶっ飛ばした角田とかいう金髪や紫藤に賛同していた生徒たち

の姿があつた。そして、当然のことながら紫藤もいる。にこやかな笑みを浮かべながら、憂国一心会の黒服を着たそこそこ偉そうなチヨビ髭のおっさんと話をしている。

「よくまあ、ここまでたどり着けたモンだ」

俺も人のことは言えないだろうが、悪運強いなあいつ。

「いやあ、こんな時に紫藤代議士のご子息をお助けできるとは。たいたしたものですが、学校からここまで生徒たちを連れて脱出されるとは教師の鑑ですな」

紫藤つて、代議士の息子なのか。だからなのか、黒服の態度が妙に媚びてる感じがするのは。

「こちらは大変なのはわかっていますが……生徒たちだけでも助けただけじゃないでしょうか？」

その態度は、知らない人間が見れば生徒思いの優しい教師だろう。まあ、俺たちは本性を知ってるから感動も何もあつたもんじゃないが。大したもんだよ、演技もここまでくれば賞賛に値する。

「ずいぶんとご立派じゃない。紫藤せ・ん・せ・い？」

宮本は、一直線に紫藤のそばへ走って銃剣を装着したライフルを紫藤の顔に突き付けている。あと少し動かせば、紫藤から真っ赤な血が流れ出すだろう。紫藤の表情が凍りついている。死んだはずの生徒が生きて目の前に現れた上に、自分を殺そうとしているんだから無理もない。

紫藤を見る宮本の瞳は、ひどく冷たかった。いつ殺してもおかし

くない。そう思わせるだけの雰囲気がこの宮本からは感じられた。

「み、宮本さん。よくご無事で……」

自分で見捨てておいて、白々しいにも程があるだろ。俺たちは宮本がどうして紫藤を憎んでいるのか、知ることになる。

宮本の父親が紫藤議員について調べていたこと。その父親が娘を留年させて泣いたということ。成績には全く問題がなかったはずの宮本のデータを改ざんできたのは、紫藤だけであるということだった。大した小悪党じゃねえか、紫藤。

今まで、宮本は復讐心を押えこんできた。父親がいつか紫藤議員を逮捕できれば紫藤も法によって裁かれる。

「でも、もう……ッ！」

だが、世界はぶっ壊れてしまった。抑え込んでいた感情を止めるものはなくなってしまったのである。銃剣の切っ先が、わずかに紫藤の肌を破り、一筋の血が流れ出す。周りの人間たちが集まってきた、一気に空気がざわめく。

「警察官の娘でありながら、殺人を犯すつもりですか？ は、犯罪者になると？」

「あんたになんか言われたくないわよッ！」

「ならば、殺すがいい！」

重く響いた高城会長の声が、騒がしかった周りを一瞬で静まり返らせた。高城会長は威圧感を振りまきながら登場する。紫藤の父親とは関わりがあるらしいが、今となっては無意味であると切り捨てた高城会長は、宮本に告げる。

「望むなら、殺せ。むろん、私も必要があればそうする」

殺人を肯定する言葉に、さつき騒いでいたオバサンやおっさんが意見しようとするが、高城会長の眼光で射抜かれて黙った。

高城会長は明確な答えを持っている。それは、人を率いるものとして必要なものだと思う。まったく、ただでさえ余裕がねえのに人の生き死にまで責任を持たなきゃならねえのか。つくづく子供じゃいらねえ世界だよ。

高城会長の言葉を聞いて、宮本の瞳に少しだけ迷いの色が混じるのが見えた。宮本を止めようと駆け出す小室の肩を冴子さんが掴んで止める。

「冴子さん……」

「宮本君は自分で決めなければならない」

冴子さんは分かっている。俺たちにあいつを止める権利なんかないってことを。沙耶は動かない俺を見て問いかけてくる。

「アンタは止めないの？」

「選ぶのは宮本^{アイツ}だ。宮本には紫藤を殺すだけの理由がある」

俺らにできるのは、紫藤を殺すにせよ、殺さないにせよ 選択したあいつを仲間として受け入れてやることくらいだ。

だけどな、宮本。殺したら、お前は大嫌いなあいつを死ぬまで背負わなきゃならないんだぜ？

死の淵に追い込まれた紫藤は、額から冷や汗を流し、口の端を吊り上げながら笑みを浮かべて叫ぶ。

「いいでしょう、殺しなさい！ 私を殺して、命ある限りその事実
に苦しみ続けるがいい！」

それが自分の与えられる最高の教育であると、紫藤は両手を広げる。宮本が決断するまでの時間は数秒だったが、ひどく長く感じられた。

結局、銃剣は紫藤を貫くことはなかった。宮本は復讐を天秤にかけた上で、紫藤を『殺さない』という選択をしたのである。紫藤に背を向けて去っていく宮本に、高城会長が声をかける。

「それが君の判断か？」

「殺す価値もありませんから」

「それもまた、良し！」

吐き捨てるように言い放った宮本を見て、高城会長が大声で笑っている。紫藤は怒りで拳をわなわなと震わせながら、顔を歪ませていた。

「お前たちは去れ！ お前の生徒たちもな！」

高城会長の一声で、紫藤と生徒たちはバスに戻されて再び 奴らの徘徊する街へと送り返されるのだった。

「許されざる行為だと思いますか？」

バスに押し込まれている紫藤たちを眺めていた俺と小室に、沙耶のお母さんが問いかけてきた。同じような立場に置かれたらどのような選択をするか、ということか。小室は複雑そうな顔をしながら答える。

「……やっぱり、わかんないです。すみません」

「これまでなら、その態度を褒めてもいいが……生き残りたくば大

急ぎで学ぶことだ」

「あ、はい」

「あなたはどうかしら、上坂君？」

「どう行動するにしても、後悔しない選択をしたい。そう思ってます」

もし、殺すと決めたなら殺す。あとで後悔はしない。自分の心に正直にあること、それが俺の考えである。

「己の心に純粹である……か。よい答えだが、人を率いるには向いていないな」

「ふふっ、そうですね」

「ええ、自覚はしています」

だから俺は、小室を支えていくとしよう。我らのリーダーには成長してもらわんとな。

「麗……あのさ」

宮本を慰めようとした小室を、宮本は拒絶した。振りかえった宮本の瞳は、涙で濡れている。

「慰めないで……それだけはイヤなの。紫藤のことを相談したい時だってそうだった。だから私、永に話して……」

「……ッ?!」

なるほどね、これで色々と腑に落ちなかったことが理解できたぞ。宮本が井豪と付き合った理由とかな。

「でも、もういいわ。これで終わった。あとは『これから』がある

「だけよ、大変そうだけどね」

涙を拭いながら、宮本は笑顔でそう言った。こうして、宮本の起こした騒ぎは一応の解決をみせたのである。

「パパ、見えないよ」

「ああ、ごめん。もう大丈夫だよ」

宮本が殺人するかもしれないからケンジさんはいりすの目を隠していたのか。ナイスな判断だが、ありすは頬をハムスターのように膨らませて「立腹のようだ」。

「なあ静香姉え、電話かけんじゃなかったのか」

「あ、そうそう……えーつと、ここが1だから」

静香姉えは、小室の携帯を借りて指で1つ1つボタンを押している。もどかしさのあまり、手伝ってやりたい衝動に駆られる。

「俺がやるつか？」

「わかんなくなるから、だあめ」

「さいですかー」

どうにか番号を押した後、ややあつてから電話がつながった。

『もしも……』

「あーリカあ、生きてたねー！ あたしも京君も色々大変だったんだけど……」

『ああ、弟君も無事なのね。だったら大丈夫か……今どこにいるの、あたしの部屋？』

「あそこはもうダメ。ゴメンね、勝手に鉄砲とか借りちゃって」

『それはいいから、今どこに』

どうやら、南さんも無事のようだ。知り合いの生存が確認されて嬉しい。静香姉えの表情もすぐく明るい。安心していたその時、空が光った。夕暮れ時のはずが、一瞬だけ真昼のような明るさに包まれたのである。

ひどく、嫌な予感がした。不安を後押しするように、不快な音を立てて通話が突然に途切れる。

「え、もしもし、リカあ?!」

そして、地獄のような状況はさらに加速していく。

第12話「せめて、後悔しない選択を」(後書き)

前回の投稿から非常に間が空いてしまい、申し訳ありません。

仕事が……仕事さえなければ(泣)

と、言い訳はこれくらいにしておきます。

さて、新しい武器の入手と紫藤のイベントが終了しました。アニメ版だと高城家脱出までなので次で1クール目が終わりるところです。

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。

このような未熟な作品を応援してくださるみささまには、いつも感謝しております。もっと文才が欲しい今日この頃です。

誤字・脱字、おかしいところなどありましたらどうぞ。

最後に、読んでくださった方に最大限の感謝を。

第13話「これで終わりじゃない」

夕方の空に瞬いた光は、花火のように弾けてすぐに消え失せた。妙だったのは、火薬の炸裂する音が一切しなかったという点である。なんだったんだ今のは？

「えへへ。小室君ごめん、ケータイ壊れちゃった」
「ええ」

静香姉はすまなそうに小室の携帯を返している。いくら静香姉が機械に対して無器用だとはいっても、こんなに簡単にぶっ壊れるもんだろうか。しかも普通に通話をしている最中だったのに。沙耶も何やら考え込んでいる顔だ。

俺は周囲の状況を観察することにした。屋敷で作業に使っていた車はついさっきまで動いていたのに、現在はモーターすら回らず完全にエンジンを起こしているようだった。ペースメーカーを使っていた男が胸を押さえながら倒れ、妻らしき女性が周りに助けを求めて叫んでいる。

「こないっぺんに色んなことが起こるなんて……」
「偶然にしちゃ出来過ぎだな」

嫌な予感をひしひしと感じながら、俺は考える。ペースメーカーの故障、突然のエンストに携帯電話の切断。そして、これらが同時に発生したということが何を意味するのか。

「停電と同時にPCが全部死にました！」

高城会長の部下が焦った様子で報告しているのが聞こえてきた。

沙耶が、なにか思いついたのか宮本に指示を飛ばす。

「宮本、銃のドットサイト覗いてみて。あんたのはIC制御のはずだから」

「うん」

ドットつてのは、スコープについてる照準のことだよな。宮本が銃剣付きのライフルに取り付けたスコープを覗き込むと射線上にいた沙耶が慌てて飛び退く。

「ドットは見える？」

「ん〜、見えない」

「やっぱり……」

「どづいづこつたよ、沙耶」

見たところ、コータのほうについてるスコープは問題なく動いているようだ。

「アンタなら、原理は分からなくても勘で気づいてんじゃない？」

「さっきの光で電子機器がぶっ壊れた、つてのか」

「そうよ……パパ、計画を立て直さないとダメ！ これはきつと」

沙耶が高城会長に何か言おうとしたちょうどその時だった。門のほうから男の悲鳴が聞こえてきた。

「は、入ってきたあああつ！」

屋敷の外から駆け込んできた1人の男がいた。男は必死な形相で来るな来るなと連呼しながら逃げ込んでくる。しかし、門に足を踏

み入れたところで、背後から襲いかかる 奴ら に肩を掴まれ、そのまま身体を食いちぎられてしまった。

奴ら だ。それも1匹や2匹じゃない。門の外にいる 奴らは数えるのがバカらしくなってくるほどの大群で押し寄せようとしていた。

「門を閉じよ！ 急げ、死人どもを中に入れるな！」

高城会長の判断は早かった。状況を察知するやいなや、素早く部下に指示をする。

「会長！ ですが、それでは外にいる連中を見捨てることに……」
「今閉じねば全てを失う、やれッ！」

有無を言わせぬ口調で命令を下す。これが、人の上に立つ人間というものか。どこまでも合理的で、冷徹にさえ見える判断。自らの迷いが全員を殺すことになるかと理解しているからこそその行動なのか。高城会長の激に、浮き足だっていた会長の部下たちが一斉に動き始める。すぐさまリモコンの遠隔操作で屋敷の門を閉じようとするが、故障していて動かないようだった。

「クソ、こんな時にッ……誰でもいい、門を閉める！」

高城会長の部下は数人がかりでどうにか門を閉める。格子の隙間から血に濡れた腕がいくつも突き出している。門を突破して 奴らが1匹入ってきてしまった。

「じ、銃を持つてるんだから、早く何とかしなさいよ！」

急に訪れた危機に直面してヒステリックに叫んでいるオバサンの

雑音が耳障りだ。俺はコータに話しかける。

「やれるか、コータ？」

「誰に言ってるのさ！」

俺に言われるまでもなく、コータは既にライフルを構えて銃口を侵入してきた 奴ら へと向けている。ゆらゆらと緩慢な動きで歩いている 奴ら などコータにとって動かぬ的に等しいのだろう。

騒がしい空気を切り裂いて1発の銃声が屋敷に轟く。コータの銃撃は確実に侵入してきた>奴ら<の頭部を破壊した。頭の半分が弾け飛び、力を失った>奴ら<の身体が閉じた門にぶつかりながら崩れ落ちる。

「ま、こんなもんかな」

非の打ち所がまるでない、見事なヘッドショットである。これで一時的にこの辺りは安全地帯になった。

「会長、奥様、得物をお持ちしました！」

黒服の1人が、銃器を会長たちに手渡している。自分の武器を受け取った沙耶の母親は、動くのには邪魔だとばかりにドレスの裾を自らの手で破り、太ももにハンドガンの付いたベルトを巻きつけた。腰にはマシンガンまで携帯している。

「ママ……」

「ひゅっ、豪快だねえ」

戦闘準備を完了した沙耶の母親は、高城会長に銃を渡そうとするが銃は不要だと断っている。刀のみでやるつもりらしい。そうして

余った銃が沙耶のところへ回ってくる。銃身の先端部分が細くなっているのが特徴的なハンドガンだった。丸いタイプのマガジンも一緒に手渡している。

「ルガーP08ストックとドラムマガジンまで……」

コータは目を輝かせている。こんな状況でも相変わらずなやつだ。いきなり母親から銃器を渡された沙耶は戸惑っているようだった。

「こ、こんなの渡されたって使い方がわからないわよ」

「撃ち方はあなたが教えてあげてくださるわね、平野くん？」

「は、はい……」

いきなりのご指名に平野が元気よく返事をしている。まあ、適任だろう。コータなら上手く教えてやれるはずだ。

「んで……何がどうしてこーなった？」

「あの妙な光の後だよな、ケータイとか車が壊れたの」

小室の言葉につなづきながら、状況を唯一まともに理解しているであろう沙耶が説明を始めた。

「EMP（電磁パルス攻撃）よ。高々度核爆発、ともいうわ」

沙耶の説明を簡単にすると、大気圏の上空で核をぶっ放すと電磁パルスなるものが発生して、電子装置がイカレちまうってことらしい。つまり、電子機器は一切使えないということだ。おいおい、かなりヤバいんじゃないかそれは。

「じゃあ……もう携帯とか使えないの!？」

「ケータイどころかPCや車もよ。たぶん発電所もダメでしょうね」

沙耶の話では、EMP攻撃の対策をしていれば別だそうだが、そんなもんは政府や自衛隊などのごく一部しか施してないらしい。

「直す方法はあるのか？」

高城会長が沙耶に向かって聞く。相変わらず普通に言葉を話すだけで威圧感のある人だった。

「灼けた部品を変えれば動くかも……全部が全部壊れたワケじゃないだろうから電波の影響が少なければ生き残っている可能性も」

あとは、電子機器を使っていない昔の車なんかは大丈夫らしい。絶望的な状況だが、まだ希望はあるようだ。

「すぐに調べる」

「はっ！」

高城会長が部下に指示を飛ばしている。うまく動いてくれるものがあればいいんだがな。

「沙耶。この状況でよく冷静に物を見た。褒めてやる」

「パパ……」

自分の父親に褒められた沙耶は、嬉しそうな顔をしている。実に微笑ましい光景だ……と言いたいところだがさてどうしたものだろうか。俺たちは、電気関係をほぼ全て奪われた。最悪の状況がさらに悪化し、これから先に迎える夜は完全な闇だ。ローソクとかランタンがねえとまともに動けそうにない。

俺たちが沙耶の説明を聞いている間にも、門の外にいる 奴らはさらに数を増していた。鉄で出来た門はかなり頑丈そうだが、> 奴ら<の数はあまりに多すぎる。門前の道路を埋め尽くさんばかりに> 奴ら<が押し寄せているのだ。今は高城会長の部下の数人が押え込んでいるが、耳障りな音を立てながら鉄の門は軋み続けている。止めどなく押し寄せる 奴ら の圧力に耐えられなくなった門が決壊する。

この場にいた全員表情が凍りつく。俺もその例外ではなかった。一斉に 奴ら がなだれ込んできた。門のそばにいた人間は逃げ暇もなく 奴ら の大群によって飲みこまれてしまう。

「か、会長おお、逃げてください！ は、はやぐああぎ……」

男の断末魔を皮切りに、> 奴ら<は門の近くにいる連中から順番に襲っていく。逃げる者、手に武器を取って> 奴ら<に反撃する者もいるが……見るも無残な結末に終わってしまう。

「パパ、家に立て籠って……」

「守って何の意味がある。押し入れられ食われるだけだ！」

高城会長は、激を飛ばして全員に呼び掛ける。まだ安全な隣家のほうへみんなを避難させるようだ。無論、その為には> 奴ら<を突破しなくてはならない。これだけの大群を相手にである。

俺は斬馬刀に巻いていた布を勢いよく引き剥がした。むき出しになった斬馬刀を担ぎながら 奴ら のほうに向かって一歩踏み出す。

「上坂、どうする気だよ!？」

「ちよつくら時間を稼いでくる」

このまま立てこもるにしても、脱出するにも 奴ら の数は多す

きる。生き残りたかったら、戦うしかないだろう。

「そつだね。このままでは脱出もままならない」

冴子さんも俺の考えと同意見なのか、村田刀を鞘から抜いて戦闘する構えを見せている。互いに笑みを交わす。本当、話が早くて助かるぜ。

「んじゃ、行ってくる」

言葉は軽く、されど死地に踏み込む一步は決意のように重く。敵に向かつてただまっすぐに進む。

「アア！」

俺の接近に気付いて向かってくる 奴ら を標的にして斬馬刀を横に一閃する。 奴ら は血と臓物をまき散らしながら上半身と下半身に分かれて落ちる。間髪入れずに、近くにいた 奴ら をなぎ払うように斬馬刀を振るった。刃の届く範囲にいる敵はことごとく両断されていく。 奴ら の返り血を浴びながら、俺はさらに 奴ら の集団に深く切り込んでいった。

「ひ、一振りです、3匹がいつぺんに吹き飛んで……!!」

「私も、負けてはいられないなッ！」

冴子さんも俺に続いた。村田刀が振るわれる度に鋭く銀の光が奔り、 奴ら の首が空を舞う。冴子さんは返り血の中をまるで踊るように切り進んでいく。雑に 奴ら を叩き切っているだけの俺とはまるで正反対の剣である。

押し寄せる 奴ら の一角が崩れていくのが分かった。20を超

えたあたりで数えるのをやめたが、それでも押し寄せる 奴らは
まだまだいる。大して減った気がしない。

「どうした、息が上がっているぞ、上坂君」

「ハア、ハア……上等だ。まだまだやれる」

減らず口を叩いた直後、耳をつんざくような爆発音が轟いた。爆
発に巻き込まれた 奴ら が焼かれながら吹っ飛んでいるのが見え
る。火薬の匂いが鼻をつく。ダイナマイトを使ったのか。

「ア……ア」

俺に近寄ろうとしていた 奴ら の首が切られて飛んだ。刀を持
った高城会長とマシンガンを手にした沙耶の母親が立っている。

「若人ばかり、任せているのは私の性分ではないのでな」

「まったく、無茶をするものね」

沙耶の両親が先陣を切ってここまで切り込んできたのか。会長た
ちに続いて部下たちも銃を撃ちながら 奴ら と戦っているようだ。

「行くがいい、仲間の元に」

「ですが……！」

この数相手にいくら銃があるって言っても無謀だ。ならせめて沙
耶と一緒に……！

「……娘を頼む」

静かに、だがとてつもなく重い言葉。俺の心臓が一際大きく鼓動

するのが分かった。

「壮一郎さんと私には役割があります。せめてあなたや小室君に娘を託すのが親として精一杯の我がまま。そして、それにすら罪悪感を感じている」

人の上に立つ人間として、自分についてくる大勢の人間を見捨てることはできない。2人とも、覚悟を決めているのだ。そんな人間を説得する方法なんて俺は知らない。

「……はいッ、必ず！」

親として最も大事なものを両親から託された。ならば、約束は果たさなければならぬ。俺は冴子さんと共に小室たちの元へ走っていく。

俺は強くなった。普通ではなくなったが、少なくとも目の前にいる人を守ってあげられるくらいには強くなれたのだと思っていた。自惚れもいいところである。俺は仲間の両親を救うことさえできなかった……。

「……冴子さん、上坂！ 急げッ！」

どうやらバギーは無事だったようだ。先に乗り込んだ小室が俺たちを呼んでいる。絶叫と銃声の交差する混沌とした屋敷を駆け抜けながら俺と冴子さんはバギーに乗り込んだ。俺を合わせて9人と1匹もいるから、バギーのスペースはギリギリだった。

「行くぞ！」

小室がバギーを勢いよく発進させる。 奴ら をひき殺しながら

進んでいく中で、俺は後ろで振り落とされないように車体にしがみついていた。一陣の風と化したハギーは屋敷の門をくぐり抜け、道路を疾走する。ここから脱出できそうな場所は……。

正面の道路に、乗り捨てられたバスとバリケードに使われていたブロックの隙間がある。バギーでギリギリで通れるかどうかといったところだ。

「狭すぎるわ!」

「えええええ、無理よお!?!」

確かにキツそうだが、他に道はない。となれば男は度胸だ。

「突っ込め、小室オ!」

「よしッ!」

小室は最高速でハギーをカツ飛ばしてわずかな隙間に車体を滑り込ませる。判定は一瞬で下された。瞬きの後、俺たちは隙間をくぐり抜けていた。安心した空気に宮本がほっと息を吐いている。

「これでどうにか……あッ」

「なにも言わないで。お願いだから」

俺たちが生き残っているのは、逃がしてくれた人たちがいたからだ。地獄と化したあの場所には、まだ沙耶の両親が残っている。

「うあ……」

しんみりした空気の中、無理やり車体の後部にしがみついていた俺はどうにか車内に這い上がるうと腕を伸ばしている最中だった。さすがに態勢が辛かったのである。右手にムニユリと何か柔らかいものを掴んだ。例えるなら、えらく弾力のある焼き立てのパンのよ

うな素晴らしい感触だ。左手を適当なもので固定して、這い上がる為に、俺は指に力を込める。

「ふうんッ……!？」

どうにか身体を車内に滑り込ませることに成功した。シート感触が尻に心地よい。

「やっと上がったぜ。あーキツかつ……ん、どーしたみんな？」

運転してる小室以外なんか目を丸くして驚いてんだけど。俺は自分の右手が掴んでいるものを見て納得した。どうりでいい感触がするはずである。俺の右手は沙耶の豊かに膨らんだ胸をわし掴んでいた。

「おう、沙耶の胸だったのか。悪い悪い、痛かったか？」

「あ、あんたはああああッ!？」

「あべしい!？」

沙耶の光速の張り手が俺の顔面を直撃し、吹っ飛んだ衝撃でさらに宮本の胸に顔を埋める形に。

「ひっ、きゃあああッ?!」

後頭部を銃床でぶん殴られて俺の意識は闇に飛んだ。目覚めた後、俺が即座にとつた行動は車内で両手をついて土下座だった。

「すみませんでした!」

「本当……バカッ!」

まあ、痛かったけどいいだろう。しんみりしててもしゃーないからな。これで少しは気がまぎれてくれるといいんだが。うん、ありますと静香姉え以外の女性陣の目が冷たいことなんて気にしませんよ。

「これからどうするの？」

「悪いとは思いますが、僕と麗の親探しに付き合ってもらいます」

ここから小室たちの家、東署、小室の母親が勤めている小学校を回るらしい。全部回ってもハギーのスピードなら2〜3時間もあれば足りるだろうということだった。

「国道だ！」

冴子さんの声から間もなく、俺たちは開けた場所に出た。今まで通っていた路地とは違ってかなり広い道路である。

だが、俺たちは目の前に広がる光景を見て目を疑った。無造作に乗り捨てられた車、道には夕焼けに照らし出された血の跡が生々しく浮かび上がっている。国道には 奴ら が蠢いていた。

「いっぱい……」

「そう、だね」

ありすの言葉に、ケンジさんが乾いた返事をする。無理もない、ようやく切りぬけたと思っただらこれだからな。 奴ら は結構な数だ。このまま突っ切っていくのはさすがに無理だろう。

「どっしろってんだよ……」

「……音が出るモンがコレしかねーから、なのか？」

「ええ。おそらくは今この街で唯一のエンジン音よ」

だから 奴ら はこいつに群がってくる。光に引き寄せられる蛾のように。」

「このハギー水陸両用よね？ じゃあまた水に入れば！」

「この人数じゃ、浮くかどうか怪しいそうだ」

まあ、明らかに積載ギリギリだからな。むしろオーバーしてるんじゃないか。

「だったらどうすればいいのよ……」

「無理を承知で突っ切るか……いや、待て。沙耶、別な音があればいいんだよね？」

「まあ、そうね。何か思いついたの？」

結構ダーティな方法だからな。あんま胸を張れるもんじゃない。折角だからここにあるものを使わせてもらおうかね。

乗り手のいない車は、道路に放置されている。当然、車にはガソリンが入っているから銃でぶち抜けば引火するよな。

鼓膜を痺れさせるほどの轟音。爆発した車が燃え上がっている。狙い通り 奴ら は聞こえたでかい音に引き寄せられている。銃声が出て、直後により大きな音が出る為だろうか。その間に俺たちは離れた場所を通って逃げる。ハギーは置いていくことになるが、これでどうにか歩きでも突破できるだろう。

「こ、こんなので上手くいくなんて……」

「沙耶、あきらめろ。上坂が無茶苦茶なのはいつものことだ」

「そうですよ、沙耶さん」

「お前ら全員後で覚えてるよ」

軽口を叩きながらも、俺たちは 奴ら と極力戦わないように道

路を進んでいくのだった。そうして物資の補給をかねてとある場所へと立ち寄ることになる。

「ここなら、色々揃ってるはずだ」

目の前にあるのは、床主でもかなり大きなショッピングセンターだ。ここまでくれば、小室たちの実家は目と鼻の先らしい。

「さて、何が出るのかねえ」

何事もなければいいんだがな。

一抹の不安を胸に、俺たちはショッピングセンターに足を踏み入れるのだった。

俺たちは新たな場所へとたどり着いた。これからここで何が待っているのか、何一つ分かりはしない。それでも……俺たちは絶対に生き残らなきゃいけないんだ。

大切なものだけは、何としても守ってみせる。例えほかの何を失ったとしても構わない。

俺たちの戦いは　まだ終わりそうにない。

第13話「これで終わりじゃない」(後書き)

第一期、完！

投稿の感覚が空いてしまいとても申し訳ないです。

今回で完結……ではなく、まだ続きます。

読んでくださった方、全員に感謝致します。

追記：近い内にOVAネタで番外編を上げるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1002v/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD if ~イレギュラーの少年~

2011年10月20日02時04分発行